
天使と奏でるソナタ

音兎リエ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使と奏でるソナタ

【Nコード】

N0665J

【作者名】

音兎リエ

【あらすじ】

ピアノと子猫が大好きな少女フリアが連れて行かれたのは、音の国ムズイク。何故か彼女をローゼと呼び、彼女に近付くのはみんな美形な天使達！しかし天然だったり、ドSDMだったり、と一癖あるのが……。不思議な人々と過ごす日々はラブハプニングばかり！？常に甘く、時々切ない異世界ラブ甘ファンタジー *第二楽章
開始

第一楽章・演奏開始（プロローグ）

ローゼ

待っていたヨ

ローゼ

愛しいローゼ

ズット待っていた

ズット

ズット……

残酷なホド長い時ヲ

狂いソウになるマデ

ズット

待っていたんだヨ

もうすぐアナタに会エル

アノ血の涙を流すホド

寂シカッタ日々が

終ワリを告げる

さあ

ソノ白くて長い

美シイ指で

アナタだけの旋律を

奏デテ

アナタが楽しく奏でれば

人々は歌イだし

アナタが美しく奏でれば

木々の緑が輝ク

アナタとコノ国は

繋がっているんだヨ

アナタが死ねば

コノ国も滅ビルの

ローゼ

みんなのローゼ

みんなダケのローゼ

アナタを絶対に離さナイ

早くオイデ

早く

早く会いタイ

準備は整ツタ

時はもうすぐ満チル

後はアナタが

花を添えるダケ

美シイ

薔薇の花ヨ

ソシタラ

全てが終ワリ

全てが始マル

さあ奏でまシヨウ

極甘のソナタを

第一楽章・演奏開始（プロローグ）（後書き）

始まりの第一楽章は

『極甘のソナタ』

さあ、ローゼ

どうぞこちらへ

天使達がお待ちかねですよ

……てな感じで初めまして。音兎リ工と申します。

音兎の記念すべき第一作は、勿論恋愛！でございます。そこに私の得意分野の音楽要素を取り入れ、楽しく書き進めております。

因みにこの作品の題名、長いので私は一人でこっさり『天ソナ』と呼んでいます。是非読者の皆様にも、親しみを持ってそう呼んで貰えるよう頑張ります！

それでは『天ソナ』幕開けです

行ってらっしやいませ……

第一章・一、それは突然に

「フリア様、起きて下さい。フリア様」

「うーん……」

まぶしい太陽の光が降り注ぐ昼下がりに。一冊の分厚い本を枕に、木の根元の美しい緑の芝生の上で昼寝をしていた少女は、華奢きゃしゃな両腕を伸ばし「ふわぁ」と小さくあくびをしてから、ゆっくりと起き上がった。

十六歳の少女は、すらつとしたスタイルの良い体。透き通った白い肌、ぱつちりとした大きな瞳は澄んだスカイブルーで、少し潤んでいる。腰まで伸びた金髪のアートヘアは、降り注ぐ太陽に反射し、黄金に光り輝いていた。『美人』という言葉では表せないほどの美少女。白のシンプルでぴったりとしたワンピースを身につけている姿は、まるで小さな天使のようだ。

やっぱり、フリア様は美しい。

一枚の絵のような光景に、思わず目を細めるメイド。

「フリア様、お茶の時間です。今日はお嬢様の大好きなスコーンですよ」

優しく話しかけたメイドに、枕にしていた本をまた開き始めたフリアは見向きもしない。

「フリア様。よっぽどその本が気に入られたのですね。何の本なの

ですか？」

メイドの問いにやっと顔を上げた少女は、少し目を輝かせて言った。

「『不思議の国』の話ですね。とっても不思議で、楽しいお話ですよ。私も、行ってみたいな」

凜とした、でも鈴のように優しく綺麗な声が、メイドを穏やかな気持ちにさせる。

「そうなのですか。楽しそうなお話ですね」

穏やかな空気が漂う中、それを切り裂くように、カツカツと歩く鋭い靴音がした。

「フリーア。せっかくお茶を用意してもらったのだから、本を読むのはやめなさい」

「お母様……」

「そうですね。フリーア様、お茶にいたしましょう」

「わたくしも一緒にするわ」

「かしこまりました」

メイドがカップを取りに屋敷の中へと入っていった。

「あー、疲れたー」

フリアと呼ばれていた少女は、部屋に入るなりベッドに倒れ込む。鈴のような声は変わらないが、その口調はさっきまでの上品なものとは全く異なっていた。

「今時『』ですわ』なんて言わないっつーの！」

『相変わらずだねフリア』

誰もいない部屋の中。どこからともなく現れた一匹の黒い子猫が、フリアの膝に乗ってきた。

「ほんつとに疲れるんだから。今日なんてお母様とお茶よ？ お作法だとかなんとか知らないけど、せっかくのスコーンもまずく感じたわ！」

子猫の背中を撫でながら、溜め息をつくフリア。彼女は、動物と言葉を交わすことが出来るのだ。

「ねえ、そう思わない？ メーア」

メーアと呼ばれた子猫は、ミャーと鳴いた。

『あたしは、人間に生まれなくて良かったと思ってる。お疲れ様、フリア』

「いいわね、猫は気楽で」

メーアは、ベッドの横の丸テーブルの上に置いてある分厚い本に目を落とした。

『あんたが本を読むなんて珍しいね』

「学校の友達に借りたの。面白いから読んでって言われてね。はあ、早く学校行きたいなー」

『どんな話？』

その質問に、フリアの瞳がまた輝いた。

「『不思議の国』っていう所があつてね。そこはどの動物も人間みたいに二本足で歩いていて、みんな言葉を話すの。お花や虫も言葉を話すのよ。その国では、素敵な王子様が国を治めていて、そこに一人の女の子が迷いこむの……」

少し開けられた窓から入り込んだ柔らかい風が、カーテンをさわさわと揺らした。

『まったく、しょうがない子ね』

メーアは小さな寝息をたてているフリアに、前足で器用に薄い毛布をかけてあげると、ひょいっとベッドから降りて、ひなたぼっこのために庭園へ向かった。

《ローゼ。オイデ》

「誰の名前を呼んでいるの？ 私はフリアよ」

《イエエ、あなたはローゼ。さあ、こっちへオイデ》

暗闇の中、見えない何かがフリアに語りかける。

「違う。私はフリア」

《イエエ、あなたはローゼ》

諭すような声が近付いてくる。

「私はフリアよ」

《あなたはローゼ》

「私は……」

《あなたは……》

「私は……あれ？」

「フリア様。ディナーの支度が整いました。下においで下さい」

さつきとは別のメイドが、冷たい風のそよぐ窓を閉めながら言った。

「……私はフリア」

「何をおっしゃっているのですか？ お嬢様はフリア様です。それ以外の何でもありませんよ」

メイドは、少し微笑んで言った。

「さあ、下に準備が出来ているので、準備が出来たらいらっしゃって下さいね」

「……はい」

メイドがドアの奥に消えたのを見てから、フリアは呟いた。

「夢……か」

少し残念そうに。

開放感のある広い部屋には、一台の白いピアノ。フリアが父親に無理言って買ってもらったものだ。シャンデリアに照らされ、キラキラと輝く白いピアノ。

一日一回ピアノを弾くこと。それは、フリアの日課でもあった。

あの夢を見てから数日が経ち、彼女はその夢を忘れかけていた。そっとピアノ椅子に腰を下ろし、鍵盤に右手を乗せる。

トーン……

広い部屋に響き渡る『ド』の音。

うん。今日もいい感じ。

満足そうに頷いたフリアは、左手も乗せた。

静かに響き渡るピアノの音色。曲は、モーツァルトの『きらきら星変奏曲』。普通のきらきら星の曲が、だんだん変化していく。細かいフレーズが、星の瞬きを感じさせる。

《ローゼ。やっと会エル》

曲の中頃を過ぎたあたりで、声がした。

この声、もしかして……。

《さあ、オイデ》

急に周りの景色が歪み、紫と黒の混ざる渦に飲み込まれた。

「どづいづいとっ。」

驚いて叫ぶフリア。しかしピアノを弾く手は自分の意志に反し、まだ星の瞬きを奏でている。狂ったように響く旋律が、彼女の不安をかきたてる。

ぼん！

「な、なんなの！？」

急に地上に押し出された感覚。周りを見回すと、木々が生い茂っていて、少し薄暗かった。

「痛っ……」

足を見ると、膝から血が流れていた。この場所に放り出された時に、木の枝などで傷つけられたのだろう。

「いったいどこなの？ ここ……」

周りには生い茂る木々のみ。人気ひとけのない森は静かで、怖さが増す。

グルルルル……グアル！

へっ！？

大きな犬のような動物が、いきなりフリアの前に現れた。どうやら、近くで息を潜めていたらしい。鋭く光る銀色の瞳と、目が合った気がした。

これって……まさか狙われてる！？

グアル！

「キヤアアアア……！」

悲鳴が虚しく森にこだまする。足を怪我しているフリアは、立ち上がることが出来ない。

絶体絶命！ そう思った瞬間……

「光！」
ツレ

澄んだテノールボイスが、森に響いた。

犬のような動物が、光にはじかれ、遠くへと飛ばされていく。

「ローゼ様。申し訳ございません。少し飛ばす場所を間違えてしまいました。怪我もさせてしまったようで……」

申し訳なさそうに頭をさげるストレートの銀髪が肩まで伸びている男。さっきの声の主のようだ。

くすんだ白のスーツに身を包み、白い肌に切れ長で灰色の瞳。月の光に照らされ浮かび上がった整った顔に、フリアは言葉を失った。

「あの……」

「何でしょう？」

軽く首を傾げる男。そのちょっとした仕草が、乙女心をくすぐるというか、なんとというか……

「どちら様、ですか？ あと、私、ローゼじゃ、ないです……」

どぎまぎしながらも話すフリア。

「申し訳ございません、まずこちらの名を名乗るべきでしたね。僕の名前はヴァイス。貴女の案内人です」

恭しく頭を下げるヴァイス。その姿は、執事を思わせる。

「それと、貴女は間違いなくローゼ様です。証拠に……」

スーツのポケットから、光る薔薇色の石のついた銀の鎖のネックレスを出すヴァイス。

「この輝き……貴女がローゼ様である決定的な証拠です」

薔薇色の石が、強く光を放っている。

「綺麗……」

フリアは、その光を見つめながら、自分が少し落ち着いてきたのを感じる。この暗い中一人でいるのは、はっきり言って怖い。ヴァイスとは初対面だが、さっきのことから、彼とあればあのような化け物には襲われないと思ったのだ。

「これは、シュテルンといって、お守りのようなものです。貴女に差し上げます。常に身に付けていて下さい」

細い銀の鎖をフリアの首にかけるヴァイス。

「今日から貴女はローゼです」

フリア いや、ローゼは、こくと頷いた。

第一楽章・一、それは突然に（後書き）

* 登場人物紹介*

《フリア ローゼ》

主人公。お嬢様育ちで夢見がちな女の子。母親の前では上品な自分を演じるが、普段は普通の女の子。ピアノと子猫が大好き。

《メーア》

フリアの飼い猫。ひなたぼっこが好き。いつもそっけない態度ばかりだが、フリアのことを慕う優しい一面も。

第一楽章・二、音の国ムズイク

「さあローゼ様。行きましょう。夜が明ける前に」

ローゼに恭しく手を差し出すヴァイス。

「でも怪我してるから……」

「あ、そうでしたね」

あっけらかんと言われ、ローゼは少し黙った。

彼のせいで怪我したのに……。

「それでは」

そんなローゼに構わず、ヴァイスは彼女をひょいっと持ち上げた。

え？ なにこれ？ お姫様抱っこ！？

初めての事に恥ずかしさを覚え、足をばたつかせるローゼ。そして足の怪我が痛み、少し表情が険しくなる。

「大人しくして下さい。』すぐ』着きますから」

「へ？ キャア！」

ヴァイスはおもむろに飛び上がった。

「ひゃあ！ むうつ……」

驚いているローゼの口を手で塞ぎ、妖しく微笑むヴァイス。

「静かにしていないと、この手を離してしまいますよ」

生い茂る木の枝を飛び移りながら、どんどん進むヴァイス。もちろん地上からはかなり離れていて……

ローゼはすぐに黙り込み、下を見ないように固く目をつぶった。

「ローゼ様、着きましたよ」

目をつぶっているうちに、いつの間にか眠ってしまったらしい。

「うーん……」

ベンチの上へ静かにおろされたローゼは、少し背伸びをした。そしてゆっくりと目を開け……その目がまんまるに見開かれる。

「す、すごい……」

周りの中世ヨーロッパのような町並み。そこをがやがやと忙しそくに歩き回る人々。その人々にローゼは引き付けられた。

「人間じゃ……ない」

もちろんヴァイスのように人間らしい姿の人もいるが、ほとんど

はそうではなかった。

もこもこの耳を生やした赤い目のウサギ。つやつやとした緑色のカエル。ブタに、ウマに、ゾウに……

それはまさにローゼの読んでいた本に出てきた、彼女の夢見た光景そのものだった。

「音の国ムズイクへようこそ」

ヴァイスは、恭しくお辞儀をした。

「ローゼ様……ローゼ様！」

「え？ あ、はい！」

思わずこの不思議な光景に見入ってしまった。

「まずはその怪我を治さなければいけませんね。『治し屋』に行きましょう」

「『治し屋』？」

「行けば分かりますよ」

ヴァイスは微笑むと、慣れた手つきでローゼを抱き上げた。彼女ももう抵抗しなかった。

「……です」

ヴァイスがある店の前で足を止めた。そこには、几帳面な筆字で『治し屋』と書かれている。

「『どんな怪我也一瞬で治します』って、普通怪我って何日もかかないと治らないものじゃないの？」

「いいえ。一瞬で治りますよ」

ヴァイスは足で器用に扉を開けて、中に入った。

「おお、ヴァイスはん、久しぶりやなあ」

そこにいたのは、白衣を違和感なく着こなした……イモリだった。つばらな瞳が可愛い。

そんなことを思えるほど、ローゼは心にゆとりを持てるようになっていた。

「お久しぶりですね。アーツルトさん」

ヴァイスは微笑んで言う。

「あれ、その可愛い嬢ちゃんは？」

「私……」

「ローゼ様です」

ヴァイスが代わりに答えた。ローゼもそれを否定しない。

それを聞いたアーツルトの瞳が、みるみるうちに大きく丸く見開かれた。

「ローゼって、あのローゼか？」

「ええ、そうですよ」

ヴァイスが微笑んで頷く。

「ローゼ……そうか、ローゼか。もうそんなにもなるんだな」

ぶつぶつとつぶやくアーツルト。そのつぶらな瞳は輝きを増している。

「彼女の怪我を治してほしいのですが」

「よっしゃ、任しときー！」

勢いよくそう言うと、アーツルトはローゼを白いベッドに連れていった。

白いベッドに腰掛けたローゼの足を調べるアーツルト。

「ニーリャあ派手にやったね。一体どこで何したんだい？」

答えられないローゼに代わって、ヴァイスが口を開いた。

「『迷いの森』です」

「は？」

アーツルトは気の抜けた声を出す。

「迷いの森っていうと、あの恐ろしい『フント』のいるあれか？」

「ええ」

「はあ!？」

「彼女を飛ばす場所を少し間違えてしまって」

未だに笑顔でそう言うヴァイス。

「間違えたって……少しって……」

アーツルトは頭を抱える。

「ヴァイスはんはいつも天然だからって……いや、天然を超える天然というか……」

「ねえ、『フント』って何？」

黙って聞いていたローゼが口をはさむ。

「ああ、『フント』っちゅーのはなんていうか、化け物っていうか……。簡単に言えば『雑食犬』ってところやな」

「『雑食犬』?」

「なんでも喰うんや。人間でも、天使でも、わいのような動物でも困ったことに、奴らはいつも腹をすかせとる」

「じゃあ私も……」

「喰われそうになってたっちゅうわけやね」

「でも僕が助けましたよ」

「だからって、ローゼを危険な目にあわせたんやろ。これを王子が聞いたら命は……」

「でも知っているのは僕とあなただけです。もちろんあなたは……」

ヴァイスはフツと微笑むと、右手の人差し指をアーツルトの首筋に当てた。ちょうど刃物を当てるように。

「いつ……言うわけないやろ！ 昔からの付き合い……やし……さ。だから、その手を……」

「ですよね」

ヴァイスはあっさりと手を離した。

「では、急がなければならぬので、早く治して頂けますか?」

「ああ、はいはい」

アーツルトは怪我の部分を軽く撫でるように手を動かしながら、つぶやいた。

「ヴァイター治」

すると、ずっとあった痛みがスッと消え、それと同時に怪我の部分も綺麗になった。

「本当に一瞬だ」

「わいをなめたらあきまへんで」

アーツルトはウインクする。

「それに、ローゼにはこの美しい足が一番や」

ぼん。とやさしく背中を押されて、ローゼは立ち上がる。立っても歩いて、そこはちっとも痛まない。

「治療費は？」

ヴァイスが聞く。

「うーん、今回は無しでええよ。ローゼ様の怪我を治せただけでわいは十分や」

ローゼってそんなにすごいのかな？ と思いながらも、「ありがとう」とお礼をする。

「いってことよ」

アーツルトはまたギザにウイंकをした。

「またいつでも来な。どんな怪我でもなおしてやらあ」

『治し屋』をあとにすると、ヴァイスはまた歩きだした。それに続いて歩くローゼ。

「ねえ、どこに行くの？」

「次は、『仕立屋』ですね」

「仕立屋？」

「今の貴女の服では、この世界だと少し浮くでしょう」

確かに。今のローゼの服は、無地の白いぴったりとしたワンピース。周りをもっと華やかなドレスを着ていた。

「そうね……浮いてるかも」

そう言い、ローゼは少しヴァイスの後ろに隠れながら歩いた。

「ここですよ」

立ち止まった先にある看板には、『仕立屋』の文字。しかし、治

し屋と違って可愛らしい丸文字であった。

チリン。と涼しい音を鳴らしながら、扉が開けられる。

「いらっしやいませー」

「ませー」

「かつ可愛い！」

ローゼの前に現れたのは、可愛らしい二匹のリスだった。といっても、人間のように栗毛色の髪が生えている。片方は短く、もう片方は長い。それ以外は全く同じ顔、姿だ。

「あれー？ ヴァイスさんじゃないですかー」

「あれれー？ そちらのおねーさんはー？」

双子なのだろう。話し方までもそっくりだ。

「私はっ……ローゼです」

あれ？ 今少し詰まった？

戸惑うローゼに構わずリスの二人は急に瞳を輝かせると、ローゼの手をとって回り始めた。

「ローゼさまだってー！」

「あのローゼさまだってー！」

「あえるなんてこーえいだー！」

「ボクたちラッキーだねー！」

「ま、待って、目が回るって」

「あ、ごめんなさいー」

「ついうれしくてー」

やっと手を離す二人。

「アタシはクライといいますー」

髪の長い方がお辞儀をする。女の子のようだ。

「ボクはドウングですー」

髪の短い方が言った。こっちは男の子みたいだ。

「「ようこそ仕立屋へー！！」」

そして二人は同時に叫んだ。

「あの、ローゼ様の服はありますか？」

二人の興奮がやっと冷めた頃、ヴァイスが言った。

「ああ、ありますよー」

「とっておきのですー!」

二人は「うんしょうんしょ」と大きな箱を持ってきた。

「ローゼさまのふくですー」

「どーぞおめしくださいませー」

二人に案内され、ローゼは服と共に試着室へ押し込まれた。

「じゅっくりー」

「ふう……」

どうこういっても仕方ない。ローゼはとりあえずその大きな箱を開けた。

「わぁ」

その箱の中に入っていたのは、ピンクと白のレースがふんだんにあしらわれたエプロンドレスだった。

本格的というか、なんというか……。

お嬢様育ちのローゼでさえ、こんなに派手なドレスは着たことがない。

「とりあえず、今のよりはマシね」

ドレスを箱から引き出すと、他のものもばらばらと出てきた。靴、靴下、そして……

「キヤアアアア！」

「どうか致しましたか？ ローゼ様！」

焦ったようなヴァイスの声と、こちらへ近づいてくる足音。

「いや！ 開けないで！ てか、どうか致してないから！ いや、してるのかもしれないけど……」

ローゼの必死の言葉で、試着室のカーテンが開けられることは免れた。

だって箱に入ってたのは……

し・た・ぎ

そう。下着。上下セットのアレ。

「なんで？ そりゃあ今は上下合ってないけどさ……」

「大丈夫ですか？」

「ただ大丈夫だって！ うん、大丈夫だからあ！」

危ない。無意識に声に出していた。

「ちゃんときてねー。ローゼさまー」

「そだよー」

二人はこの箱の中身知ってたのかな？ それより……ええい、こ
うなったらやけど。

ローゼは勢いよく服を脱ぐと、箱の中の服を身につけた。床に落
ちた自分の服が消えていくのにも気付かずに。

《ローゼ……》

「え？」

今何が……

「ローゼさまあけるよー！」

そして、勢いよくカーテンが開けられた。

「やっぱりにあうねー」

「ローゼさまはこつでないかねー」

「ローゼ様。シュテルンをお忘れですよ」

ヴァイスが、試着室の床に落ちていたシュテルンをローゼの首にかけた。試着室の床には、それ以外は消えて無くなっていた。

「どっつ?」

「とてもよくお似合いですよ」

「よかった」

優しい笑顔のヴァイス。ローゼはさっきの声など忘れてしまったように微笑む。

「じゃあねローゼさまー」

「またきてねー」

可愛らしく手を振る二人に送り出だされ、ローゼとヴァイスはまた歩き出す。

「ねえ」

「なんですか?」

「次はどこに行くの?」

「旋律の城です」

「旋律の城?」

「ええ」

微笑むヴァイス。その悩殺スマイルにも、なんとか慣れてきた気がした。

第一楽章・二、音の国ムズイク（後書き）

登場人物紹介

《アーティスト》

『治し屋』の店長。得意技は、一瞬で怪我を治すこと。何故か関西弁らしき言葉を話す。見た目は大きなイモリだが、よく見るとつぶらな瞳が可愛かったりする。

《クライ&ドゥング》

『仕立屋』のオーナー。リスの双子。一応クライが姉で、ドゥングが弟。唯一見分けることが出来るのが髪の毛の長さ。間延びした口調が特徴的。

第一章・三、白色の接吻

「ローゼ様。はぐれないように気をつけて下さい」

人が増えてきた夕方。街は沢山の人（動物？）で賑わっている。仕立屋の近くで軽く食事をとった二人は、ヴァイスの言う旋律の城へと向かっていた。

混雑してきた中、ローゼはヴァイスの後ろ姿を追うのに必死になっていた。白いスーツの裾を掴もうとしたその時

ドン！

「痛っ！」

誰かに、ぶつかった。顔は見えなかったが、凄い力で。

「もう、何よ。謝りもしないで」

しりもちをついてしまったローゼは、ドレスをはたきながら怒ったように呟く。そして一つ、重要なことに気付いた。

「ヴァイスは……？」

立ち止まっているローゼの横を、忙しそうに行き交う人々。その中に、ヴァイスはいない。

その時、また強い力で誰かに引き寄せられた。

「ヴァイ……うっ」

そばにあった壁に押しつけられるローゼ。

「残念ながら、ヴァイスではないな」

耳元で囁かれ、ローゼはびくつとする。甘く響く低い声。目の前の相手は、銀縁の眼鏡をかけていた。その奥の青い目と目が合う。ローゼよりも深い、青の瞳。

「あのっ、ど、どちら様……ですか？」

顔が近い……。どきまぎしながら聞くローゼの瞳を、面白そうに覗き込む青い瞳。

「俺はブラウ。君はローゼだね。いったい一人で何をやっているんだい？」

「……はぐれたっっていうか……」

「駄目だねヴァイス。こんな可愛い女の子を一人にするなんて」

「あのっ……そのっ」

「誰が狙ってるか分からないのに。ふっ、困った天然天使様だ」

あわてふためくローゼの顎を、ブラウの右手が捉える。そして、顔を近づけてきた。……

ピシッ

「探しましたよ。ローゼ様」

鋭い音と共に、怒ったようなヴァイスの声が出た。

「ヴァイス！」

ブラウは、右肩を押さえてローゼから離れる。

「おや、正義の味方登場ってところかな？」

「ふざけないで下さい」

「……にしてはちょっと本気だったな。この辺で退散しておこう。争うのは余り好きではない」

ローゼはブラウの右肩を見て驚いた。薄い青のスーツが破けていて、少し血が滲んでいる。

「どうせ済ませてあるんなら、と思ったんだが。あ、もしかしてまだだったかな？」

「……黙って下さい」

「あなたはなんでも慎重なものね。いや、失礼失礼。それではまた会おう、ローゼ」

ブラウは片手をあげると、人混みの中へ消えていってしまった。

「あの……」

「なんですか？」

「さっきの話は何？ その……ブラウ、との」

「そのうち分かりますよ」

ヴァイスは、それだけ言って微笑んだ。

「それでは、行きますか」

抱き上げられるローゼ。それは、まさかの……

お姫様抱っこ

「ちよっ……私怪我してないよ！」

「でも、こうすればはぐれませんよ」

「いやや……でもっ、周り人いっぱいいるしっ！」

「ほら、ちゃんと首に手を回して下さい」

あれ？ なんかいきなり大胆になった？ って！

「キャアー！」

ヴァイスはいきなり飛び上がった。

「ななな何？」

「近道です」

ものすごいスピードで屋根を渡って行くヴァイス。

「わあ！ キヤア！ いやあ！」

ローゼの悲鳴だけが、赤みがかった空にこだましていた。

「着きましたよ。といっても寝ていますか」

本当は気絶しているのだが、それに気付かない天然天使。

「ローゼ様、起きて下さい」

軽く体を揺らす。

「……ふえ？」

間抜けな声とともに目を開くローゼ。

「着きましたよ。ローゼ様」

「着いたって？」

「旋律の城に着いたんですよ」

「城……？」

「とりあえず中へ入りましょう。説明はそれからです」

まだブーツとしているローゼを抱き直すと、ヴァイスは凝った作りの大きな門をくぐっていった。

「もう一人で歩けるから……降ろしてよ」

やっと頭がはつきりとしてきたローゼ。

「嫌です」

「なんで？」

「嫌だからです」

なんとという理由になっていない理由！

「ほら、貴女の部屋に着きましたよ」

ヴァイスがドアを開けようとした時、下の方でミャーという声がありました。その声に素早く反応するローゼ。

「メーア！」

『よく分かったね』

ヴァイスの腕から降りると、黒い猫の方へ走っていくローゼ。

「鳴き声で分かるって！ でも……なんであなたがこんなところに？」

『あんたが一人じゃ色々心配だから、ついて来ただけ』

抱き上げて頭を撫でるローゼから、顔を背けるメーア。

「ご友人ですか？」

「ええ。飼い猫よ」

「四つん這いの猫は初めて見ました。服も着てないなんて」

『余計なお世話ね』

「この世界では服を着ていた方がいいですよ。彼に頼みましょう」

ヴァイスが、にこやかな笑みと共にぱちんと指を弾くと、急に一人の男が現れて、メーアを抱き上げた。

『離しなさいよっ』

「俺を呼び出すなんて……。面倒事は全て俺に押し付けるんだね」

ミャーミャー騒ぐメーアをおさえ、そう言って顔を上げたのは……

「ブラウー!？」

「ローゼ、また会えて嬉しいよ」

先程のことを思い出し、目を背けるローゼ。ふっと目を細めて微笑むブラウ。

「それでは失礼。ヴァイス、ほどほどにしてあげなよ」

意味ありげに言って、メーアを抱いたまま歩き出すブラウ。

『フリーア！ その男には気をつけなさいよっ！』

フリーア？

気をつけるって……？

「ローゼ様」

「ねえ、フリーアって？」

「聞き違いでしょう。貴女はローゼ様です。色々とお話しなければならぬので、中に入りましょうか」

ヴァイスはローゼの手をとると、部屋のドアを開けた。

「どうぞ、お入り下さい」

中に入るローゼ。ヴァイスはドアを閉めると、後ろ手で鍵も閉めた。彼女はそのことに気付いていない。

「やっと二人きりになれましたね。ローゼ様」

ヴァイスの眩きは、ローゼには聞こえていないようだった。

「綺麗な部屋ね」

ピンクと白を基調とした可愛らしい部屋。いわゆる女の子らしい部屋だ。

ヴァイスはローゼをソファアの上に座らせる。そして自分も隣に座った。

「どうですか？ この部屋」

「可愛い……かも」

「気に入ってもらいましたか？」

「うん……」

ピンク色は嫌いではない。ローゼは、女の子らしい色が好きなのだ。

「それではローゼ、これから色々と説明をしなければならぬのですが、その前に」

急に両手で頭をヴァイスの方に向けさせられたローゼ。

「へ？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。ヴァイスは微笑んで言う。

「ローゼ様、目を閉じて下さい」

「あの……」

「閉じて下さい」

優しい声。それに誘われるように、ローゼは目を閉じた。

「いい子ですね」

さらさらの金髪をスツと撫でるヴァイス。

「ローゼ様」

何かを決めたようにローゼの頭を両手で支えると

「貴女を絶対に離しませんよ」

絶対に失いたくない

特別な存在

それがローゼという名の

貴女なのですよ

ヴァイスの顔が近付いてきているのにもかかわらず、催眠術にかかったかのように、力の抜けたローゼの体は動かない。もちろん、目も閉じたまま……

そして、ローゼの唇に

愛しいローゼ

ローゼは薔薇を意味します

薔薇の赤は

貴女の唇を意味します

貴女の唇は……

「んっ……」

愛しの時間は、幸福の時

貴女はそれを受け入れる義務があります

さあ、僕のことを愛して下さい

温かい

というより、体が熱い。

私は、一体……

「ローゼ様」

「うあー！」

いきなり耳元で囁かれたローゼは、飛び上がりそうになる心臓を必死に抑える。

「あの、近……んっ」

キス、された。

冷静にそう思う自分がいた。手足は痺れたように動かない。ただ彼の唇が甘い、と感じた。

ただ触れるだけのキスが、名残惜しそうに離れる。

柔らかい感触の残る唇には、手足とは違った痺れるような甘さが残っていた。

「あれ？ 『今は』意識があるのに、嫌がりませんね」

超至近距離で、優しく微笑むヴァイス。

「『今は』って……」

恥ずかしくなって視線をそらそうとするローゼ。しかしそれは叶わない。

「拒まれると困るので、少し魔法をかけさせてもらいました」

「魔法？」

「そう、魔法です。そういえば、体が熱いですね。まだキスだけなのに」

「まだって……」

「まさかキスだけで感じ」

ダンッ！

ヴァイスを突き放そうとするローゼ。もちろん彼の厚い胸板はびくともしなかったが……。

「やめてよー！」

「冗談です」

真面目に言われ、ローゼは少し俯いた。

「でも……」

もう一度

とろけるように甘い、ローゼを愛する者の口づけ。

ローゼはその虜になる、たった一人の犠牲者。

「言われなくても」

二つの影がまた重なる。

甘いのは好きですか？

僕は、大好きです

そばに生けられた薔薇の花びらが一枚、床に舞い降りる。

それを合図にしたかのように、一枚、また一枚とどこからともなく降ってくる紅い薔薇の花びら。

しかし幾度も重なる二つの影に、その様子に気付く余裕など無かったようであった。

ローゼ様

貴女はまるで

棘いばらの消えた

薔薇のように

純粹で

傷付きやすく

美しい

「ずっと傍にいます。ローゼ様」

静かに眠る、小さな迷い子を見て、ヴァイスはそっと微笑んだ。

第一楽章・三、白色の接吻（後書き）

《ヴァイス》

光を司る白の天使。その実体は天然天使。執事のような優雅な仕草や口調が得意。だが少し抜けたところがあるのが良いのか悪いのか……。

第一楽章・四、青色の願望

「うーん……」

……朝？

ゆっくりと目を開けるローゼ。

しっかりと布団を被っていて、辺りには赤い薔薇の花びらが散らばっている。ただ服が……軽い。見てみると、あの派手なエプロンドレスが、パジャマらしき寝やすい服に変わっていた。

……着替えた覚えがないのに。

起き上がって周りを見回すと、そばにあるソファーにヴァイスが横たわっていた。

「わあ……」

ただソファーに横たわっているだけなのに、ものすごく絵になる。それだけヴァイスは綺麗な姿で寝ていた。

「お目覚めですか？」

「ひゃっ！」

いきなり目が開いたので、驚くローゼ。

「もしかして、見とれてました？」

「そそそんなことないって！」

焦るローゼに、ヴァイスは少しはねた前髪をかきあげて、いたずらっぽく微笑んだ。

「貴女の寝顔の方が数倍美しかったですよ」

ヴァイスは立ち上がり、ローゼの隣に座ると、「ちゅっ」とわざと音をたてるように彼女のおでこにキスをした。

「……あの」

ヴァイスからちよっと離れるローゼ。

「なんです?」

「この服……」

「ああ、あの後貴女が眠ってしまったので、僕が着替えさせておきました。……あれ? どうしたんですかそんな赤い顔して。安心して下さい。僕はキスしかしてませんよ」

いや、そういう問題じゃなくて。服脱がすとか脱がすとか脱がすとか……

「ご心配なく。貴女の肌はとても綺麗」

パン!

ヴァイスの白い頬に赤い手形がついた。

「だから……キス以上はしてないって言ったじゃないですか」

頬を押さえて少し悲しそうな顔をするヴァイス。

「うるさい！」

「でも求めたのは貴女でしょ」

「……………」

ベッドの上の薔薇の花びらが数枚、床に落ちる音が聞こえる。口
ーゼは黙って下を向いた。

「それでは、僕は雑務があるのでこれで失礼させていただきます。
シャワーでも浴びたらどうですか？ あと、城の案内などは他の者
に頼みましょう」

ヴァイスは微笑んで一礼すると、部屋から出ていった。

私はなんでここにいるんだろう……。

部屋に備え付けのシャワーを浴びていたら、ふとそんなことを思
った。

なんで？

答えがない疑問。考えても気分が悪くなるだけなのに、考えは止

まらない。

私は、誰？

メーアに呼ばれた名前、フリア。

それは、私？

「色々考えすぎなんだよ。ローゼはローゼだぜ」

いきなりシャワールームの扉がガラツと開いて、黄色い髪の男が顔を出した。

「キヤア！」

この人……

「酷いなあ。せっかくタオルと着替えを持ってき」

バン！

扉を思いつきり閉める。

誰……！？

「本当にひどいよ。ありがとつの一言も言わないなんてさあ」

エプロンドレスを着たローゼは真っ赤な顔で下を向いている。

反対側には、先程の黄色い髪の方が面倒くさそうにソファに寝転がっていた。

「だって、人のお風呂のぞき見るなんて……ありえないって」

「でもあんたの叫び声、なかなか良かったぜ」

一瞬でローゼの目の前に現れる、黄色い髪の方。そして、ローゼの頭をくしゃっと撫でた。

「やっぱりローゼだな。オレのお気に入り」

「へ？」

「そんな顔しないでよ。もっと叫ばせたくなっちゃっじゃん」

「どういう意味……？」

「だーからっ」

にやにやと笑顔のゲルプに、傍のソファに押し倒されるローゼ。

「こーゆーことっ」

「ちょ……やめっ」

バタン！

いきなり部屋のドアが開いた。

「ローゼの声がしたけど、ここにいるのかなー？」

気の抜けた声とは裏腹に、勢いよく渦巻く水柱が、黄色い髪のを包んだ。

「うわっ！」

「おお、ゲルプじゃないか」

たった今気付いたように言ったあと、下を向いてふっと笑う薄青のロングスーツの男。

「そんなに濡れてどうしたんだい？ そのまま近づいては、ローゼに風邪をひかせてしまう」

「お前のせいだろ！」

「はて、知らないな。早く着替えたらどうだい？」

すまして言う男は、人差し指で銀縁眼鏡のズレを直す。

「ふざけるのもいい加減にしろ！ ちっ、もうちょっとだったのによ」

ゲルプと呼ばれた男は軽く舌打ちすると、水を滴らせながらそのまま部屋を出ていった。

「ブラウ……さん？」

「呼び捨てでいい」

青い髪の男　ブラウは、深い青の瞳を細めて少し笑った。

「さっきの人は？」

「彼はゲルプ。奴にはあまり関わらない方がいい。厄介だからね」
確かに……。

「ブラウって、あの時のブラウよね」

「あの時というと？」

「人混みの中で……」

「ああ、あれは失礼だったね。君のような可愛らしい女の子は、久しぶりだったからね」

困ったように笑うブラウは、初めて会った時よりも優しい。

「最初はヤなやつって思ったけど……」

「俺かい？」

大袈裟に驚いた表情をして言うブラウ。

「悪い人じゃなさそう、ね」

「それは当たり前だ」

ローゼの手をとるブラウ。

「俺は、君が嫌と思うようなことはしない」

「信じて……いいの？」

「信じてもらえるまで、この手を離さないよ」

気障キサな銀縁メガネの奥の青い瞳と目が合う。

「……分かった。信じてみるわ」

「ありがたいお言葉だね」

ブラウはローゼの手の甲に軽く口づけすると、手を離れた。

「この城は旋律の城といってね、この国の中心的な城だ」

「へえ……」

「城の案内をする」と言われ、ブラウの後をついていくローゼだが、迷路のように広い城。ついていくだけで精一杯だ。

ちゃんと自分の部屋に戻れるかな……？

少し心配になるローゼ。

「そしてこっちが、君のホールだ」

扉を開け、中に入って行くブラウ。走って追いかけるローゼ。

「わぁ……………」

広いホールの真ん中に、白いピアノが佇たたずんでいた。

「弾いても……………いい？」

ブラウは軽く微笑んで頷く。

ローゼはそのピアノに駆け寄ると、鍵盤に触れた。

「あれ……………？」

なんだろう。このしっくりくる感じ。

ピアノには、それぞれ性格がある。初めて弾くピアノは、すぐ慣れる。ピアノもあるし、時間をかけないと、かけてもなかなか慣れない。ピアノもある。

でも、このピアノは……………

ホールに響く『ド』の音。

「私のピアノ」

「よく分かったね」

急に視界が遮られ、柔らかくて冷たい『何か』が、ローゼの頬に触れた。

「ブラウ……?」

「どうかしたかい?」

一瞬の出来事だった。目の前のブラウは変わらず微笑んでいる。

「いや、あの……」

「もしかして、しちゃ駄目だったかな?」

「駄目っていうか……」

やっぱりあれはキスだったのね。

少し赤くなるローゼ。

「ピアノを前にしたあなたがあまりにも美しく……つい、ね」

ブラウは言うと、ローゼの頭をゆるゆると撫でた。

「っ……なんで?」

「ん?」

「なんで、なんで、そんなに優しいの? あなたも、ヴァイスも」

「それは皆、君のことが好きだからね」

頭を撫でる手を止めると、その手をローゼの頬に移動させる。

「何故？ 会ったばかりなのに」

「皆、君を小さい頃から知っている」

「じゃあなんでキ……キスとか、するの？」

ブラウの顔が近づく。鼓動が早くなる。

「ヴァイスとのファーストキスはどうだったかい？」

耳元で囁かれ、ローゼの頬が紅潮した。

「なぜ……知って……の？」

うまく話せない。

ヴァイスとは違う低い声は、ローゼの鼓膜を通じて心を惑わせる。

「俺は、君の全てを知っている」

君の何もかもを知っている

だから君も俺を知って欲しい

俺のことを好きになって欲しい

「ローゼ……」

頭が真っ白になる。体の全てが機能を停止したかのように、動かない。虚ろな目は、ブラウを見つめることしか出来ない。

この感じ。

昨日も体験した気がするのは、気のせい……？

「ゆっくりでいい。俺を好きになってくれるのなら、いつまでも待
つよ」

震えるローゼの唇が少し開く。

「す、き……に？」

「そう。ゆっくり、ね」

ローゼと自分のおでこをこつんとぶつけてそう言つと、そつとロ
ーゼの体を抱きしめた。

優しく、優しく。

まるで今にも壊れそうなガラス細工を抱きしめるように。

ローゼは皆のもの

だけど、今だけ俺のもの

俺は君を悲しませない

君を泣かせない

だから、俺だけに見せて

君の最高の笑顔を、ね

「ねえ」

「何？」

どれくらいこのままでいたのだろう。少しこの状況に慣れた口――
ゼが口を開く。

「あなたはなんでそんなに冷たいの？」

「体温、かい？」

「ええ」

「……ヴァイスは、暖かったでしょう？」

「え？」

「俺は、君を優しく抱きしめることは出来る。でも、暖かく抱きしめることは出来ない」

ローゼから離れるブラウ。表情が少し歪む。

「やはり、君に好きになってもらうなんて、無理な願いのようだね。君にはヴァイスのような暖かさが必要だ」

「ちが……」

「嗚呼、どうすれば俺は」

「違っつて!」

驚くブラウ。でも、それ以上に驚いているのはローゼの方だった。

「だって言ったでしょ! 私はあなたを信じるって!」

なんでこんなにむきになっているのだろう。

私はブラウの何でもないのに……

暫しの沈黙。ブラウはそっとローゼから離れた。

「……ふっ」

メガネの奥の瞳が、研究者のように鋭くなる。

「面白い」

「へ?」

「ローゼ、君はやはり俺を退屈させない」

ロングスーツをひるがえし、背中を向けるブラウ。

「では他の部屋を案内しようか」

さっさと歩いて行くブラウ。急いで追いかけるローゼ。

なっ、なんなのこの人！！

「そういえば、君はヴァイスにどこまで説明してもらった？」

いくつか部屋を案内された後、歩きながらローゼに問うブラウ。

「何を？」

ローゼはブラウの後ろを小走りについて行きながら返した。

「俺達の事についてだよ」

「うーん、何も……」

そのとたん、急にブラウの足が止まった。

「何も聞いてない！？」

急に止まったので、勢いあまったローゼはブラウの背中に思いっきり鼻をぶつけてしまった。

「痛っ」

「ヴァイスのやつ！ することだけして後は俺に押し付けるのか！
せっかく『初めて』は譲ってやったのに！」

「あの……ブラウ？」

ブラウの急な変貌ぶりに戸惑うローゼ。

「ああ……すまない。取り乱した」

こめかみを押さえて息をつくブラウ。

「知らないのなら仕方がない。ローゼ、紅茶は好きかい？」

「紅茶？」

「ああ」

「まあ、好きだけど」

「ならティールームに行こう。あそこなら落ち着いて話せる」

そして案の定……

「ちょ、ちょっと……キヤア！」

お姫様抱っこ

でローゼは連れていかれた。

「さて、着いたよ」

ドアの前でローゼを降ろすブラウ。

「なんで……お姫様抱っこ？」

「また君の鼻を俺の背中にぶつけてしまっただけは悪いからね」

ローゼの目の高さまで屈むと、金色の髪を撫でる。

「君は最高に美しくいなければならない」

耳元で囁かれるその『声』に、ローゼはびくっと反応する。声だけでまた胸の鼓動が速くなる。

「ブラウ……？」

「そんな赤い顔して、隙があったら襲うよ？」

「冗談めかしてそう言つと、ローゼの頭をぼんぼんと叩いて立ち上がる。」

「えつと……」

今、さらっと危ない事言ったよね、この人。

「さ、入ろうか」

ブラウのメガネの奥の瞳が細くなる。ローゼの反応を面白がっているようだ。

「や、いやあ！」

くすくすくす。

楽しそうな笑い声。

くすくすくす。

歩くたびに大きくなる上品なざわめき。

「ブラウ様！」

手前のコスモスが揺れた。

「ブラウ様よ」

隣のチューリップが嬉しそうに揺れる。

「あら、ブラウ様。お久しぶりですね」

撫子なでしこがスツとお辞儀をするように垂れた。

「そうだね」

普通に対応するブラウ。

「あの……」

少し不安げに声を出すローゼ。

「どうかした？」

「そこのお嬢様はまさか……ローゼ様!？」

百合の花が大きく揺れた。

「そつだよ」

ブラウが言う。

「やっぱり!」

「噂通りお美しいですわ!」

「まだ枯れないでいて良かった!」

「わたくしたちは、なんて幸福なのでしょう」

そんな声が花畑のように花だらけの空間にこだます。

「ねえ、ブラウ」

「なに？」

「この声って全部花なの？」

「そうだよ」

さも当然のように言っつづい。

「……花って話せるの？」

「生きているものは言葉を話す。常識だよ」

「常識、ね」

まあ実際動物達も言葉を話してる訳だし……。驚くことないのかな。と冷静に考えみたりする。

「今日はどうなされたの？」

花達が揺れる。

「お茶会を開いてもらえる？」

「お茶会ですって」

「久しぶりだわ」

「いいですよ。さっ、みんな、すぐに準備をしましょう！」

「それでは、ご褒美だ」

ブラウが腕を真一文字に振った。と同時に、そこから現れた水がきらきらと舞う。嬉しそうに受け止める花達。

「わぁ」

花達がローゼとブラウを囲むと、くるくるとまわりだした。

「紅茶は好き？」

「ええ、まあ」

目の前にポットとカップを持ったマーガレットが現れ、目の前で紅茶を淹れた。

「何を入れます？ レモンにミルクに、そのままがお好みかしら？」

「じゃあ、そのままで」

「お席にご案内致しますわ」

花達に案内され、ローゼはブラウと共に部屋の奥へと行った。

「なんか、本格的ね」

「当たり前じゃないか」

香りの良い紅茶をごくんと飲み干す。と同時にまた注がれる。テーブルの上にはたくさんケーキや茶菓子が並べられていた。

「家よりも豪華だわ」

家……？ 家って？

たった今自分が言った言葉に疑問を持つローゼ。

「どうかした？」

「きゃっ」

急に目の前にブラウの顔が現れた。

「近いつて」

「君が困った顔をしていたからね」

「別に……」

「ふうん」

ブラウの瞳がまた細くなる。

「あのっ」

「また何か？」

「なんか説明するって言ってなかった？」

「ああ、そうだったね」

ブラウは紅茶を一口飲んで唇を湿らすと、話し始めた。

「実はこの城には、六人の天使がいるんだ」

「天使？」

なんてファンタジーなと思ったが、動物も花も言葉を話すこの国で、別に驚くことじゃないかと一人納得する。

「俺もその一人だ。あと、ヴァイスもね」

「そうなの？」

それじゃあ私、天使とキスしたの！ それもファーストキスを！？

なんてファンタジー……つてええ！？

「天使にはそれぞれ役割がある」

一人慌てるローゼに、構わず続けるブラウ。

「俺は水、ヴァイスは光、他にも雷、葉、火、闇を司る天使がいるんだ」

「へえ……」

「じゃあ……」

ローゼは犬のような動物（アーツルトに言わせると『フント雑食犬』）に襲われかけた時の、ヴァイスのテノールボイスを思い出す。

「ツレト光……………」

「それは、力を放出する時の言葉だね」

「ヴァイスはそれで助けてくれた……………」

「なんで？」

「私が雑食犬に食べられそうになったから？」

「そもそも私はなんで森にいた？」

「その前はどこに……………」

「どこにいたの？」

「バン！」

急にドアが開く音がして、ヴァイスが現れた。

「ブラウ、こんなところにいたんですね！」

「君のせいだね」

「は……?」

一瞬、時間が止まる。

「とにかく、仕事です」

「またか」

「この時期は多いものですよ」

「分かった。すぐ行く」

ヴァイスは無言で頷くと、部屋を後にした。それは、ローゼと二人きりだった時と全く異なるヴァイスであった。

「すまない。急用ができてしまった」

ブラウが申し訳なさそうに言う。

花達が、「今日はヴァイス様にも会えて良い日だわ」と口々に言いながらカップなどを片付け始めた。

「仕方ない。戻ってくるまで、城の見学でもしてほしい」

「ちょっと、ブラウ?」

あっという間にブラウは消えてしまった。

「もっ……」

ティールームも片付けられ、仕方なく部屋の外に出たのだが……

「……どっ？」

迷路のように広い城。右も左も分からない。

「とりあえず……行くしかないわよね」

歩きだすローゼ。

「みーつけたっ」

それを陰から見つめる男。

「お楽しみの始まりだね」

ローゼは、きよろきよろと辺りを見回しながら前に進んでいく。

「オレも行くかな」

その男もそろそろとついて行った。

第一楽章・四、青色の願望（後書き）

《ブラウ》

水を司る青の天使。その実体は知的天使。聞こえはいいが、時々観察者の目になるのがキズ。興味のあるものはとことん知りたがる。常に銀縁眼鏡を着用。

第一楽章・五、黄色の翻弄

「どこだろ、ここ……」

歩いて歩いても左右にドアがあるだけ。変わらない景色。完全に迷ってしまったようだ。

「とりあえずいったん戻ってみっ きゃっ」

急に近くのドアが開いて、中に引きずり込まれた。

バン！

ローゼが中に入った瞬間ドアが閉められる。同時に鍵がしまる音もした。

「つーかまーえたっ」

「そう言っつて顔を上げたのは……」

「ゲルプ……」

「覚えてくれていたんだ、名前。嬉しいよ」

「そう言っつとゲルプはにっこりと微笑んだ。」

「ちょっと……やめてよ」

「可哀相だよな。いきなりこんなとこ連れてこられて、名前まで勝手に変えられて」

部屋の中のベッドに無理矢理座らせられた。ゲルプの顔が近付いてくる。

「同情してあげてるんだよ」

「な、なんのこと？」

「そっか。分からないか」

ゲルプはローゼの首にかかっているシュテルンにスツと触れた。

「あなたは以前まで、ローゼではなかった」

機械的な言い方。耳に息がかかるくらいの近さで囁かれた。

「え？ 痛っ」

耳を噛まれた……というのに気付いたのは、そばにあったベッドに押し倒されてからだだった。

「でもオレ、そういうの嫌いじゃないんだよね」

歡喜に満ちたゲルプの顔が、超至近距離で見える。

「痛……い」

また噛まれた。しかも、さっきより強く。手加減など感じられない。

血が出てるかも……。

両手はゲルプの片手で押さえられていて、動かない。

「やめっ……て……いた……い」

ローゼの頬に涙が伝う。

「その顔、ものすごくそえられるんだけど、誘ってるのか？」

「……くっ」

痛みを癒すようにゆっくりと耳をなめられる。不思議な感覚に、体の力が一瞬抜けた。

その一瞬のすきを狙っていたかのように、ローゼの口が塞がれ、すぐに離れた。

キ……ス……？

ぼんやりとした頭で考える。

「泣いてよ。もっと」

耳元で囁かれた。

「なんで……？」

「泣いた方が可愛いから」

またキスされる。今度は長い。気が遠くなる。

苦しい……。

息欲しさにじたばた暴れると、やっと離れた。

「ふぁ………」

「顔が赤いよ、ローゼ」

「っ……いた」

ゲルプはローゼの首元に顔を埋めた後、やっとローゼを解放した。

「ごちそうさま」

「っ……ばっかっ」

「馬鹿なのはローゼだよ」

「……なんで？」

立てない、と思ったら、足だけゲルプに押さえられていた。仕方なく横になった状態でゲルプを見る。

「簡単に捕まっちゃってさ。心までこんなもので捕らえられて」

ゲルプがシュテルンをつつく。

「なんの……こと？」

「知りたい？ 『フリア』」

「は？ ……うっ」

頭がズキッと痛んだ。出てきていけないものが、無理矢理出てこようとしているかのように。

「頭が……」

くらくらする。知らないうちに、涙もこぼれ落ちた。

「可愛いお嬢様だな」

頬に流れる涙をなめとるゲルプ。

ざらざらとした舌。背中がビクッとすると同時に、肩の震えが止まらなくなる。

「もっと泣いていいんだよ」

「……なん、で？」

喋るのさえ苦しい。

「興奮するから」

「ド、スッ」

「よく分かったね」

否定もせずに笑顔で答えるゲルプ。

「でも、オレ以外の理由で泣かれても嬉しくないんだよな」

「ねえ……」

「なに？」

ローゼに顔を近付けるゲルプ。

「教えて、よ。私の、こと……」

苦しい、辛い、悲しい。様々な感情が込み上げては消える。

時々頭に現れる疑問。それが解消されるのなら……

教えて欲しい、何もかも。

「いいよ」

軽く言うと、ローゼの足を解放するゲルプ。そして、ローゼの頭を軽く撫でた。

痛みが消える。

「ただし一つ、条件がある」

「条件？」

「簡単さ。オレにキスしてくれればいい」

にやにやと笑いながら言うゲルプ。

「……は？」

「だから、キッス」

キスつて……恥ずかしすぎる。

「教えてあげないよ」

「……」

困るローゼの顔を、いかにも楽しそうに見つめるゲルプ。

「目、つぶつててあげるから。五秒以内ね」

「ええ！？」

「いち」

言った通りに目を閉じるゲルプ。

「にーい」

やる？ やるしかないか……。

「さーん」

やっぱり教えて欲しいし。

「しーい」

よし。

意を決して顔を近付ける。

「うっ……うっ！」

勢いあまってぶつかるときにキスしてしまった。すぐに離れる口
ーぜ。

「あわわ……そのっ」

「よく出来ました」

……頭を撫でられた。

「痛くなかった？」

「別に。でも、好きな人に認められたいなら、もう少し練習が必要
だね」

唇を押さえて苦笑いするゲルプ。

「……………」

一瞬、頭の中にヴァイスが現れてすぐに消えた。

なんで……ヴァイス？

「練習、する？」

首を傾げるゲルプの髪が、さらりと揺れる。

「結構、よ」

ローゼはそう言って立ち上がった。

「じゃあとりあえず、シュテルン外してみな」

テーブルに向かい合わせに座っているローゼとゲルプ。

「これを？」

銀の鎖に触れるローゼ。

「うん。ただし、かなりの覚悟をしてから外しなよ」

「なんで？」

「あなたの頭の中に一気に『記憶』が流れ込むから」

「……どうして？」

「まあ、外してみな」

ローゼはシュテルンを見つめる。
ピンク色の宝石は、まるで呼吸をしているかのように光の濃淡を
変えていた。

そういえば、あまりちゃんと見たことなかったわね。この宝石。
しばらくすると、くらつとめまいを覚えた。

《ローゼ……ダメ……》

「え？」

《ダメ……はずしちゃ……》

宝石が、喋った？

《はずし……ダメ……》

「ほら、早くしないと支配されちゃうよ」

その光景を、頬杖ほおつきえをつけて楽しそうに見ているゲルプ。

《ダメ……》

「やだ……私、知りたいの！」

ローゼは勢いよく鎖を外した。

グアン……

頭が、重い。

ローゼは、吸い込まれるように意識を失った。倒れ込むローゼを抱き留めるゲルプ。

「おやすみローゼ」

そしてそのままベッドに横たわれさせた。

「フリア様、起きて下さい」

フリア？

「何をおっしゃっているのですか？ お嬢様はフリア様です。それ以外の何でもありませんよ」

私は、フリアなの？

「フリア。せつかくお茶を用意してもらったのだから、本を読むのはやめなさい」

お母……様……？

様々な場面がどんどん現れる。ぐるぐると回る映像。とめどなく流れてくる映像は、紛れも無く全てローゼ……いや、フリアの『記憶』。

「私は、私は……」

その時、頭に雷が轟とどろいたような衝撃を感じた。

「おかえり。ローゼ」

さっきと変わらない景色。目の前にはゲルプがいる。

「私は、フリアなの？」

落ち着いた声で話すローゼ。

「そつだよ」

ゲルプも冷静に答えた。

「この世界は私の場所じゃない？」

「いや、みんなあんたを必要としている」

「なんで私はローゼなの？」

「それは……」

ゲルプは傍に落ちたシュテルンを拾う。

「この世界の決まりだからね」

シュテルンをローゼの首にかけた。

「もうこの『記憶』はいらない」

もう、忘れてしまえばいい

あんたを悲しませるだけの世界なんて

必要ない

この世界はあんたを歓迎するよ

決して、あんたを泣かせたりはしないよ

泣かせる理由は

オレだけにしな

「ゆっくりおやすみ」

ゲルプがローゼの背中を撫でる。

優しく、優しく。

「あんたはローゼだ」

記憶が、何かに吸い込まれるように消えていく気がした。

「ゲルプ……」

「大丈夫だよ」

「怖いの」

「大丈夫」

背中を撫でるのを止めないゲルプ。

「私なのに、私じゃなくなるの？」

「大丈夫だよ」

諭すように繰り返す。

「ローゼはローゼだから。それ以外の何者でもなくね」

急に眠気が訪れた。

「う……」

「大丈夫。起きたら楽になるから」

視界が、暗転した。

「……人に優しくするのは、慣れてないんだけどな」

静かに眠るローゼを見つめるゲルプ。

「あんただと優しくしたくなる。何故だろうな」

力の抜けた表情を見て、一人にやりと笑う。

「やっぱり特別だからかな」

ローゼの髪を一束すくう。その下からあらわれた赤くなっている耳に触れた。

ピリツと電気が流れるように光った瞬間、赤かったローゼの耳は元通りになる。

「これは残しておこうかな。色々と面白そうだし」

首元の赤い痕あとを見て、ゲルプは楽しそうに微笑んだ。

「でもやっぱりあんたのもっと苦しむ姿、見たいな」

綺麗になったローゼの耳に口を近付けるゲルプ。

「ん……？」

だが、そのまま眉をひそめた。

「仕事、か」

『何か』を感じたのかそう呟くと、今度はローゼに囁くように言った。

「また今度にしよう。楽しみにしているよ」

部屋を後にするゲルプ。ドアを閉めたゲルプの表情は……冷たく変わっていた。

第一楽章・五、黄色の翻弄（後書き）

《ゲルプ》

雷を司る黄の天使。その実体はドS天使。Mでない人を虐めること
に執着する。時たま優しくなる！？

第一楽章・八、緑色の誘惑

「ん……？」

「おはようローゼ」

少し高めの男性の声が聞こえる。顔を上げるローゼ。その男性は珍しい黄緑色のスーツを着ていて、深緑色の髪とエメラルドグリーンの瞳をしていた。

目覚めがいい。

頭の中がすっきりと整理されているようだ。

「あの、誰ですか？」

「失礼。ボクはグリーン。六色の天使のうちの一人だよ」

よく見てみると、他の天使より若干背が低い。ローゼの身長より少しだけ高いくらいだ。

「気にしてるのに」

グリーンに隣に立つローゼにふて腐れた顔で言うグリーン。

「もしかして、『言葉責め』かな？」

「……はい？」

「なんだよ。期待させるなよ」

「えーっと……」

いまいち彼の言葉の意味が掴めないローゼ。

「ま、いつか」

「ねえ、いつから私はここで寝ていたの？」

寝る前の記憶がない。ただ、思い出せない苦しさはなかった。

「夜になったから、寝たんだよ」

「なんで今、目が覚めたの？」

「それは朝になったから」

「当たり前のことじゃない」

「当たり前前の日常ほど幸せな生活はないよ」

グリーンはローゼの手をとる。

「当たり前前の日はんざーい！」

手の甲に彼の唇が触れた。

「本当は、君が何故かお客様用の部屋で布団もかけずに寝ていたから、ボクの部屋に連れてきてあげただけだね」

「そうなの?」

「うん。夜は冷えるから。ちょうど他の天使達は仕事が忙しくてさ」

「……ありがとう」

「ローゼに感謝されるなんて、光栄だな」

嬉しそうに言うグリユーン。

「じゃあさ、ご褒美くれない?」

子供っぽい笑顔の絶えないグリユーン。ローゼは首を傾^{かし}げる。

「ご褒美?」

「うん」

無邪気な返事と共に、どこからか『ある物』を取り出すグリユーン。

「何……これ?」

黒い棒に続いて垂れる同じく黒いゴム製の紐。

「何って、鞭に決まってるじゃん」

「は?」

ローゼに無理矢理鞭を持たせると、後ろを向いて言う。

「思いっきりよろしく」

さすがのローゼも何を求められているか分かり、

「いやあああ！」

鞭を投げ捨て、ドアに向かって走った。ドアノブをがちゃがちゃと回すが、何故か開かない。

「そのドアは、天使しか開けられないんだよ」

「嘘っ！」

「嘘じゃないよ」

いつの間にか真後ろにいるグリユーン。

「ごめん。突然すぎたよね」

動けないローゼを後ろから抱きしめる。

「ごめんなさい」

抱きしめられた手に力がこもっているのが分かった。

「分かった。分かったから離し」

「嫌だ」

まるで駄々をこねる子供のようだ。

「ローゼはボクのものだもん」

そう、ボクのもの

ボクだけを虐^{いじ}めて

ボクだけにちょうだい

ローゼからのご褒美

「そうだ」

密着されているせいで耳元で囁かれた。

「んっ……」

体をよじらせてそれから逃れようとするローゼ。

「あれ？ 耳苦手？」

グリーンンの両手は触手のように絡み付いて、離れない。

「ご褒美が欲しかったらまずローゼにご褒美あげなきゃだよね」

「え？」

「ご褒美だよ」

「何それ？」

気の抜けたローゼを、さりげなくベッドの前まで連れてくるグリユーン。

「だから、ご褒美」

「は？」

「そういえば、ローゼはSだけ、Mだけ？」

「……はい？」

「自分で気づかないタイプ？ まあそういうのもアリか」

「な……何？」

迫るグリユーン。ローゼは、動けない。

「この世に生きる者は、二種類分けられるんだよ。S^{サド}か、M^{マゾ}かに」

「私、どっちでもないよ？」

「ううん。どっちかだよ」

更に近づくとグリユーン。だが、ローゼの首元を見て止まった。

「……どうしたの？」

「ローゼには先客がいたんだね」

「は？」

「キスマーク……付いてる」

グリーンに渡された鏡を見ると、確かに首元に濃くはっきりと赤いキスマークが付いていた。

「うっ……」

あの時だ……

淡い記憶が段々はつきりと思い出される。
ゲルプがローゼの首元に顔を埋め……。あの時は少し痛みを感じた。

「気に入らないね」

ローゼから鏡を奪って投げ捨てるグリーン。ローゼは……動けない。
ない。

「誰なの？」

迫るグリーン。表情が怖い。

「こんなこと許すほど、好きな人がローゼにいるの？」

「違う……ゲルプが勝手に……」

グリーンンの動きが止まった。

「……ローゼは、Sじゃないの？」

「は？」

瞳をチワワのようにうるうるさせるグリーンン。

「誰よりも強く、誰よりも厳しく叩いてくれたよね？」

「え……？」

まるで前に会ったことのあるような言い方。

「わっ……私とグリーンンって、今初めて会ったよね？」

「ん？ そうだったけ？」

しばらくの沈黙。それを破るようにドアが開かれた。

「ローゼ！」

「ゲルプ？」

「探したんだよ！ ちょっと目を離した隙に……つか、厄介な奴に捕まってたな」

ゲルプも十分厄介だけどね。

と、ローゼは密かに心の中で呟いてみる。

「グリユーン、ローゼはオレのもんだ。手を出すな」

傍に落ちていた鞭を拾うゲルプ。

ピシッ！

「ひゃん」

悲鳴とも喘ぎとも似つかない声を出すと、グリユーンは体をくねらせた。

……正直気持が悪い。

「じゃあな」

ゲルプは、隙のできたグリユーンをドアの外へと引っ張る。

「ボクは放置プレイは嫌いなんだよー！」

そんな叫び声も虚しく、ドアを閉めると同時に部屋は静かになった。

「Mを虐めるのは性に合あわあないんだけどな」

ゲルプは固まっているローゼにの隣に座る。

「まさかあの鞭で叩いてあげたりしてた？」

「ッ。してないよっ！」

「だよね。ローゼはSでもMでもないもんね」

くいつと顎を掴まれる。

「だから虐めがいがあるんだ」

近づくゲルプの顔に

「いやっ！」

ローゼは思いつきり枕を投げつけた。

「うっっ」

予想外の反撃に驚いているゲルプ。

「私、そんな趣味ないからっ！」

ローゼはその隙にゲルプの横を抜け出し、そのままドアへと一目散に駆けた。

勝手にキスされて

勝手にキスマークつけられて

勝手にMにされて

勝手にSにされて

もう、こんなことに付き合ってられない！

ドアを開けようとする。が、開かない。

そのドアは天使しか開けることが出来ないんだよ。

そういえばそんなことを言われた気がする。だったら……

ローゼは右足を後ろに引き、軽く構えた。

「はー！」

そのまま回し蹴り。火事場の馬鹿力というものだろうか。ドアはメキッという音と共に倒れた。

まだ衰えてなかったわ。小さい頃覚えた護身術。……右足がじんじんするけど。

「……………」

啞然^{あぜん}としているゲルプ。

ドアを蹴破るといふ大役を成し遂げたローゼは、痛む足を^{かば}庇いながら廊下に出た。

とりあえず、歩こう。

しばらく右足を引きずりながら歩くと、角を曲がった所で廊下の先に赤い服が見えた。

「……………誰がいるの？」

向こうもこちらに気付いたらしい。こちらに向かって走り出す。

「わー」

「ん？」

「ローゼだあー!!」

ローゼとの距離が数メートルの所まで近付いたところで

「ローゼうっ……………」

何も無い所で派手に転ぶ赤い髪の少年。

「……………」

倒れた赤い髪の少年は、ぴくりとも動かない。

それを目の前に、何故かローゼも動くことが出来なかった。

第一楽章・八、緑色の誘惑（後書き）

《グリユーン》

葉を司る緑の天使。その実体はドM天使。M y鞭を常に所持。叩かれるのが好き。ちなみに、放置プレイはあまり好まないらしい。

第一楽章・七、赤色の純粹

「あの……」

派手に転んだ赤い髪の少年を見つめるローゼ。

「大丈夫？」

動かなかった少年は、しばらくして勢いよく立ち上がった。

「わっ！」

「ははっ。驚かせてごめん」

困ったように笑いながら、頭をかく少年。

「ローゼが来たっていうのは聞いてたんだけどさ、廊下を歩いてたら、ローゼみたいな人を見つけたから、嬉しくって」

ボサボサの赤い髪。同じように赤い瞳。着くずしたスーツも真っ赤。そんな少年は、ローゼよりも少し歳下らしい。顔つきがとても幼かった。

「やっぱりローゼだ」

嬉しそうな笑顔を向ける少年。

「あなたは……？」

「俺？ ああ、ごめん。名前を言ってなかったな。俺はロートの天使だ」

ローゼは心の中で考える。

白の天使 ヴァイス

青の天使 ブラウ

黄の天使 ゲルプ

緑の天使 グリユーン

赤の天使 ロート

確か天使は六色と言っていた。

……ということば、もう一人いるということね。

「あー！ ローゼ怪我してるじゃん！」

ローゼの右足を見て言うロート。

「治し屋に連れて行ってあげるよ！」

「え？」

「ほら、肩貸すから」

ほら、肩に掴まれ

大丈夫、すぐに病院に連れて行ってあげるからな

誰かが優しく手を差し延べている

顔は歪んで見えない

ねえ、あなたは誰なの？

あなたは私の……何？

「ローゼ？」

心配そうに顔を覗き込むロート。

「はっ！ あっ、何？」

今のは……？

一瞬で煙のように消えていく『記憶』。

「肩掴まりなよ！ 連れて行ってあげるから」

それとも、おんぶがいい？ なんて一人で言っているロート。少し頬を赤らめて。

「あの……大丈夫だから」

「大丈夫なはずがない！ 第一、足を引きずってるじゃないか！」

ローゼの足を指差して言うロート。

「そうだけど……」

「早く治さないとっ！ 治し屋じゃ済まなくなったら困るよ」

ほらっ。と肩を差し出すロート。

「う……ん」

ローゼは遠慮がちに手を伸ばす。と同時にその手が強く引かれて、肩に組まされた。そして、ローゼの手を掴んだ方と反対の手で、彼女の腰を支える。

「じゃ、力抜いてねー」

「ひゃっ！」

ロートの背中から、綺麗な赤の翼が現れた。

それは、天使の翼。

さすが天使。やっぱり翼が生えるのね。って！

「飛んでる……！」

ゆっくりと動かされる翼。ふわりと浮いたかと思えば

「きゃあ！」

もの凄いスピードで廊下を滑るように進んだ。

「力抜けて言ったじゃん。落としちゃうって」

腰に回した手の力が強くなる。

「っ」

あまりの驚きに声にならないローゼ。

「はっ」

ロートは目の前に現れたガラス窓に手をかざす。すると、手を触れていないのに勝手に窓が開いた。

「うわっ！」

急に出た外の空気に、エプロンドレスの裾がはためく。ローゼは慌てて押さえた。

飛んでるよ！ 私！！

「力を抜いて、楽にするんだよ。風が勝手に連れていってくれるから」

ロートがしっかりと支えてくれているおかげで、ローゼにも小さくうごめく下の人々を見ることが出来るほどの余裕が出てきた。

「うん。そうそう。いい感じ」

支えていない方の手でローゼの頭を撫でるロート。

「そろそろ着くよ」

小さな光景を夢見心地で見つめながら、ローゼは頷いた。

『治し屋』の看板の前に降り立つロートとローゼ。周りの人々
人が飛ぶのに見慣れているのか、二人を気にせず歩いている。

「よっ！ 治し屋のおっさん」

ロートが治し屋のドアを開けた。

「わいはまだ若い！」

奥からドタバタと現れたアーツルト。

「なんだよ。顔しわくちゃのくせに」

「うるさい！ 生まれつきや！ おめえもまだそんなチビ面しやが
って」

「チビって言うな！」

鋭い罵声が飛び交う。

「あの……」

「「関係ない奴は黙っとけ!!」」

同時に叫ばれた。その瞬間、ローゼの中の何かがブチッと切れる。

「もっ……」

また繰り広げられる激しい言い合い。

「いい加減にしてよ!!」

ローゼは傍のテーブルをドンと叩いた。

シーン

動きを止め、驚いたようにローゼを見る二人。

うっ……今日はどうも調子が狂っわ。

こめかみを押さえ、ため息をつくローゼ。

「私の怪我を治してもらったために来たんじゃないの?」

「お! そーだったそーだった。おっさん頼ん」

「んあ?」

アーツルトに睨まれるロート。

「……アーツルトさんよろしくお願いします」

ロートがおとなしくそう言ったのは、隣にいるローゼも彼を睨んでいたからだ。

「承知や！」

アーツルトは機嫌良さそうに奥へと案内した。

「また一瞬で治ったわ。なんかの手品なの？」

綺麗になった足をさすりながら、ローゼは呟く。

「治し屋は怪我を治す場所だよ」

頭の後ろで手を組みながら、ロートは言った。

「ふーん」

深く考えない方がいい。そう思ったローゼはそれ以上聞くのをやめた。

「これからどうする？ 城に戻るか？」

「うーん……」

今まで色々なことがありすぎた。少し休みたい。と思っていると

「あ！ コンフィテューレだ！」

ロートが店の看板を見て、嬉しそうな声を出した。

「なに？ そのコンフィ……って」

「おいしいよ。小腹も空いたし、食べてく？」

「でも私お金持っていない……」

「俺が奢るよ。行く」

強引に連れて行かれる。ローゼはその強引さに勝てなかった。

「……うん」

ロートに手を握られたまま、ローゼは頷くしかなかった。

「おいしいでしょ」

「うん……おいしいー！」

コンフィテューレというのは、どつやらお菓子の一種のようだ。丸いクッキーに、色とりどりのジャムが乗っかっている。

「このジャム、凄く甘い」

「ジャム？」

ロートが首を傾げる。

「じゃあこれはクッキーじゃないの？」

「クッキー？」

また首を傾げた。

「そのお菓子はコンフィテューレだよ。俺はその、クッキーだとかの名前の食べ物知らないな」

その言葉を聞いて、世界が違うことを改めて思い知らされた。

そういえば、お茶会の時も知らないものばかりだったかも。

「ねえ」

ロートが身を乗り出す。

「なに？」

「ローゼは、相変わらずピアノ弾いてるの？」

「なんでそれを……？」

「だっていつも弾いてたじゃん」

「え……？」

ローゼの顔を覗き込むロート。その瞳は、嘘を言っているように見えない。

「私とあなたって、前に会ったことあるの？」

何か言いかけたロートは

「あ……」

口を押さえて黙った。

「いや、なんでもないうつていうか……」

「え？」

「出るか。こっ」

ローゼの手を掴み、立ち上がるロート。

「ちよつとっ」

「行こつぜ」

逆らえない自分に、ローゼは困惑する。

「なんで……？」

引つ張られるようにして、ローゼは店を出た。

「1111は？」

「うーん。公園ってとこかな」

気付かないうちに、日はかなり落ちていた。オレンジ色の空が、ローゼのスカイブルーの瞳にうつる。

公園の端にある白いベンチに、二人は肩を並べて座った。

「さっきのはなんなの？」

「ああ、気にしないで。詳しくは王子が話してくれるだろうし」

「王子？」

「この国で一番偉い人だよ」

「ふーん」

しばらくの沈黙。ローゼは、風になびくロートの鮮やかな赤い髪を見つめていた。

綺麗……

吸い込まれるような赤。見ているだけで、くらくらとしてしまいそうなくらい綺麗な赤い色。

「なんか俺の髪についてる？」

「あっ！ ううん。別に」

我にかえったローゼが慌てて取り繕う。

ロートは、夕日に照らされて輝くローゼの髪を、くるくると弄もてあそんだ。何気なく二人の距離が縮まる。

「ねえ、一つ聞いても良い？」

「な、何？」

少し顔を近づけ、小声で言う。

「俺のこと、好き？」

「へ？」

「好き？ 答えて」

覗き込むロートの好奇心旺盛な瞳から、目が離せなくなる。まるで、何かに操られているかのように。

「嫌い……じゃ、ないよ」

苦しまぎれにそう言った瞬間、ロートはいきなり立ち上がった。

「やったー！」

そのままガッツポーズ。

「え？」

「だって『嫌いじゃない』ってことは『好き』ってことですよ」

「いや、それとこれとは……」

「ありがとうローゼ。すごく嬉しいよ！」

無邪気に笑うロート。その笑顔に、ローゼも自然と笑顔になる。

「あなた、単純すぎよ」

とたんに、喜んでいたロートがベンチに座り、ローゼ頭に手を乗せた。

「今の笑顔、すごく可愛い」

真面目に言われ、思わず頬を赤く染めるローゼ。

「俺もローゼのこと……」

ロートの手が、ローゼの体に触れる。そして、ゆっくりと抱きしめた。

ローゼの体が一瞬、こわば強張る。

「……嫌？」

少し体を離れたロートが、心配そうに言った。

体が、心が、寂しさを訴える

胸が苦しくなる

息が上手く出来なくなる

彼が欲しくなる

「嫌じゃない……よ」

力の抜けたローゼの体を、ロートはしっかりと抱きしめた。

ローゼの言動の二つひとつに

一喜一憂してしまう

それは俺だけに言ってくれた言葉だから

ねえ、もっかい言ってみて？

俺が好きって

「ローゼ、俺も……」

夕日が完全に沈み、街灯のない辺りは暗くなる。

「大好きだよ」

ローゼの顔を確かめるように、輪郭をなぞるロートの指。

そして……

柔らかいものが、一瞬だけ唇に触れた。

暗い公園の中。さわさわと揺れる周りの木々だけが、二人を優しく見つめている。

相手は自分よりも子供

なのに

どうしてこんなにドキドキするの？

迷いを捨てるように、ローゼは目を閉じる。

見たくないのなら、見なければいい

闇に溶かしてしまえば

もう何も見えない

ほら、今だって

そんな言葉を、誰かから聞いた気がする。ぼんやりとした頭で、ローゼは考える。

何故私は今

抱きしめられているのだろう

抱きしめられた腕は、とても暖かい。

答えも出ないまま、ローゼの意識は途切れた。

第一楽章・七、赤色の純粹（後書き）

《ロート》

火を司る赤の天使。その実体は単純天使。年齢不詳だがローゼより年下の子供。子供の癖にまかせていて、一人よく動くし、よく喋る。

第一楽章・八、紫色の独占

「まったく、どこに連れ去られたかと思えば」

「心配して損したな」

四色の天使に囲まれ、補導された子供のようにしゅんとしているロート。

遡^{さかのぼ}ること数十分

鳥のさえずりが聞こえる。穏やかな風が頬を撫でた。

「ん……？」

目を開けるローゼ。そして

「うわっ！」

飛び起きた。

「……？」

記憶をたどる。そして、思い出した。

赤い上着が、体にかけられている。固まってゴキゴキとなる肩などの関節をほぐしながら、ローゼはゆっくりとベンチに腰掛けた。

目の前には、背もたれに体を預け、「すー、すー」と眠っている

ロートがいる。

私は抱きしめられたまま、寝ちゃったの？

一人類を赤らめるローゼ。ロートは上着を着ていない。

これは、ロートがかけてくれた……。

「もっ……」

少し顔を近付ける。ロートの寝顔は、まだ幼い子供。

ローゼは、細い指でロートの頬に触れた。弾力のある頬を、ぷにぷにと横に引っ張る。

「いたついてて……」

頬を押さえて目を開けるロート。

「おはようロート」

「あ、お、おはよ」

見つめること、約三秒。

我に返り、ぱっと飛び退くローゼ。

「あ、その、ごめんなさい！」

「ん？」

「え……いや……」

「もしかして」

ぐいっと顔を近付けるロート。

「俺に惚れちゃった？」

ニヤリと笑うロートの顔がさらに近づく。ローゼは動けない。

「そこまです」

その瞬間、ローゼの体が浮いた。

「わっ！」

「まさかこんなところにいたとは……困った子達ですね」

そう言ってローゼを抱え直したのは……

「ヴァイス？」

「心配しましたよ。ローゼ様。さあ、城に戻りましょう」

「え……ひゃっ……」

飛び上がるヴァイス。ローゼはこの瞬間がどうも慣れない。

「ヴァイス？」

「どうか致しましたか？」

「羽が……」

ふわりと浮いているヴァイスには、純白の羽が生えていた。

「驚きましたか？」

「羽……凄く綺麗」

「天使ですから」

微笑むヴァイス。

「おい！ 俺のこと忘れてないか？」

下から叫ぶロート。

「貴方は自分で飛べるでしょう」

冷たく言い放つと、ヴァイスはローゼを抱いたまま城へ向かって飛んだ。

「なんで城に帰って来なかったんだ？」

ゲルプがロートに聞く。

「だって、ローゼがあまりにも可愛いから抱きしめちゃって」

少し照れていうロート。

「はあ!?!」

キレそうになるゲルプを、グリーンがまあまあとなだめながら言う。

「それで?」

「そのままローゼが寝ちゃったから……」

「連れて帰れば良かったんじゃない?」

「だって、俺も眠かったし」

全く悪気のない笑顔で頭をかくロート。

「ロートは、明日から一週間の謹慎処分ですね」

冷たく言い放つヴァイス。

「えー!」

頬を膨らませるロート。

「そうだ。ローゼ様に何かあったらどうしていたつもりなんだ? それに、今日は舞踏会の日だ。せっかくの日にローゼ様にもしものことがあったら……」

「ごちゃごちゃと説教を始めるブラウ。その時、そろそろとグリユーンが近付き、ローゼの耳元で囁いた。

「ヴァイスが言ってる通り、今日は舞踏会の日なんだ」

「舞踏会って？」

「後で詳しく説明するよ。それより、シャワーでも浴びてきなよ」

グリユーンはローゼをドアの外に連れ出す。

「ここを真っ直ぐ行くと、シャワールームがあるから、ね」

そして、閉め出されてしまった。

「まったく。何よみんな」

ローゼは混乱していた。あんなふうに、自分からキスを求めたり、抱きしめられるのを許したりしたことなんてない。自分でない誰かが、自分を動かしているような。不思議な気持ち。

どうして？

そんな事を考えていたら、壁にゴチンと頭をぶつけた。

「いたっ」

頭を押さえて我に戻るローゼ。

「あれ？　ここ……どこ？」

無意識に来てしまったそこは、どこだか全く検討がつかない。ただでさえまだ城の内部がよくつかめてないので、ローゼはまた迷ってしまったようだ。

「うう……どうしよう」

ここが突き当たりなら、戻るしかない。とりあえず適当に歩を進めてみる。薄暗い、長い廊下。左右にあるのは同じ形をしたドアのみ。

「シャワールームって、ちゃんとドアに書いてあるのかしら？」

しばらく歩いていると、前方に見えたドアの隙間から光が漏れていた。

人が……いるのかな？

迷ったなら人に聞くしかない。そう思ったローゼは、そのドアにそっと近付き、ノックした。

トントン

「誰だ」

低い声の中から聞こえた。

「あの、迷ってしまっ」

「質問に答える。お前は誰だ」

感じが悪い人ね。

「私は、ローゼよ」

そう言った瞬間、ドアが開いた。

「用は何だ」

ドアを開けた相手は……真っ黒だった。

高い位置に一つに結んだ髪も、暗い瞳も、センスのよく分からない服も、全部黒。唯一病人のように白い肌が、引き立って見える。無表情でローゼを見ていた。

「あの……シャワールームってどこかしら？」

「そんなことが」

相手は部屋から出てドアを閉めると、言った。

「案内する」

先立って歩き始める。

なんなの、この人。

「ねえ……」

「何だ」

黙々と歩いている黒の男。

「あなた、名前は？」

「シュヴァルツだ」

「シュヴァルツ？」

「そうだ。シャワールームはここだ」

他のドアとあまり変わらないドアを示すシュヴァルツ。

「ここなの？」

「そうだ。このプレートに『SHOWER』と書いてあるだろう」

「小さいわね。分かりにくいわ」

「文句を言つな。他に用が無いなら私はもどる」

さっと身をひるがえすと、戻っていくシュヴァルツ。

「あ のっ！」

「何だ。まだ何かあるのか？」

振り返るシュヴァルツ。

「その……シュヴァルツって天使なの？」

「そうだ」

短く答えると、また後ろを向いて行ってしまった。

「なんなの？ あの人……」

黒の天使 シュヴァルツ

これで、全員揃った

「はあ。さっぱりした」

タオルを巻いて脱衣所に出てくるローゼ。

「……へ？」

目の前には……3人のメイドがいた。

「ローゼ様。お迎えに参りました。舞踏会の準備を致しましょう」

真ん中のメイドがにこやかにそう言った瞬間

「きゃあー！」

隣の部屋に拉致された。

「ちょ、ちよつと!」

タオルを剥がそうとするメイド達に、必死に抵抗するローゼ。

「わたくし共はローゼ様をドレスアップするよう命令された者です。ですから、嫌がっても命令は実行しますよ」

「え……いやあ!」

三対一ではかなわず、ローゼは着せ替え人形のように着替えさせられたのだった。

「やっぱりお似合いですね」

「ローゼ様にぴったりですわ」

「ローゼ様もそう思いませんか?」

「う……」

薔薇模様をあしらわれたピンク色のドレスは、白のフリルがいやというほどついている。頭には薔薇色の大きなリボン。今までのよりかなり豪華だ。

こんなひらひらなドレス、私には似合わない。

「いいえ、よく似合っていますよ」

後ろで声がした。はっとして振り返るローゼ。

「ヴァイス、みんな……」

後ろにいたのは、五色……いや、面倒臭そうにドアに背を預けている黒の天使も含めて六色の天使だった。

「お迎えにあがりました。ローゼ様。舞踏会の会場へ行きましょう」

ヴァイスに続き、天使達は恭しくお辞儀をした。

「うわぁ……」

豪華すぎる会場。

吹き抜きの高い天井。輝くシャンデリアはいくつあるか分からない。

周りにいる人々は、ローゼに劣らず豪華な衣装と、優雅な仕草しくさで会話を楽しんでいた。人々といつても、普通の人間ばかりではない。動物達もみんな二本足で歩き、着飾っている。

「あれ？」

ある方向を見て、ローゼは驚いた。

「どうかした？ ローゼ」

横にいたブラウが聞く。

「いや……その……あれって」

ローゼの目線の先には、オーケストラのようにズラリとならんだ楽器があった。しかし、それを弾いているはずの人が見えない。まるで透明人間が弾いているかのように、浮いた状態のまま勝手に動く楽器達。それらは、静かに優雅な音楽を奏でている。一番前では指揮棒が、誇らしげに指揮を振っていた。

「なにこれ……」

「楽器にも命はある。一人で音楽を奏でることぐらい出来るよ」

ブラウはにっこりと微笑む。

「ただし、一つだけ一人で奏でることが出来ない楽器ある。何だと思っ？」

そんなの分からない。と言おうとした時だった。

オーケストラの音が、途切れた。

周りで会話をしていた人々もそれをやめ、中央に位置する舞台に視線を移す。ローゼもそれにつられて、舞台に視線を向けた。

舞台に、一人の青年が立った。

「皆さん、こんにちは」

恭しくお辞儀をする青年。

「今宵はお集まり頂き、ありがとうございます」

この人……綺麗。ローゼは思った。

整った顔立ち。灰色の髪に、紫の瞳。目にかかるほどの長い前髪からのぞく鋭い目が、会場を見回す。

「あっ、えっ？」

舞台上に集中し過ぎて、そっと置かれた後ろの手に気づかなかった。

「行きましょう」

耳元で囁いたのは、ヴァイス。そのまま押される。

「何？ どこに？」

「舞台です」

言われるがまま、ローゼは舞台へ向かう。

「もう既にご存知でしょうが、今日はあのローゼが我が国に来たことを歓迎する会です」

「そのまま舞台に出てください」

舞台裏まで連れて来られたローゼに言うヴァイス。

「え？ でも……」

と言った瞬間、ドキンと胸が高鳴った。

《あなたは行カナケレバならない》

ローゼの足は舞台へ上がる階段をのぼる。

「ローゼ、どうぞこちらへ」

目の前には、あの青年がいた。

周りの人々から、どよめきが起こる。

「ローゼ様か？」

「あのローゼ様が来てくれたのね！」

「ずっと待っていて良かった」

「美しいわ……」

ため息と共に眩かれる称賛しょうさんの声。

「これから、舞踏会を始めます。皆様、楽しい一時ひとときを」

それを合図にしたかのように、オーケストラの演奏が始まった。会場の人々は、思い思いに踊り出す。

「さあ、僕達も踊ろう」

青年が、微笑む。

「あなたは？」

「失礼、名を名乗るのを忘れてたね。僕はこの国の王子、モーント」

「王子？」

「ああ。さあ、踊ろう」

「でも私、踊り方知らない……」

「大丈夫。僕がきちんとエスコートするから」

差し出されたモーントの手に、少し迷ったローゼは手を乗せた。

オーケストラが作り出す、ワルツの三拍子。

ぎこちないローゼを、優しく、しなやかに、誰ともぶつかることなく導いていくモーント。

そんな美しい二人に、誰もが心を奪われる。中には、立ち止まって見つめている人もいる。

「どう？ 楽しい？」

急に体が引き付けられ、話しかけられた。ワルツの三拍子が、ローゼの心を酔わせる。

ローゼは静かに頷いた。

「それは良かった」

モントは、ローゼの手の甲に唇を触れさせると、また三拍子の渦へとローゼを引き込んだ。

どれくらい踊ったのだろう。

ローゼの視界に、ある人物が入った。

「……………」

「どうかした？」

目の前を、ヴァイスが通り過ぎていった。途中で仮面をつけた女の人に話しかけられたが、それには答えずに。踊る人々の間を縫うように歩いて行ってしまった。

見回すと、他の五色の天使達も、誰とも踊らずに会場内を歩き回っている。

「彼らが、気になるのかい？」

踊るのをやめ、壁際へ連れてこられたローゼ。

「そういえば、確か六人とも関わりを持ったんだっただね」

「みんな、何をしているの？ せっかくの舞踏会なのに」

「彼らには、警備をさせている」

会場の方をちらつと見て、またローゼを見るモーント。

「この時期は、不審者が多いからね」

「そうなの。大変ね」

目を会場の方に向けたローゼを、壁に押し付けるモーント。

「なっ、何!?!」

「今はそんなの関係ないだろう。僕と踊っているんだから」

彼の紫色の瞳から、目を逸らすことが出来なくなる。

白い手袋をしたモーントの手が、ローゼの顎を掴んだ。

「でもっ……」

急いで払いのけようとするローゼの手を反対の手で掴むモーント。
そのまま、キスをした。

唇をぶつけるような、強引なキスが離れる。

「でも、何?」

紫の瞳に見つめられる。

「なんでも……ない」

この人には逆らえない。

ローゼは本能的にそう感じた。

「そう」

ローゼを解放するモーショント。

「それじゃあ、いいものを見せてあげる」

「いいもの？」

「うん」

そう言われて連れてこられた先には、ピアノがあった。

「これ……」

「驚いた？」

「薔薇のピアノ……」

薔薇のピアノ　ローゼはいつもそのピアノをそう呼んでいた。

それは、ローゼが初めて発表会に出た時に、一目惚れしたピアノだ。そのピアノには、華やかな薔薇の模様が彫られている。黒く艶やかなピアノに鮮やかな薔薇の彫刻は、ローゼの胸をときめかせた。

「なんで……？」

そのピアノが欲しいという願望は叶わなかった。だからローゼは、毎年ある発表会が楽しみだった。発表会の会場に、そのピアノはあるのだ。

薔薇のピアノ。

毎年、毎年、そのピアノに恥じない演奏をする為だけに、毎日練習してきた。

ローゼの頭に次々と思い浮かぶ『思い出』。

そういえば、毎年お父様が、両手に抱えきれないほどの大きな薔薇の花束を持って、演奏の後抱きしめてくれたっけ。「凄く上手だったよ」って。

その時、ずきんと胸が痛んだ。

お父様？

《マダ駄目よ》

また聞こえる。この声。

《マダ、その時じゃない》

まだ？ 何？

「弾いてよ」

戸惑うローゼを抱き上げると、椅子に座らせるモーント。

「君の一番好きな曲、弾いて」

「一番……好きな？」

「うん」

考えなくても、体が動いていた。

ローゼが鍵盤に手を乗せた瞬間、会場が静かになった。誰もが、これからの音を聞き逃すまいと集中している。

ゆっくりと、指が動きだした。

『きらきら星』

ローゼの大好きな曲

初めての発表会で、初めて観客の前で、弾いた曲。

弾き終わった瞬間、拍手が大きな波のように押し寄せてきた。

そう。この拍手の為に、ローゼは毎年発表会に出ていた。

「もっと……」

モーントが耳元で囁く。

「もっと、聞かせて」

もつと……

ローゼはまた手を乗せる。

自分の感じるがままに、指を動かす。

それに合わせるように、オーケストラも音楽を奏ではじめた。人々も踊りだす。

音楽を奏でられる、幸せ。

夢のような時が過ぎてゆく。

「ローゼ……」

その中で、怪しく微笑むモーント。

「一人で奏でることの出来ないたった一つの楽器……ピアノ。そしてこの世界で、これを奏でることが出来るのは君しかない」

楽しそうなローゼの後ろ姿を、見つめるモーント。

「君は絶対に僕のものにする」

夢のような時は、まだ続いていた。

第一楽章・八、紫色の独占（後書き）

《モーント》

完璧主義者の名に相応しく、見た目、頭脳、戦闘力、何においても完璧な音の国の王子。もちろんモテる。独占欲の強さと、上から目線口調がたまにキズ。銃系を使った戦いが大好き。

第一章・九、黒色の抱擁

この国に来てから、一週間が経った。

城の内装は大体理解した。暇つぶしによく行っていたティールームの花達ともかなり仲良くなれた。ただ不満が一つ。

「ねえ」

「何だ？」

ここは王子モーンの部屋。ここには、面白い本がたくさんあるので、本好きのローゼはよく訪れる。

「いつになったら外出させてくれるの？」

「……………」

書類の片付けに集中しているモーン。でもローゼは知っている。『集中しているふり』をしているだけだということを。

「……………ねえ！」

「仕事中だから話しかけるな」

「いつもそうやって答えない」
頬を膨らませるローゼ。

その時、ガタン。と音がした。モーンが席を立ったのだ。

「……………ねえ」

無表情でローゼに近づくモーン。ソファーに座っているローゼは、本を持ったまま少し後ずさりした。

「し……仕事は？」

「飽きた。あんなもの、天使共にやらせればいいことだ」

「じゃあ、質問に答えてよ」

「ふーん。王子相手に随分といい態度だ」

更に近づくモーン。ローゼは、動かない。いや、相手の気迫に圧倒されて動けないという方が正しいだろう。

「君が知る必要はない。だから言わないだけだ」

ドサッ

ローゼは、ソファーの背もたれに押さえ込まれた。

「どっし……んっ……」

急に、ローゼの口がモーンのそれで塞がれる。強引に舌をねじ込められ、乱暴に動かされる。

「ん……んっ」

いきなりすることに驚き、引きはがそうとするローゼ。だがモーンの厚い胸板が、それを許してくれない。だんだん頭が真っ白にな

り、精一杯抵抗する力も抜けてしまった。

力が抜けたことを確認したモーントは、ゆっくりと唇を離す。ローゼの信じたくない事実を証明する銀色の糸が、二人との間に一瞬繋がってぷつんと切れた。

「……………なん……………で？」

涙目のローゼを見つめるモーント。どこか悲しそうな紫色の瞳。

「……………心配なんだ」

ぼそりと呟くモーント。

「え？ 今何を」

「何でもない」

ローゼから離れ、服の乱れを整えるモーント。

「いつもと違うよ？ どうしたのモーント」

他の天使は仕事が忙しいらしく、この一週間ローゼはピアノのホールとティールーム、そしてモーントの部屋を行き来するばかりであった。仕事なのに邪魔しては悪いと思ったローゼを、気にするなどそっけなくもあるが受け入れてくれていた。それなのに……………。

「……………すまない。酷いことをした」

謝るモーント。そして、ローゼの隣に座った。

「怖かっただろう。すまないな」

ローゼの頭を撫でるモーント。

「だが君はここを出ない方がいいんだ。これ以上君が外出したいと言っならば……僕は何をするか分からない」

「それは……」

ドキン

心臓が高鳴る。

「私……おかしくなるの」

「……………」

モーントは、答えない。黙ってローゼの話の話を聞いている。

「キスとか……そういうの、特定の好きな人とするものじゃない。なのに……そんなこと分かってるのに。いざとなると私、おかしくなるの。もっとしてほしいと思ったり、急に寂しくなって求めてしまったりするの」

「なるほどな」

ローゼの頭に手を乗せたまま、もう片方の手を顎に当てるモーント。

「『そろそろ』言ってもいい頃だとは思っていたけど。いいだろう。全て説明してあげるよ」

ローゼの頭から手を離すと、向かいのソファーに座るモーント。

「全て？ 何の？」

「『天使の』だ」

ローゼから目を離さずに、モーントは足を組んだ。

「六色の天使達に、それぞれ司るものがあるのは知ってるか？」

頷くローゼ。

「じゃあ……その先だな。その力を放出するのには、『力の源』みなもとが必要なんだ」

「力の源？」

「そうだ。それが君ってことなのさ」

「私？」

「君と関わることで、あの天使達には力が宿る。もちろん君がいなくても力を増やす方法はあるが、君の力は絶大だ」

「……………」

「だから、君を惑わせる力を、彼らは持っている」

ソファアールから立つと、ローゼの頬に手を乗せるモーント。

「君のその不思議な気持ちは、彼らのせいなんだよ」

頬に寄せられた手の手首を、握りしめるローゼ。

「じゃあ……私の事を好きとか言うのも？」

「本心かは分からないな。君の気を引く為の、手口である可能性もある」

「嘘っ……」

頬にある手を無理矢理剥がすと、下を向くローゼ。

「そう落ち込むな。それに、僕は天使ではない。君に近付くのはそんな理由ではない」

行き場を失った右手を見つめながら、モーントは言った。

「でも……だつたらさっきのは？」

「ああ、あれは君への想いが募りすぎてしまった結果だ。すまない。謝る。二度としないことを誓おう。そして……」

モーントの手が、ローゼの髪を一束すくった。

「好きだよ。ローゼ」

近づくモーントの整った顔。

「君もそれなりの覚悟をして、この部屋に来てるんだろ？。ここは僕の部屋だ」

前髪からのぞく鋭い瞳が、キラリと光る。そして……

「違っわ」

モーントの動きが、止まった。

「本心だよ？」

「違っ、違っ！」

モーントの手を振りほどくとドアを開け、思いつきり閉めた。

違っ！ 私は誰も好きじゃない。誰も……好きにならない。

好きになっ てはいけない

がむしゃらに走ると、城の玄関が見えてきた。

「ローゼ様！」

周りにいた使用人達の手を振りほどく。

「嫌っ！」

そのまま外に出た。

外に出たといっても、庭もかなりの広さがある屋敷。仕方なく適当に歩を進めていると、遠くだが門らしきものが見えてきた。

「あれかな？」

それに向かって走ってみる。

しばらく走ると、門の前に着いた。

「うわぁ……」

見上げるほどの高い門は、ローゼの背丈の三倍程はある。乗り越えることは無理そうだ。

「どじしどじ……」

門の前でうろたえていると、門の外で声がした。

「誰だ！」

「えっ!?!」

「……なんだ、おまえか」

ローゼを見て、殺気立っていた表情を少し緩めたのは、シュヴァルツ。

「そこで何をしている」

「それは……外に出して欲しいの」

「おまえの外出許可が出た連絡は聞いてないが」

「許可も何もないわ。早く出してよ!」

「だが……まだ外は危険だ」

静かに言うシュヴァルツの表情は、変わらない。

「まだ……危険って?」

「おまえには関係ない話だ」

「だったら良いじゃない。開けてくれなかったら、ずっとここにいろわよ」

「……私は面倒事が嫌いだ。早く屋敷へ戻れ」

「嫌だ」

「戻れ」

「いやーだつ。あんな屋敷の中にずっといたら、かびてしまっわ」

「しつこい女だ」

「だつて……」

なんで？

なんで皆私に何も教えてくれないの？

ねえ、私は誰なの？

私は……ダレ？

気が付いたら涙がこぼれ落ちていた。とめどなく流れる涙は、な
んで流しているかなんて分からない。ただ、否定出来ない何か溢
れ出しているような、複雑な……

「！？」

シュヴァルツは、一瞬驚いた表情をすると、とっさに門を開けた。

「おいっ、おまえ……」

「ねえ、私は……どうすればっ……いいの？」

分からない

分からない

「私は……私はっ……ひくっ」

ふわっ

一瞬の出来事だった。視界が真っ暗になった。それがシユヴァルツの胸の中だということに気付くのに、少し時間がかかった。

「シユヴァルツ……？」

「泣くな」

「へ？」

片方の腕は腰に回され、もう片方はローゼの頭を自分の胸に押し付けている。

「女なんぞに泣かれると……どうしていいか分からなくなる」

温かい……

未だにぐずぐずと泣いているローゼが落ち着くまで、シユヴァルツはずっとそうしていた。きこちなく、ただしっかりと抱きしめていた。

分からないのはお互い様

溢れ出すこの気持ちが

何なのかは分からない

ただ一つだけ分かるのは

お前が『特別』だということだ

「……行きたいのなら、行けばいい」

「え？」

未だにシュヴァルツに一方的に抱きしめられた状態で、急にそう言われた。

「分からないのなら、確かめればいい」

シュヴァルツはそっと体を離すと、ハンカチを持たせて背中を向けた。

「私は何も見ていない。何も知らない。お前は好きな所へ行けばいい」

「……本当に？」

「ああ。だから早く行け。私の気が変わらないうちに」

「気が？」

「　　。私は男だからな」

「ありがとう」

シュヴァルツの言葉の意味が分かっていないローゼは、ハンカチを返すと少し笑った。

「早く行け」

ぶっきらぼうに言うシュヴァルツ。

「ええ」

ローゼは門から外に出ようとする。

「……待て！」

「何？」

「くれぐれも……気をつける。それだけだ」

「分かってるわ」

ローゼはそう言いつと、外に出た。

「……………」

だんだん小さくなっていくローゼの後ろ姿を見つめながら、まだ柔らかい感触の残っている両手を見つめるシュヴァルツ。

「特別、か……………」

門を閉めたシュヴァルツの表情は、もとの冷徹なものであった。

第一楽章・九、黒色の抱擁（後書き）

《シュヴァルツ》

闇を司る黒の天使。その実体はツンデレ天使。いつも冷徹で、あまり話しながらない。無表情が多く、考えていることもよく分からない。だが時々甘くなる……（？）

第一楽章・十、悲劇の少女

薄暗い森の中

しばらく走ると、急に騒がしい音と声が聞こえてきた。

「これは……」

歌？

ギターみたいな音と、それに合わせて歌う楽しげな声。誘われるように歩いて行くと、急に明るくなった。森が開けたのだ。

「音楽大好きムズイク」

「気楽に歌っていても怒られやしない」

「俺ら気楽な歌い手さ」

「さあ踊ろ……ん？」

数人の男女の若者達が、一斉にローゼを見た。

「お嬢さんどうしたんだい？ こころじゃあまり見かけない顔だが」

「あ、すみません、私……」

「まあ、いいや」

一人の若者が、ローゼの手を引いた。

「踊りましょう。お嬢さん」

「で、でも……」

「この国ではみんな歌って踊って仲良くなるのよ。だから一緒に踊りましょう」

「そうよそうよ」

「一緒に踊って仲良くなるうぜ」

傍においてあったギターが鳴り出す。やはり人がいなくても、勝手に音楽を奏でることが出来るようだ。困惑するも、言われるがままにローゼはみんなと踊り出す。

「俺達、気楽な歌い手」

「歌って踊って楽しい毎日」

ワルツの三拍子とまた違った愉快なリズムに、心まで踊り出しそ
うだ。

「どうだい？ 踊るのって楽しいだろ？」

「ええ。凄く」

そんな楽しい時間を過ごしていると、不意に肩を叩かれた。

「え？」

振り向くローゼ。

周りの若者達は、踊るのに夢中で気付いていないようだ。

後ろには、さわかな笑顔の男が立っていた。

「お楽しみ中失礼。突然だが、君はピアノを弾くのは好きかい？」

人の良さそうな笑みの男性に心を許したローゼは、答える。

「ええ、大好きよ」

「それは良かった」

その男性は、少し声を潜めて言った。

「家にピアノがあるんだが、弾ける人がいなくなってしまってね。

せつかくの良いピアノが可哀相だと思っていたんだ。だから今、弾ける人を探していたんだが……」

ローゼをちらつと見る男。

「弾いてもらえないかな？」

ローゼは少し考えた後、答えた。

「いいわよ。あなたの家のピアノ、どんな音がするのか楽しみだわ」

「良かった!」

男は目を輝かせる。

「そしたら、こっちへ来てくれるかい？」

ローゼはその男についていった。

「この国の人は、いい人達ばかりね」

そんなローゼの後ろ姿を見ていた黒い人影が、音をたてずにスツと動いた。

「ここだよ」

「え……?」

何も考えずについていった矢先、いつの間にか暗い洞窟のような所に来てしまった。

「ピアノは?」

「君、ローゼだろうか?」

ぼつつと燃えた松明たいまつのような火が、男性の顔をうつし出した。相

変わらず爽やかな笑顔。

「君は、ローゼなんだろう?」

迫る男性。ローゼは少し後ずさりする。

「答えなさい」

優しい声。だが、有無を言わせぬ迫力がある。

「う……ん」

小さく頷くローゼ。にこりと微笑む男の顔が、怪しげに歪む。

「マジかよっ!」

暗闇で、その男とは違う声があった。

「ボスは本当にローゼを見分ける力があるんだな」

「やっぱりボスは凄い!」

ぼわっぼわつと次々に明かりが灯る。ゆらゆらと揺れる火にローゼは囲まれていた。

「どういう……こと?」

「大したことでない」

炎に照らされた男性の顔が、更に怪しく歪む。

「君は知らないだろうね」

「何を……？」

「昔からの言い伝えだ。ローゼの『肉』を食べるとね……」

その瞬間、数人の手で腕を押さえつけられた。動かそうとしても、びくともしない。

「不死身になれるんだ」

「なっ……」

地面に取り押さえられる。目の前に光るのは

短刀

口をパクパクと動かすローゼ。恐怖で声が出ない。

「絶世の美少女と聞いていたが、その通りだ。首から上だけは残しておいてやろう。なあに、一瞬のことだ。痛みなんて感じない」

ニヤリと笑う男は、明らかにさっきと様子が違う。

「さあ、殺^やってしまいなさい」

振り上げられる短刀。ローゼは瞬時に目をつむった。

「……………」

だが、予想していた痛みはいつまでたっても訪れることは無かった。

恐る恐る目を開けるローゼ。

「うっ……………」

黒い人影が、短刀を振り上げた男の腕を掴んでいた。

「あら、ごめんなさい。か弱い女の子に刃物に向ける人を見かけたら、我慢ならなくなつて」

つんとした、女の人の声でした。

ギリギリと骨の軋む音がする。男の僅かな呻き声と、短刀が手から滑り落ちて軽い音をたてたのはほぼ同時であった。

「っ……………邪魔物だ！ 殺せえ！」

さっきのボスと呼ばれていた男の合図と共に、沢山の足音がこちらに近付いてきた。

「逃げるわよ。お嬢様」

腕を強く握られる。そのままローゼは、引つ張られるようにして走り出した。

途中で「かはっ」「やぐえっ」といった呻き声が聞こえる。追い

かけてくる人々を、その女が蹴散らしているのだ。

「見ちゃダメよ」

血しぶきに驚くローゼを庇うように走る女。

「しつこい人達ね」

しばらく走ると、誰も追いかけて来なくなった。

「この辺でいいかしら……」

もう夜も遅くなっていた。暗闇を淡い光で照らす街頭の傍で止まる二人。

「大丈夫？」

膝を屈^{かが}めてローゼを見る女。あんなに走ったのに、少しも呼吸は乱れていない。

「可哀相に。怖かったですよ」

ローゼは、泣いていた。

急に走ったせいで未だに上下する肩を優しく撫でながら、涙を拭いてやる。その女の優しい声と仕草で、ローゼは少し落ち着いてきた。

「あなたは……?」

「私? 私はルプラ。この国の警備を生業なりわいとしているわ」

そういうルプラをまじまじと見つめるローゼ。凹凸の激しいスタイルの良い体に、ピッタリとした黒い警備服。瞳とボブカットの髪は、鮮やかな茶色だった。

「警備?」

「そう。この国はまだまだ物騒な人が多いのに……。さっきの話だと、貴女はローゼなの?」

「……ええ」

「本当に!?!」

さっきとは打って変わった驚きの声で、ルプラは叫んだ。

「てつきり向こうが間違えていたのかと思ったわ。そうなの……じやあ貴女は、城を抜け出して来たの?」

静かに頷くローゼに、ルプラはくすりと笑った。

「ローゼって、そんなに好奇心旺盛な人だったのね」

つられてローゼも笑顔になる。しかし、すぐに暗い表情になった。

「あの……」

「何？」

「さっきの人が言っていたことって何？ 私を食べるとか……」

先程のことを思い出し、震える声で聞くローゼ。

「ああ……」

ローゼを落ち着かせるように金色の髪を撫でるルプラ。

「そんなのはでたらめよ」

「デタラメ……？」

「そう、貴女を待っている時間があまりにも長すぎて、あらぬ噂が
沢山たつてしまったの。私はその取締役もしてる」

「取締役……」

「そうよ。もう夜が更けてしまったわね。本当はいち早く城に連れ
ていってあげたい所だけど……仕方ないわ。今日は私の家に泊まり
なさい」

「でも……」

「いいのよ。遠慮しないで。それに、一人じゃまた危険な目に遭う
わよ」

ウインクをしながら言うルプラ。

「ありがとう」

「その笑顔、素敵よ」

じゃあ行くことと言われながら、ローゼは手を引かれた。

ドク……

「どうしたの？」

急に足を止めたローゼに心配そうに聞くルプラ。

「何でも……ない」

心臓が跳ねた音。何かに近付いているのに。確かに近付いているのに。それを阻止されているような。

「そう」

そんなローゼを見て、一瞬だけ表情を歪ませるルプラ。ローゼに気付かれないように、一瞬だけ。

「じゃあ行きましょう」

ルプラはあまりローゼを見ないようにしながら、手を引いて歩いて行った。

「この部屋、自由に使っていていいわよ。どう？ 悪くないでしょ」

ドアを開け、ローゼの背中を優しく押すルプラ。

「うん……ありがとう」

「後で夕食運ぶわね。そんな、遠慮しないで。貴女はローゼなんだから」

ウインク一つ残し、ルプラは部屋のドアを閉めた。

「……………」

眠れない。

あの後夕食を食べ、シャワーを浴び、ベッドに潜り込んだのだが

……

眠れない。

頭の中では、答えのない疑問がぐるぐると回る、回る。

前にもこんなことあったっけ。何を考えていたのか忘れたけど。

冷静な考えとは裏腹に、頭は疑問で埋めつくされる。

私を、待っていた？

以前にみんなと会ったことがあるの？

なんであんな物騒なでたらめが？

ローゼって何？

「ローゼ……」

その名を呟いたとたん、不思議な気持ちに捕われる。

確かにその名前は自分のものなはずなのに、別の人の名前を呟いているような感覚。

この手も、頭も、足も、目も、髪の毛一本にいたるまで、自分のものなはずなのに。

違和感。

どこからともなく沸き出す、不可解な違和感。

「私は……」

コンコン

急にドアがノックされた。

「はっ、はい！」

いきなり現実に戻されたローゼが、引きつった声を出す。

「私よ。入るわね」

声と共にドアが開けられた。

「やっぱり眠れないのね。当たり前よね。あんなことがあった後だもの」

『あんなこと』の所で目を伏せるルプラ。同情しているのだろうか。そのままベッドの脇にある椅子に座る。

「ホットミルクを持ってきたわ。飲んで温まって。きっと落ちつくでしょう」

「……ありがとう」

白いマグカップを受け取り、中身を一口飲むローゼ。

「今度町を出歩く時は、天使達について来てもらいなさい。一人じや、またあんな目に遭うわよ。今回はたまたま私が通りかかったからよかったけど」

心配そうな目で見つめられ、ローゼは黙って頷くことしか出来なかった。

天使……そういえば、みんなどうしてるかしら。私のこと、怒ってる？ 黙って逃がしたシュヴァルツは、責められてないかしら。それに……

あれ？ 眠気が

「今は何も考えずに、ぐっすり眠ったほうがいいわよ」

からっぽになったマグカップを、ローゼの手から外すルプラ。

急に訪れた眠気に驚くローゼをよそに、そっとベッドに横たわらせ、ブランケットをかけてやる。

「疲れたでしょう。ゆっくり眠れば、すっきりするわよ」

まるで何もかも知っているような言い方。

「何で……」

その後の言葉を言う前に、ローゼは意識を失った。

「……………」

しばらく小さく寝息をたてているローゼを見つめるルプラの瞳が、少し暗くなる。

「相変わらず良く効くものね」

白い液体の入った小びんを目の高さまで上げるルプラ。そこに手書きで書かれた文字を見る。

睡眠薬

「ごめんなさいね。こんな方法でしか貴女を守れなくて。でも、答えの見つからない疑問で眠れなくなるよりはマシだと思うの」

深い眠りに堕ちた美しい少女。

「全ては、貴女　そう、ローゼの為」

誰かに言わされているかのような言い方。でも、すぐに優しい言い方になる。

「明日は天使様が迎えに来てくれるでしょう。それまでは……」

ローゼの頬にそつと手を乗せた後、椅子から立ち上がるルプラ。からになったマグカップを持って。

「ゆっくりお眠りなさい。』フリア『」

ドアが閉められる音と共に、静けさの訪れた部屋の中、ローゼは夢を見ていた。

あなたのせいよ

あなたのせいで……

あなたのせい

あなたが殺した

殺した

コロシタ

わたくしの

タイセツな人を……

「違う！ やめて！」

責められる

「痛い！ やめて！」

叩かれる

「嫌だ！ やめて！」

強制される

私は……私は……っ

「ローゼ」

近付かないで

「ローゼ」

そんな目で私を見ないで

「ローゼ、起きな」

「やめてっ!」

ベチン。と鈍い音がした。

「ローゼっ!」

手首を捕まれ、大声で名前を呼ばれる。

「はっ……!」

目を開ける。日差しが眩しい。目を慣らすように何度か瞬きをすると、頬に赤い痕あとがあるルプラが視界に入った。

「ルプラ? 私は一体……」

その声を聞いて、安心したかのように掴んだ手首を離すルプラ。そのままその手の甲を額にあてる。

「聞きたいのはこっちよ。まったく、びっくりしたじゃないの」

その赤い痕が自分の付けたものだと思ったローゼは、ガバツと起き上がった。

「ごめんなさい！」

「謝らないで。貴女は寝ぼけていただけだよ。悪い夢を見ていたのね」

悪い、夢

本当にそうなの？

本当に、それだけ？

「さつき城に連絡しておいたから、多分そろそろ迎えが来るわ。着替えなさい」

寝ぼけ眼^{まなこ}のまま、ネグリジェからルプラに渡されたドレスへと着替えるローゼ。

そのままルプラと朝食をとっていると、ルプラのフォークを持った手が、ぴくりと動いた。

「……来たわね」

首を傾げるローゼに、ルプラは言った。

「天使様のお出ましよ」

その瞬間、近くの窓が勢いよく開いた。

「お迎えにありがとうございました」

何事もなかったかのように、窓を閉めながら言うヴァイス。

「なんで窓から!?!」

そんなローゼをよそに、白の天使に恭しくひざまずくルプラ。

「ヴァイス様。この時間まで『安全に』ローゼ様をお預かりしておりました」

「聞きましたよ。危ない所を助けてくれたそうですね。感謝します」

「勿体ない御言葉」

完全な上下関係が分かる瞬間でもあった。

「しかしヴァイス様」

さっきヴァイスが出てきた窓を見つめながら、呟くように言うルプラ。

「貴方のような高貴なる天使様が、窓から現れるとは思いませんでした」

ローゼの疑問はちゃんと聞こえていたようだ。

「だって、窓からの方が早くこの部屋に着くでしょう」

真面目な顔で言うヴァイスの言葉を聞いて、ぷつと吹き出すローゼ。

「何がおかしいのですか？ ローゼ様」

「……別に」

思わず下を向くローゼに、一瞬だけ視線を向け、表情を緩ませるルプラ。

「なら良いのですが……急いでいるので、もう連れて行きますね。行きましょう、ローゼ様」

そのままローゼを抱き上げるヴァイス。

「ルプラさん。貴女は引き続き取締と警備を頼みます」

ルプラが無言で頷くのを確認すると、ヴァイスはローゼを抱えたまま勝手に開いた窓から飛び降りた。

「……………」

開いたままの窓を、しばらくぼつと見つめるルプラ。

「まったく、困った天使様だわ」

涼しい風の吹き込む窓を閉めると、何事も無かったかのように自分の仕事 資料の束を片付ける作業に取り掛かり始めた。警備役の仕事は、現場仕事以外にもあるのだ。

「あの子……」

可憐で美しい、薔薇の花がとてもよく似合う少女。

しかしその裏に隠された、黒く濃く刻まれた悲しみ、苦しみ。

「悲劇の少女」

一人呟くルプラ。というより、勝手に口から漏れた言葉だと言っべきか。

「私が守ってあげなければ」

絶えず動いていた、資料の上の万年筆を持つ手を止めるルプラ。そのまま目をつぶる。意識を集中させる。

何か辛いことや、困ったことがあったら、私の所に来なさい。天使様に言えば、連れてきてくれるでしょう

「えっ……？」

白い翼をはためかせるヴァイスに抱き抱えられたローゼは、戸惑

いの声を発する。

今、確かにルプラの声が……

「どうかいたしました？」

飛んでいる時のヴァイスとは、あまり言葉を交わすことはない。

「ううん。何でもないわ」

きつとルプラよ。私を心配してくれていたのね。

不思議な国で、こんなありえないことにも驚かなくなった。それはこの国に馴染んだのか、それとも……

テレパシー
精神感応。

それがルプラの持つ『能力』だということを、ローゼはもちろん知るはずも無かった。

第一楽章・十、悲劇の少女（後書き）

《ルプラ》

スタイル抜群なキャリアウーマン。国の警備役で、大人の女性。か弱い人を放っておけないタイプ。並外れた戦闘力があり、テレパシーを使うことが出来る。

第一楽章・十一、雨の日の憂鬱

あの日から、全く外に出してもらえなくなったローゼ。ヴァイスに抱かれて帰ってきた後、酷く叱られたのだ。

「暇ね……」

カーテンの隙間から、雨が激しく降っている様子を、ぼうつと見つめるローゼ。

「仕方ないことだね。君が帰って来たと言う噂が国中に広まり、秩序が崩れ始めてしまったからだよ」

聞き慣れた説明口調。

後ろには、たった今帰ってきたであろうブラウが立っていた。しつとりと濡れた薄青のスーツから、ポタポタと雫が垂れている。

「嗚呼、俺としたことが。床を濡らしてしまう」

ブラウは無造作に腕を横に振り、床に水溜まりを作っていた水までも全て、薙ぎ払うように消してしまった。綺麗に乾いた髪が、一瞬揺れる。

「……………」

そのありえないはずの様子を、無表情で見つめるローゼ。といっても水を司る天使だ。これくらいはの能力は普通といっても良いだろう。

「この世界で起こることは、どれも不思議なことばかりだ。ローゼは、何が起こっても対して驚かなくなっていた。

そう、少しずつ、この世界に順応している

「暇でしょう。よかつたら今日は俺が相手をしてあげるよ」

ローゼを真つすぐに見据えながら、歩いてくるブラウ。

「仕事は？」

六色の天使も王子も、その秩序の乱れのせいかわからないが、最近ずっと仕事で忙しい。

気を使って会ってくれたりもするが、それでも少しばかり言葉を交わすだけ。城の使用人も忙しいらしく、ローゼはいつも一人ぼっちだった。

「今日の分の仕事はもう終わったんだ。俺、雨の日は結構強くてね」
にっこりと微笑むブラウからは、微かに血の香りがした気がした。

「……ふーん」

ブラウが一步近付く。ローゼも一步後ろに下がる。

「どっしたの？」

鼓動が速くなる。でも違つ。これは惑わされてるだけ。分かつてるのに。

ブラウが一步近付く。

「ねえ」

ローゼも一步下がる。

「なに？」

ブラウがまた一步近付く。

鼓動が速くなる。ローゼは、震える足でもう一步下がる。苦しい。

「これもっ……力の源の為なんですよ……」

一步踏み出そうとしたブラウの足が、止まった。そのまま手を顎にあてる。

「……なるほど。それは王子に聞いたんだね」

「……」

ブラウはまたローゼに向かって歩を進めた。

「王子を信じるんだね」

どん！

後ろの壁に背がぶつかる。逃げられない。

「君がそう思うのは構わないけれど……一つ、違うことがある」

「何っ……っ？」

「俺は、本気で君を愛しているということだよ」

そして、抱きしめられた

「好きだ。愛している。だから俺のことを信じて欲しい」

「そんな……そんな簡単に信じられないわ」

ローゼは静かに言う。誰も信じられない。どうせ自分は一人ぼっち。

「でも」

ブラウの指がローゼの首筋をなぞり、そのまま下へと降りた。

「『ココ』は正直だよ」

びくん。と体が反応する。

ブラウが触れているのは、ちょうど心臓のところ。

「それは」

「君のその鼓動の速さは、偽物だと言いたいのかい？」

「それはあなたのせいでしょ！」

「俺は今、何もしていないよ？」

「……………」

耳元で聞こえる、低い笑い声。

歪んでる

もう惑わされない

惑わされたく、ない

「……………私は、あなたのことを好きじゃない」

「別にいいよ」

抱きしめる力が、少し強くなった気がした。

「本音を言えば、もう少し騙されていてほしかったところなんだけ
ん」

ぼそりつつぶやきながら、ソツと腕が外される。

「え？」

「なんでもないよ。今日は普通に話そうか」

何事も無かったかのようにソファーに座るブラウ。

「隣にどござん」

ローゼは、その言葉を見向きもせず向かいのソファに座った……。

「そういえば……」

ブラウの持ってきたロイヤルミルクティーを一口啜る。甘い香りが心地好い。

「なに？」

「天使達の仕事ってどんなことするの？」

ブラウが持っていたカップを机に置く。カタン、という音が、妙に大きく部屋に響いた。

「聞きたいのかい？」

「うん。だって気になる。凄く忙しそうだし」

「そう……」

ブラウはしばらく、雨の音が絶えず叩きつけられている窓を見つめていた。言おうか迷っているようだ。

「じゃあ、どうしようか」

ブラウはおもむろに立ち上がると、ローゼの隣に座った。思わず立ち上がるローゼ。

「まだ好きになってくれないんだね。悲しいな」

ブラウは少し眉を顰^{ひそ}めると、ローゼの腕を掴んで無理矢理座らせた。

こういう時、女の力は男にかなわない。そのまま強引にソファに座らされるローゼ。

「交換条件だよ」

「交換条件？」

「君が少しの間だけ、俺に気を許してくれるのなら、俺は君の質問に答える。どう？」

「……っどござしてそうなるの？」

「俺がそうしたいからだよ」

「意地悪ね」

「君が好きだから。それに」

怖いんだ

「……え？」

ぼそりと呟いたブラウの言葉、いつもと違って弱々しい。

ブラウはそつと眼鏡を外した。

「その話をして、君に嫌われるのが怖い」

レンズ越しでない、深い青の瞳に見つめられる。

「さあ、答えて」

「……………」

どうして迷っているのだろう。彼が見ているのは自分ではなく、自分から得られる力なのかもしれないのに。

高鳴る鼓動は、未だに治まることはない。

「……………分かったわ」

知りたかった

そこまでして隠す

彼らの『仕事』を

「……………」

ブラウは、再び眼鏡をかけた。

「意外とすんなりと受け入れてくれたね。やっぱり俺のことが」

「早く教えて」

知りたい

知りたい

焦る気持ち

全ては単なる好奇心だということ

彼女は知らない

「じゃあまず俺から……」

優しく抱きしめられても、その冷たい手で頭を撫でられても、心の葛藤は止まらない。

これは私じゃない

私じゃない私、それは……

「んっ……」

変な考えに気をとられていたローゼは、ブラウの次の行動を避けることが出来なかった。

ブラウの冷たい唇が、考える力を失わせる。

「やめっ……」

そのまま視界が反転する。視界いっぱい広がるのは、ブラウの冷たい微笑み。背中にはベッドの柔らかい感触。

「君が冷たいと、俺も悲しくなるよ」

「そんなんっ……うっ」

「いい加減俺を好きになってくれ。でないと俺はおかしくなってしまう」

「いやっ……」

暴れる手を強引に捕まれ、身動き出来なくさせられる。

「やめ……て……」

ローゼの声は恐怖に掠れ、窓に叩き付けられる激しい雨の音に掻き消された。

バン！

「ローゼを傷付けけないのは鉄則だったはずだ。天使風情が」

てんしふうせい

乱暴にドアが開き、顔を出したのはモーント。

「王子……か」

ブラウはすぐにローゼを離すと、乱れた服装を整える。

「勝手に人の部屋に入って来るなんて、王子はいつから礼儀知らずになったんだい？」

「うるさい。消すぞ」

「ルールを破って、俺を消してどうなる？」

「……だからお前は嫌いなんだ」

モーントはため息をつくと、ローゼを抱き上げて起こす。

「ルールって？」

「君には関係ないことだ」

モーントがそう言うと、ブラウが口を開く。

「それに、俺はローゼを傷付けるような事をしていない。交換条件だったからね。ルールにも、交換条件にはお互い忠実に従うべきだとあったはずだ。そうだろう？ 王子様」

「……チッ」

舌打ちするモーントにも構わず、ブラウは続ける。

「俺の条件は終わった。あとは、彼女の願いを聞き入れなくてはいけないんだ。王子、あなたはまだ仕事が残っているのでは？」

「……これ以上ローゼに危害を加えたら、本当に消すからな」

たとえルール違反でも、と付け加えるモート。

「かしこまりました」

丁寧にお辞儀をするブラウ。「危害を加えるつもりは無かったんだけどな」と小声で付け加えて。

「ローゼも、また何かされそうになったら僕を呼びなさい」

「……うん」

命令口調と鋭い眼光で見つめられ、ローゼはただ頷くしかなかった。

「じゃあ……話そうか」

ここはティールーム。どうやらブラウは、この部屋がお気に入りらしい。

「本当はこんな話したら君に嫌われそうで嫌なんだけどね」

「心配しなくても、私は最初からあなたのこと好きじゃないわ」

「そんな……酷いな。天使の心は傷付きやすいんだよ」

「そんなの知らないわ。早く教えてよ」

ブラウはしばらくローゼを見つめてから、ため息と共に言った。

「分かったよ」

「ローゼ様、コンフィテューレはいかが？」

「ありがとうございます」

チューリップから受け取ったコンフィテューレを口に運ぶローゼ。

「単刀直入に言うね。俺達の仕事は、ローゼを狙う奴らを『排除』することなんだ」

「……っ、ゲホッ」

「大丈夫ですか？ ローゼ様、お水です」

マーガレットから貰った水を飲み、ほっと息をつくローゼ。

「『排除』って……」

「……だから言いたくなかったんだよ」

ブラウは続ける。

「ローゼが知る必要は無いんだ。君は『安全』なこの城で、君の音楽を奏でてくれていればいい。それだけで良かった」

それでも最後まで、聞きたいかい？

ブラウの問いに、ローゼは少し黙る。ブラウの口調は、ただいたずらに教えないのではなく、本気でローゼを心配しているようであった。

「…………でも」

《知らなくちゃイケナイ…………デシヨ？》

「え!？」

急に心に響いてきた、聞き慣れた『声』。ブラウはちょうどその声が聞こえたかのように、興味深そうにローゼの胸元を見た。

「存在は知ってたけど、『声』を聞いたのは初めてだな。シュテルン」

《黙ってアナタの言葉を聞イテルのは結構辛くてネ》

「え？ 待って!！」

「この宝石…………喋るの？」

「意思のある石だよ。石だって、時々話したくはなるでしょう?」

ややこしいことを言っただけでつこりと微笑むブラウ。

「じゃあ、今まで聞こえていた声も……」

《全部ワタシ。驚イタ？》

呼吸をするように光るシュテルンは、少し輝きを増した気がした。

《それよりブラウ。早く教えてあげなサイヨ。この世界の『約束』。排除』の意味》

「はあ……まさか君にそそのかされるとは思わなかったよ。ローゼ、本当に良いのかい？」

ブラウがローゼを見る。それから逃げるように目を背けると、ローゼは頷いた。

「私に関係してるんだもの。聞かなくちゃ」

《純粹だネ。ダカラ操作しやすかったんだ。アナタは》

「じゃあ詳しく話すよ」

ブラウは、シュテルンの言葉は気にするなというように右手をひらひらと振ると、話し始めた。

「『排除』とはその言葉の通り、ローゼを狙う存在を『消す』ことなんだ」

「『消す』って……」

「君がここで生きてこそ、この世界が成り立つ。だがそれを知らない愚民共がこの国には沢山いる」

困ったように眉毛を寄せるブラウ。首を傾けると同時に、前髪もさらりと揺れてブラウの顔を隠した。

「そんな奴らはこの世界には必要ない。奴らがこの世界に一人も居なくなることを、王子も望んでいるんだ」

「でも……私がローゼだって知ってる人は少ないんじゃない？」

「それは君が経験したことから分かるでしょう」

「あつ……」

ついこの間の恐ろしい出来事を思い出すローゼ。『あの男』は何故自分のことを知っていたのだろう。

「ごくごく稀に、君をローゼだと感じることが出来る動物トクがいる。君を狙う組織は、大体そういう能力を持っている人を中心に構成されていることが多い」

「能力……」

「この世界の動物は、よく特殊な能力を持って生まれることがある

んだ。アーツルトは良い例だよ？」

「……なるほどね」

アーツルトは、一瞬で怪我を治すことが出来る。それは、彼の特殊な『能力』から成り立つこと。

「役立つ能力を持った動物は、それに合った『役割』に就くことが出来る。『仕立屋』なんかも、特殊能力とは言わないかもしれないけど、生まれた瞬間に授かった服を作ることが出来るという才能で、その『役割』に就けた、ということ」

ゆっくりとローゼを指差すブラウ。

「ちなみに君も、生まれた時からローゼという『役割』が決まっていた」

「え……？」

ズキッ

急激な頭の痛みに、顔をしかめるローゼ。

「おっと。話し過ぎたね」

ローゼの頭に手を伸ばすブラウ。そのまま触れたか触れていないか分からない加減で、ローゼの頭を撫でるように手を動かした。

《マツタク。最初は素直に落ち着いてくれてイタのにネ》

「あんなに有能だったシユテルンの力も、弱くなったものだね」
皮肉っぽく言うブラウ。

《違うワ。カノジョの記憶がイウコトを聞かないダケ》

「同じことだ」

ブラウが手を引っ込めると、苦しんでいたはずのローゼが、ケロツとした表情で辺りを見回した。

「私は……一体……」

「それで、俺の話は以上だけど、他に聞きたいことはある？」

「話？ えーっと……」

またブラウから目を逸らすと、楽しそうにひそひそ話をする花達に目を向けるローゼ。

「消すってことは……」

「ストレートに言えば、『殺す』ってことだね」

「殺っ……」

急にこめかみを押さえ、椅子から崩れ落ちるように床に座り込むローゼ。

あなたが

殺したのよ

わたくしの

大切な人を

「違うのよ……私はっ」

「ローゼ……」

「来ないで！」

驚いて近づくとブラウスを、両手を前に出して拒否するローゼ。

「来ないで！ 近づかないで！」

「困ったな……」

《ココまで来ると、ワタシもオテアゲかな……？》

ローゼの頬が、とめどなく溢れる涙で濡れる。

「仕方ないね ヴァッサ 水！」

どこからともなく現れた水が、ローゼを包み込んだ。

《キョコウシュダんってやつ?》

「強行手段、ね」

ぐったりとしたローゼを抱き上げるブラウ。

「このまま……その綺麗な姿のまま、俺の傍で永遠に眠り続けていてくれたらいいのに」

静かな寝息をたてているローゼを愛しそうに見つめるブラウ。

《ブツソウな話はやめテヨ?》

「冗談だよ」

《ジョウダんを言ってる顔には見えないワ》

「まさか……」

ティールームを出て、ローゼの部屋に向かうブラウ。

「俺はただ、『純粹に』ローゼを愛しているだけ」

それだけだよ

俯いたブラウの表情は分からない。

《ジュンスイ……ね》

「あぁ
」

悲劇の少女の、頬を涙でいっぱい濡らした寝顔は

とても安らかで

とても美しかった。

第一楽章・十二、全ては貴女の為

突き刺さるような、冷たい、冷たい声。それに相応しい冷めた視線は、感情も何も無く、ただ目の前の標的ターゲットを見つめるだけ。

それは、彼らのもう一つの顔

「お、お前は……」

「まだ生きていたんですか。邪魔です。早く消えて下さい」

「そんなつもりは無いんだ！ ローゼに……ローゼに一目でも会わせてくれればっ……」

「ローゼ様を呼び捨てするような愚民に、彼女に会う権利などありません」

「なんだと!」

「消えて下さい」

感情の無い済んだテノールボイスが、辺りに響き渡った。

「つつ、ウワアアア!!!」

カシヤン

「あっ」

ローゼの手からマグカップが滑り落ち、床に落ちて割れる。

『もう。仕方ないわね』

黒猫のメーアが、落ちたマグカップを見て言った。あの後ブラウに何をされたのか分からないが、ローゼのもとに戻ってきたメーアは二本足で歩けるようになり、彼女をローゼと呼ぶようになっていた。

『考えごとばかりしているから』

「だって……。ああ、どうしよう。後でメイドさんに謝らないと。はあ……。中身全部飲んだ後でよかった」

『拾わない方がいいんじゃない？』

メーアの言葉を無視して、マグカップの残骸を拾うローゼ。

「痛っ……………」

『ほら、言わんこつちやない』

指から流れ出る赤い血を見る。頭がズキッと痛んだ。

「行かなきゃ……」

何度その言葉を呟き、ため息をついたことであろう。

「私が居なくなった世界は、どうなっているのかしら」

またため息をつく。

「ずっとここにいるわけにはいかないのよ。ね、メーア」

『あなたがそう思うのならそうなんじゃない？』

適当なことを言ってコロンと寝転ぶメーア。

《驚イタ。アナタはココの住人じゃない動物とも話セルんだ》

相変わらず胸で輝いているシュテルンが、急に呟いた。

「うん……あつー！」

『どうした？』

「前にブラウが、『役割』を持つ人は『能力』を持つって言ったから……」

《動物と話せるコトが、アナタの『役割』に就く為に必要な『能力』なのかって言いタイの？》

頷くローゼ。

《まあ、アナタの役割の条件が、そんな大したことナイ条件ダケだとは思わないケド。それに、天使達も普通にソノ猫と話しているトコロを見たデシヨウ》

「そう……ね」

ローゼはメーアを撫でる。

「なんでだろう。前はこんなこと考えると苦しくなったのに」

《ワタシがアナタの記憶を制御してるカラね》

シュテルンが、存在をアピールするように、強めに光を放つ。

《結局、アナタはワタシなしでは生きてイケナイのよ。コノ世界でも、アナタの世界でも。この記憶がアル限り。それが『ローゼ』》

「じゃあ尚更もとの世界に戻りたいわ。戻って確かめないと。私の記憶を。このままじゃ、前に進めない」

血の固まり始めた小さな傷口を見つめるローゼ。

《ムリよ。この旋律の城にいる限り、ね》

「なんで?」

メーアが寝息をたて始めた。わずかに上下する背を愛しげに撫でるローゼ。

《ソレは教えられない》

「どっして?」

《アナタは勘違いしてるわネ。ワタシはこの城に仕える石。アナタの味方ではナイ》

「……………何よ、それ」

《ワタシの仕事は、アナタの心が暴走しないように制御スルコト》

そんないつも滑らかに聞こえないシュテルンの声は、明らかに少し曇っていた。

「そんな……………あ!」

ローゼは急に思い出したかのように立ち上がる。

『うるさいな。どっした』

「ごめんねメーア。起こしちゃって」

《ソंनाに慌ててドウシタの?》

シュテルンの言葉など聞こえていないかのよつに、部屋着からエプロンドレスに着替え始めるローゼ。

「行かなくちゃ……………」

何か辛いことや、困ったことがあったら、私の所に来なさい。天使様に言えば、連れてきてくれるでしょう

乱暴にドアを開け、廊下を走るローゼ。

誰でもいいわ。天使はいないの？

いつの間にか裏の玄関までたどり着いていた。

「はぁ……誰か……」

そんな言葉が聞こえたかのように、重そうな裏玄関の扉が開いた。

「ヴァイス……ス？」

そこには、白い羽とスーツを

真っ赤に染めたヴァイスがいた。

「ヴァイス、なの？ ……なん、で？」

震える声で尋ねるローゼ。上手く声になっているかも分からない。鉄の焼けるような嫌な臭いが鼻をつく。

「ねえ……」

「ローゼ様」

ローゼがいることを予想していなかったのだろう。ヴァイスは一瞬驚いた表情をした後、そっとローゼに近付いた。

「どうして？　なんで？」

「全ては、ローゼ様の為なのですよ」

血まみれの姿のまま、ローゼを抱きしめるヴァイス。まるで、ローゼに自分の姿を見せないように。

「その血は……ヴァイスの？」

「いいえ。ただの返り血です」

「『排除』した人の？」

「そうです」

抱きしめられている状態で話されて、耳元に熱い息がかかる。

何もかもが熱い。腕も、胸もヴァイスの全てを熱く感じる。

「なんで……？」

「さっきも言ったでしょう。全ては貴女の為なのです」

「私なんかの為に、あなたはそんなに汚れているの？　あなたは、天使なんでしょう？」

「僕は『天使』という役割についているだけです。貴女の知っている天使の意味と、この世界での天使の意味はおそらく違うのでしよう。この世界の天使は『音の国ムズイクを守る者』。貴女はこの世界に必要な存在なのです。だから、貴女を傷付けようとするものには、消えてもらわなければなりません」

「でも……んんっ……」

ヴァイスの柔らかな唇がローゼが話すのを拒んだ。

「……ヴァイス!？」

いきなりのことに目を見開くローゼ。

「貴女が心配する必要はありません。もう少しで『仕事』も終わります」

宥めるようなヴァイスの声。

「だからって、そんな、酷い……」

それ以上話させないというように、再びローゼに口づけするヴァイス。それは押し付けるような、彼らしくない荒々しいものであった。息が苦しくなって緩んだ唇の間を割って、ローゼの中に自分の舌を滑りこませる。

逃げようにも、頭と腰をしっかりと固定されてしまって動けない。さっきとは違い、動きが優しくなる。唇を甘噛みされ、焦らすように唇を舐められる。

「んっ……ふ……」

ねっとりど、ゆっくりど、まるでローゼの心配を吸い取るかのようになんて深くなっていく口づけ。優しく、優しく、ローゼの理性を奪ってゆく。

静かな廊下に響く、妖しげな水音。それがさらにローゼを追い込める。

「あ……」

今自分がどんな状態にあるかなんて、ローゼには分からない。上り詰める感情と、上手く入らない腕の力。頭が真っ白になり、感じるのは相手の胸の温もりと、痺れるような快樂だけだった。

「忘れて貰えましたか？」

焦点の合わない虚ろな瞳のローゼを、愛しげに見つめるヴァイス。

「……だから、貴女に会わないように努力していたんです。まさか貴女から会いに来て頂けるなんて思ってもなかったですから」

血の付いた手袋を取り、さらっとローゼの髪に指を通すヴァイス。

「申し訳ございません。服を汚してしまっただようですね。部屋に戻りましょう。話はそれからということまで」

何か話したげのローゼを見透かしたように、ヴァイスはローゼの

肩を持って押した。

「ヴァイス……」

「何ですか？」

「……なんでもないわ。行きましょう」

「そうですね」

ヴァイスが腰に片腕を回すと、ローゼは少し俯うつむく。そんなローゼを誘導するように、ヴァイスは歩き始めた。

「……夢を見るの」

「楽しい夢……ではなさそうですね」

新しい服に着替えたヴァイスとローゼは、バルコニーにある小さな丸テーブルに向かい合って座る。

「多分過去の記憶……だと思う」

「記憶……ですか」

シュテルンを見つめるヴァイス。

「そういえば、指、怪我してましたね」

急に話を逸らされる。

「あ、そういえばマグカップを落として……」

たった今気付いたように指先を見つめるローゼ。

「見せて下さい」

ローゼが手を出すと、ヴァイスはそれを両手で包み込んだ。

「ヒカリ光」

小さな声で呟くと、両手の中が一瞬光った。

「あ………治ってる」

「治し屋程の力はありませんが、こんな使い方もあるんですよ」

にっこりと微笑むヴァイス。

《話を逸らそうとするナンテ、脳がナイね。ヴァイス》

カチン。と音がしそうなくらいに笑顔が固まるヴァイス。

「あなたはいつから普通に言葉を発するようになったんですか？」

《最近集まるチカラが多クテね》

「力？」

首を傾げるローゼ。

「貴女は知らなくても」

《もうそんなコトは言ってられなくなってきたのヨ。もうアンタの思い通りに事は進まない。ローゼ、集まるチカラっていうのはね、天使達が『排除』した人達の魂ヨ。行き場を失ツタ魂達は、ワタシのチカラとなる》

ヴァイスの言葉を遮って言うシュテルン。

「シュテルン！」

「そ、んな……」

衝撃を受けるローゼ。この国はやっぱりおかしい。自分の為に、沢山の人が殺されて、そう、全ては自分の為だとヴァイスは言った。

自分さえ居なければ……

いつの日かよく、曇り空を見て思ったこと。

私さえ居なければ良かったのに

「……そう、ですか」

静かに言うと、ヴァイスは立ち上がってローゼに近付く。

「だったら僕が忘れさせてあげます。貴女がそんなこと考えられなくなるぐらいに、僕が」

「止めて!..!」

ヴァイスの伸ばした手が、空^{くう}を切る。

「止め、て……」

とっさに逃げたローゼ。ヴァイスは、空を切った手を見つめる。

「何故です? 何故知ろうとするのですか? 貴女を悲しませるだけの、過去を」

「だって……」

何故?

何故知らなくてはいけない?

「分からない。でも……」

「記憶に穴があいてしまったのが嫌でしたら、僕が埋めてあげます。僕しか考えられない程に、他に何も興味を示さなくなるぐらいに!」

違う。

違うんだ。

「そんなの、ヴァイスじゃない」

バルコニーの手摺りまで追い詰められたローゼ。ヴァイスの歩みが、止まる。

「僕じゃない……ですか？」

「ちょっと天然で、でも優しく、最初この国に来て戸惑っていた私の傍にずっといてくれたのがヴァイス」

ヴァイスは黙ってローゼを見ている。

「でも違った。最初あなたに……キス、された時、私は何も考えなくなつた。何故この国に来たのかとか。さつきもそう。あなたが私に近付くのは、力の源の為だけじゃない。そうでしょ？」

「……全ては、ローゼ様の為です」

「私の……為？」

ヴァイスは、暗い曇り空に目を向けた。

「貴女は、何も考えなくて良いんです。何も知らなくて良いんです。僕達『天使』が貴女から力の源を頂く代わりに与える、快樂、享樂。僕はそれによつて、貴女から記憶が消えていくことを望んでいました。シュテルンも使つたのに」

《役立たずで悪かったわネ》

場に似つかわしくないふて腐れた言葉を挟むシュテルン。

「どうして？ どうしてそんなにあっ」

「ローゼ様!!」

元々そこまで高くなかったバルコニーの手摺り。かなりの高さに位置するバルコニーから、後ろを見ていなかったローゼは転落した。

「ローゼ様……」

あと少し、手を伸ばしさえすれば

今からでも彼女を追えば、確実に助けられることが出来る

なのに……

「ローゼ、様……」

段々と小さくなっていく愛しい人の影。

彼女の名前を呟くヴァイスは、呆然とその様子を見つめる以外、何も出来なかった。

第一楽章・十三、行くべき場所

心臓が浮く感覚

耳元ではひゆるひゆると風の音がして、バルコニーは遙か遠くに見える

こんな状況で、ローゼは何故かひどく落ち着いていた。

私は、落ちている。

堕ちている？

私は、死ぬの？

そして……

前にもこんなことがあった気がする

そんな思いを巡らせていると、ふと目の前に懐かしい顔が浮かんだ。

この人、知ってる。

この人は……

「お父様？」

ぼすん！

急に温かいものに包まれた。

「ギリギリセーフ。びっくりさせんなよ。久しぶりだっていうのに」
目の前に赤い瞳が見えた。

「……ロート？」

「意識あるみたいだな。大丈夫か？」

ローゼはロートに抱きしめられるようにして、落下を免れていた。

「ロート、私、行かなくちゃいけない所があるの」

空中に浮いたまま、ロートは首を傾げる。

「なんだいきなり。城しろから出たってことか？」

ローゼが頷くと同時に、数十メートル下の所から、声がした。

「おい。そこにいんのはロートかあ？」

「やば……ゲルプだ。ローゼの願いなら聞き捨てならないな。俺、
逃避行は結構好きだし」

実際何度かしたことあるし。と小声で呟くロート。

「とりあえず、ここを出るか」

ローゼが頷くのを確認すると、ロートは高く飛び上がった。

「おい！ どこ行くんだ！」

「どっかぁー」

適当に叫ぶと、城を出て森の上を飛んでいくロート。

「おい。どういう意味だったのー」

そんなゲルプの叫び声は、すぐに聞こえなくなった。

「とりあえず脱出は成功だな」

ワクワクした声のロート。まるで新しい玩具おもちゃを買ってもらえた子供
のようだ。

「あの、ありがとう」

「別にいいよ。俺も最近堅苦しい仕事に飽き飽きしてたし」

「仕事……あなたみたいなお子供も？」

「酷いなあ。俺も立派な天使だぜ」

拗ねたように言うロートを見て、クスクスと笑うローゼ。

「そう……ごめんなさいね」

「っ……それで、どこに行きたいんだ？」

顔から耳までも赤く染めてしまったロートが問う。

「あのね……私、ルプラの所に行きたいの」

「あの女の所にか!？」

「うっ……声が大きいって」

耳元で大声を出され、少々表情を歪ませるローゼ。

「ごめんごめん。分かったよ。俺あいつ苦手なんだけど……しょうがないな。ローゼの願いだし」

「ありがとう」

「いいよ。ローゼの願いなら何でも叶えてあげる」

感謝の言葉に気を良くしたロートは、一層高く飛び上がると、ルプラの家を目指した。

ジリリリリ……

ベルを鳴らすと、すぐにドアが開いた。

「ローゼ！ 久しぶり。来てくれたのね。あと……ぼっやー！」

最大限に顔を引き寄せたロートに抱き着くルプラ。

「あなたも久しぶりねー！ 相変わらず可愛いくて！」

「ぼ、ぼっやはやめろ！ 俺は一応上司だぞっ！」

「あなたが上司でも見た目は私の方が年上よ！」

「ああもう……」

ローゼは、何となくロートがルプラを苦手とする理由が分かった気がした。

「ローゼ、そろそろ来ると思っていたわ。じゃあロート、名残惜しいけどここでさよならね」

「え？ なんで？ 俺は中に入れてくれないのか？」

「女の子の会話に男の子が邪魔する権利はないの」

人差し指を口元に当ててウインクするルプラ。

「それに、あなたはまだ仕事が残っていたはずよ？」

「それは……」

「ガイゲ町の路地番号八六六三に怪しい集団あり。調査済み、ローゼ関係率九十七パーセント……はあなたの区域テリトリーだったはずだけど？」

「……仕事魔め」

「何か言った？」

シユンとしたロートは、まるでへビに睨まれたカエルだ。

「……いえ」

「じゃあねっ！」

バタン！

激しい音をたててドアが閉められた。

「……………」

閉めたとたん、ドアを背に真面目な顔になるルプラ。

「ローゼ、よく城を出ることが出来たわね。まあ、あのぼつやなら連れてきてくれると思ったけど」

何か言おうとするローゼを、人差し指で制すルプラ。

「分かってる。何も言わなくていいわ。貴女がここに来た理由、私にはちゃんと分かってるから」

今お茶を淹れるからね。と言われ、勧められたソファーに座るローゼ。

「それにしても、あの時はびっくりしたでしょ」

「あの時……?」

「私ね、テレパシーが使えるんだ」

レモンティーをローゼの前に置くと、唐突に話し出すルプラ。

「貴女の脳に響いた声は、私の『能力』によるもの」

あまり使い道はないんだけどね。と苦笑混じりに言うルプラ。

「そうだったんだ……」

「貴女は、知りたいんでしょう?」

「……分かるの?」

「分かりやすく、顔に書いてあるわよ。それに……」

ローゼの胸元を少し覗むルプラ。

「私は石と違って、貴女の味方だから」

ハツとしたようにローゼは胸元のシユテルンを見る。

《黙って聞いてレバ、酷いコト言うわね。アンタ》

「悪かったわね。私はあなたがあまり好きじゃないのよ」

視線……はないが、シユテルンとルプラの間に小さく火花が散った気がした。

「私は貴女の味方よ」

「うん……」

ルプラは自分を助けてくれた存在。ローゼは肯定を表すようににっこりと笑顔を作った。ルプラもつられて笑顔になる。そして、そっとローゼの耳に囁いた。

「私は、一つだけ貴女の願いを叶えられる方法を知っている」

「え？」

驚いてルプラを見るローゼ。ルプラは少し得意そうに言う。

「私の力は、普段はあまり使い道ないけど……応用した使い方があるのよ」

「応用？」

「うん。ただ事実を知るのには、相当の覚悟が必要よ」

貴女の場合ね。と付け足すルプラ。

「貴女が本当に知りたいのなら、貴女のもといた世界に連れて行ってあげることが出来るわ。どうする？」

後は自分次第だということらしい。黙ってローゼの答えを待つルプラ。

「私は……」

何故、知りたいの？

何故知りたがるの？

何故？ 何故？

何故、迷うの？

《ダメよ》

静かなシュテルンの声が部屋に響いた。

《ダメ。絶対ダメ。そしたら私のいる意味がない》

きつぱりとしたシュテルンの声。

《ワタシはヴァイスに頼まれたの。アナタの記憶を呼び起こさないヨウニ。今更アナタが知って得するヨウナもとの世界はモウないのよ。ダカラ止めよう？ モウいいじゃない。アナタはコノ世界では十分に愛されてる》

それでいいじゃない。

シュテルンの言葉がローゼの胸を貫く。ルプラはまだ黙っている。

「私、は……………」

時々見る『夢』が、ただの悪夢ならそれで済む。だけど違う。

「逃げたくないの……………事実から」

だから……………

ズキン！

《ダメよ……………絶対にダメ……………なんダカラ……………》

不意に激しい頭痛がした。

「っ」

「ローゼ！」

駆け寄ったルプラは、すぐにローゼの首からシュテルンの鎖を取

った。

「貴女の決心が固いのなら、それを壊しなさい！」

焦った声のルプラ。

「壊……せばいい……の？」

「そう！ 壊せるのは貴女だけよ！」

《ダメ……ダメ……！》

頭が割れるような衝撃。震える手でシュテルンを掴むと、ローゼは力を込めて、それを床に叩き付けた。

ガチャン！

ガラスの割れるような音と、ローゼが床に倒れ込んだのは、ほぼ同時だった。

「……………」

「ローゼ。よくやったわね」

「……………ルプラ？」

気が付いたら、柔らかなベッドの上にあった。心配そうにローゼを覗き込むルプラ。

「あの石……シュテルンは、かなり危険な石なの。命令には忠実だけど、加減が効かなくなったら何をするか分からない」

「私……壊しちゃったの？」

「今は一時的に力が消えたけど、多分すぐに再生すると思うわ。それに今の貴女の心は、不安定になっている。少しでも過去を思い出せば、混乱してしまうの」

ルプラは一呼吸おいて言った。

「もとの世界に戻るのには、今しか無いわ。貴女の覚悟は決まってるみたいだし。まだ少し辛いかも知れないけれど、立てる？」

「うん……」

上半身を起こしたローゼに水の入ったコップを渡し、飲んだのを確認すると、そっとローゼを立たせるルプラ。

「行きましょう。隣の部屋よ」

「うわぁ……」

隣の部屋のドアを開けると、そこには円形の紋様が、部屋いっばいに描かれていた。

「まあ、驚くのも無理ないでしょうね」

ルプラに導かれ、紋様の中心へと進む二人。

「大丈夫。私がついているから」

ローゼを後ろから抱き寄せるように腕を回すと、ルプラはそっと目を閉じた。

「っ」

いつか見たことのあるような紫と黒の混ざったような渦が、二人を包んだ。

「クスクス。久しぶりだね、ルプラ」

「相変わらず元気そうね。あんたは」

無意識に目をつぶっていたローゼは、恐る恐る目を開けた。

そこは、異空間だった。

褪せた色がいくつも交わっていて、天井も床も壁も分からない。そんな空間に立っている。床に立っているのか、浮かんでいるのかも分からない。

「今日はお友達も一緒かい？ あれ？ 君、もしかしてローゼ？」

目の前には、褪せた空間に眩しいピンク色の髪、ローゼの着ているのよりも濃いピンクと黒のパンクで奇抜な格好のひよろりと背の高い男がいた。そして……

猫耳？

かと思つてよく見たら、銀色のキラリとしたものが見えた。どうやら猫耳のカチューシャをつけているらしい。

「そんなに欲しそうな顔してもあげないよ。これは我のマイブームなんだからね」

別に欲しそうな顔をしてもないのに、猫耳カチューシャの男は、カチューシャに手を当てて言う。

ルプラが軽くため息をついたのが分かった。

「それより君、ローゼなんだろう？」

ローゼより少し上に浮かぶ男は、顔を近付けて問う。髪の間から見えた耳には、いくつものきらきらとしたピアスが付けられていた。

「え、ええ……」

「君のことは何でも知ってるよ。我はツァイト。時空間を操る者さ」

ツァイトは、にこりと微笑んだ。

「此処は『時空の狭間』。君は此処を通過してこの世界に来たんだよ」

「時空の狭間……？」

「ツアイトは私の幼なじみなの。『役割』に就く前までは、よく一緒に遊んでいたわ」

ルプラが口を挟む。

「そうそう。一緒にお風呂に入ったりね」

「ッ。それは、小さい時の話でしょ！ この変態！」

「クスクス。変態は酷いね。ねえローゼ」

ツアイトがローゼの頭に手を置いた。

「残念ながら……」

その手からするりと避けるローゼ。

「間違いじゃないと思うわ」

ピンクだらけの格好。そして何より、男のくせに付けている猫耳が、その決定的な理由になっている。

「クスクス。ローゼも酷いね」

少しも酷いと思っていないような言い方。

「……あの、さっきの話からすると、ツアイトも昔はあの世界にいたの？」

「そっだよ」

ふわりと浮かぶツァイトの髪が、風も吹いていないのにほらりと揺れた。

「我は選ばれたんだ」

「誰に？」

「この世界に、だよ。気が付いたら此処にいた。きつともう此処から完全な存在として出ることは出来ないだろうね。ルールを破ることとは出来ない」

淡々と話すツァイト。

「……寂しくないの？」

「もう慣れてしまったよ。完全な姿ではないけど音の国を覗くことは出来るし。ルプラも時々来てくれるし、ね」

「……」

ツァイトに見つめられ、俯くルプラ。

「そ、それはっ……あんたのことだからこんな大事な役割でハマしないか心配だし……」

なんだかんだ言って、ルプラはツァイトのこと好きなのね。

ローゼは直感的にそう思った。

「それで、用はなんだい？ ローゼ。まさか、もとの世界に戻りたいなんて言うんじゃないだろうね」

「その、まさかよ」

ルプラがきつぱりと答えた。

「彼女はきちんと覚悟して来ているわ」

「へえ……。ルプラが手助けするなんて思わなかったよ」

「それは……」

ルプラはしばらく黙ったあと、言った。

「とにかく、私はこのあと仕事でローゼについていられないの。ローゼをあなたに任せたいんだけど、良い？」

「つまり、彼女をもとの世界に連れて行ってあげれば良いんだね」

ルプラは頷き、ローゼの肩を押した。

「ごめんなさいねローゼ。ここから先は彼に任せて。ああ見えて、やることはやってくれるから」

「ルプラ。君に信用されているなんて我は嬉しいよ」

「……じゃあね、ローゼ。ツアイト、頼んだわよ」

「我にお任せを」

ツアイトがそう言って手をひらひらと振ると同時に、ルプラは空間に溶け込むように消えた。

「それで、君はもといた世界に行きたいんだよね」

ルプラのいなくなった空間で、ツアイトに聞かれるローゼ。

「ええ。どうしても……知りたいの」

自分が何をしたのか、どんな状況に置かれていたのか。

知らない、前には進めない。

「そうか。そしたら、一つ約束してくれるかい？」

「約束？」

ローゼを見つめるツアイトの瞳が、スッと細められる。

「『何を見ても全て受け入れる』ってね」

何を見ても

全て

受け入れる

『何』を見ても……

「……分かったわ」

「よし。それじゃあお手をどうぞ。お嬢様」

猫耳男は悲劇の主人公に、にやりと笑って手を差し出した。

第一楽章・十三、行くべき場所（後書き）

《ツアイト》

時空間を操り、道を繋げることが出来る。男だけど派手なピンク好き。猫耳カチューシャがマイブームの、センスがよく分からない人。普段は時空の狭間に住んでいる。

第一楽章・十四、元の世界へ

「……ここは？」

ローゼのツアイトの手を握る力が強くなる。

何もかもが歪んで見える世界。きちんと地に足をついているのかも分からない。そんな中を、二人は歩いている。ツアイトの手を離してしまつたら、その歪みに飲み込まれてしまいそうだ。

「『道』だよ。今は君の世界に向かって歩いているんだ」

そう言つとまた、ツアイトはクスクスと笑つた。

「怖いのかい？」

「怖くは……ないわ。ただ、不思議だなんて」

「そうか。我はもう見慣れてしまったからわからないけど、初めての人はそう思うのかな」

「でも……私、一回ここを通つて来ているはずだわ。だけど、こんな道通つたことない」

ローゼがそう言つと、ツアイトはうーんと唸うなつてから言つた。

「それは君が天使君に飛ばされたからじゃないかな」

「飛ばされた？」

「うん。我が出来るのは、道を繋げることだけ。ある程度の力を持った人ではないと、人を飛ばすことは出来ないんだよ。例えば、ルプラみたいだね」

ローゼは思い出す。ルプラとこの世界に来た時、黒と紫の渦に引き込まれた。

『あの時』も一緒。

自分が初めてこの世界に連れて来られた時も……

「まあ、どこかの天然天使君がうっかり場所を間違えて飛ばしちゃったみたいだけど」

苦笑まじりに言うツァイト。

そう。あの時、恐ろしい雑食犬、『フロント』に襲われかけたっけ。少しずつ、でも確実に、今までの記憶が蘇っていく。

「さあて、そろそろ着くかな」

その瞬間、急に足場が無くなったかのように急降下した。

「え!?! キヤア!」

「ひゃっほーい」

底無しの穴に落ちているような感覚。

「いやー楽しいね」

まだ落ちているというのに近くで聞こえる、呑気なツァイトの声。

「我はこの瞬間が一番好きなんだ」

「ッ」

未だに驚きで声が出ないローゼ。

「楽しいよね、落ちていくのって。でも」

ローゼにぐいっと顔を近付けて、耳に囁くツァイト。

「そろそろ到着だ」

二人は、足元から淡い光に包まれていった。

「ゼ、ローゼ」

「……ふえ？」

「クスクス。やっと目覚めたみたいだね。無事に着いたようだよ」

眩しい。目を擦って何度か瞬きをすると、懐かしい風景が目に入った。

「ここは……」

「君の家の庭だよ。記憶はあるかい」

「見たことがある気が……うっ」

軽く頭痛がした。

「あれ？」

こめかみを押さえるローゼを見て、首を傾げるツアイト。

「もうシュテルンが再生し始めたのかな？ まあいい。我は君の記憶の箱を開く鍵を知っているからね」

「ツアイト……ト……いた……い」

痛みが度を越えてきたのか、^{すが}絶るような声のローゼ。

「はいはい」

ツアイトはにっこりと微笑み、ローゼの頭を軽く撫でた。

「お目覚めなさい。『フリア』」

「……………」

苦しんでいるローゼの動きが、止まった。

「あれ？ 私……………」

「記憶は戻ったかな？ フリア」

「フリア……」

シャボン玉が弾けるように、ローゼの脳内に鮮明な映像が映し出された。

フリアは幸せだった。

優しいお母様と、素敵なお父様。絵に描いたかのように美しく、仲の良い両親。周りから羨まれるような、最高の家族。両親はそれぞれ働いていたけれど、その分家庭は裕福であった。

フリアは幸せだった。

あの日が来るまでは。

幸せな日々というのは脆く、気を抜けばすぐに壊れてしまう。

一音でも欠けたら成り立たない、一つの音楽のように。

「フリア、準備は出来たかい？」

「うん！」

「気をつけて言ってくるのよ」

「「はい!!」」

「まあ、あなたまで子供みたいな返事して」

「ははは。いいじゃないか。せつかくの休みなんだから」

「そうね。楽しんできて下さいな」

「ああ、そうするよ。君も一緒に行けたら良かったんだけどな」

「ごめんなさいね。急に仕事が入ってしまったって」

「仕方ないな。仕事、頑張ってください」

「ええ」

「じゃあフリア、行くぞ」

「はあい」

お父様の久しぶりの休暇。休暇が取れたら、真っ先にピクニックへ出かけようという約束をしていた。

「お母様は一緒に来ないの？」

無邪気に聞くフリアは、六歳になったばかり。

「ああ、お母さんはどうしても行かなければいけない用が出来てしまったんだ」

「またおしごと?」

「……そうだな」

「さみしいね」

「そうだね。でもせっかくお父さんが休みなんだ。二人だけでも楽しもう!」

「うん!」

その日は太陽が眩しく、ピクニックにぴったりの日和だった。

綺麗な芝生の上で二人はサンドイッチを食べ、くたくたになるまで遊んだ。

追いかけてここにボール投げ、バドミントンにブーメラン。まるで、今までこうして遊ぶことの無かった日々を埋め合わせるかのように、二人は楽しい時を過ごしていた。

楽しい時間は、すぐに過ぎ去って行くもの。

「じゃあそろそろ、帰ろうか」

「いやだ!。まだ遊びたい!」

「そうだね。お父さんも帰りたくない。でも、見てごらん。綺麗な

夕日が出ているよ」

「本当だ」

紅い夕日が、二人の頬を赤く染めている。

「夕日が見守ってくれている間に帰らないと、夜になってしまっか
らね」

二人は手を繋いで帰った。

その手を、離さなければ。

「フリーア！」

まだ幸せでいられたのに。

「お父様、お父様！」

目の前には

夕日よりも紅い血しぶきの付いた車と

その近くに横たわる動かない父親

集まる野次馬に

遠くから聞こえてくる救急車のサイレンの音

「違う……違うよっ!」

「こんなの違う!」

「これは夢。悪い夢よ!」

フリーアは両手で耳を塞ぐと、駆け出していた。どこに行くなど考えていない。ただ、この場から少しでも離れたかった。

どのくらい走っていただろう。いつの間にか目の前に、森が広がっていた。

「こんなところに森なんてあったっけ……」

驚くも進む足は止まらない。何かに誘われるように歩いて行くと、急に森が開けた。

「ピアノ……」

日も沈み、真っ暗なはずのそこには、光を放つ白いピアノがあった。

「きれい……」

フリアは白いピアノが好きだった。何の混じりもない、真っ白なピアノが。だからつい最近、父親にも白いピアノを買ってもらった。何かに引っ張られるかのように、フリアはピアノに向かって歩いていた。ピアノもそんなフリアを迎え入れるかのように、暖かな光を放っていた。

トーン

静かな空間に響く、『ド』の音。

フリアは椅子に座ると、ピアノを弾きだした。まるでそれが当然のように、最初から弾くことが決まっていたかのように。

そこにいつからいたのか、一人の男が立っていた。

「ローゼ……様？」

男は小さな声で呟いた。フリアには聞こえないくらい、とても小さな声で。表情はとても驚いたようだった。

フリアが弾いていたのは、『きらきら星』。少し前に初めての発表会で弾いた曲だ。

「お父様……」

誰よりもその発表会を楽しみにし、誰よりも「がんばったね」「っ
て褒めてくれた。それがフリアの『お父様』。

「っ……ひくっ」

弾き終えた後の静けさが、急に怖くなった。

「お父……様……ひくく」

フリアは泣いていた。あまり声をあげずに。その悲しみを噛み締めるように。その時……

「！？」

驚くフリア。彼女の頬を濡らす涙を、生暖かい手がそっと拭ったのだ。

「どうして、泣いておられるのですか？」

後ろから聞こえる、心地好い響きのテノールボイス。

「何か、悲しいことでもあったのですか？」

「ひくっ……お父……様が……いなく……なっちゃ……た……」

「……」

男は、そう言って泣くフリアをしばらく黙って見つめ

「大切な人を、亡くしてしまわれたのですね」

そう呟き、フリアの震える肩をそっと抱きしめた。

「……ひくっ……ひくっ」

男の胸に顔を埋めて泣くフリア。

「そう、ですか……」

男は抱きしめる力を少し強めた。

「そんなもの、消してしまえばいいんです」

「え……？」

急に言われた言葉に、泣くのを止め、男を見るフリア。男の顔は、光が眩しくてよく見えない。

「僕が、消してあげます。何もかも。貴女を悲しませるものを、全て」

全て消してしまえば

貴女は泣かなくてすむでしょう？

「全部消しちゃうの？」

「ええ、貴女が望むのなら」

何もかも全部

消してさしあげましょう

「ローゼー！」

「はっ！」

ツァイトと呼ばれ、ビクツとして我に返るローゼ。

「どうしたのかい？ 随分とぼーっとしていたけれど」

「記憶……」

ローゼは自分の頬に手を当てた。

「昔の記憶……戻ってきた」

「クスツ。それは良かったじゃないか」

ローゼの手を引くと、ふわりと浮かび上がるツァイト。

「じゃあこの庭も、分かるかな？」

「ええ……私の、私の家の庭よね」

「正解。それでは行くつか。覚えているよね？ 何を見ても」

「全て受け入れる。でしょ？」

「そう。覚悟は出来たかな？」

全てを

知る為に

ピアノの音が聞こえる。

この音は、紛れも無くお母様のものだ。

『あの日』から全く聞くことの無かった、美しい旋律……

しばらく歩くと、広い庭に二つの人影が見えた。

「今日はいい天気ね」

「お母さん……ま？」

駆け寄ろうとしたローゼは、急に足を止めた。彼女の目の前にはあの冷淡だった母親と

「そうだな」

にこやかに笑う父親がいた。

「どうしたのかい？」

後ろにいるツァイトが聞く。

「お父様が……いる」

「やっぱり、驚くよねー」

驚きで動けないローゼとは反対に、気楽な声で言うツァイト。

「どうして！？ お父様は……」

お父様は

亡くなったはず

「もう、会えないはずなのに……なんで……」

目の前で楽しそうに会話をしている、ローゼの父親と母親。母親はまだピアノを奏で続けている。その様子を呆然と見つめるローゼ。

「本当のこと、聞きたい？」

ツァイトがローゼの頭をふわっと撫でた。

「本当の……こと？」

「ここに君の『存在』はもう無いんだよ」

「……どういうこと？」

「クスクス。随分と落ち着いているね。驚いただろう？」

「……あなたが言ったじゃない。何を見ても」

「そうだよ。我が言った。でないと、君は何をするか分からないからね。人の心はどこかで制御しない限り、暴走してしまう」

軽く俯いたツアイトの表情は、長い前髪で見えない。

「今だって叫びたいわ。怖い……ねえ、何故お父様が？」

「さつき言っただみたいに、君の存在はもうここには無いのさ。君をムズイクに連れて行くときに、ヴァイスが施したんだ。君という存在を完全に消すという後始末を、ね」

震えるローゼの肩に、未だに表情の見えないツアイトが両手を置く。

「私の住んでいた世界のルールだ。君がいきなり消えたら、行方不明事件になってしまうだろう？ 君のもといいた世界に傷をつけてはいけない決まりだからね」

「私が消えたから……お父様が生き返ったの？」

「少し違うね。君は最初からこの世界にいなかったことになっている。君以外の亡くなるきっかけがなかったから、彼は生きているんだ。つまり、歴史が変わったんだよ」

クスクスと笑うツアイト。

こんな時に……とローゼはツアイトを見る。普通に見ているつもりだったけど、睨むような目になってしまった。

「そんな……んっ！」

急に肩を引かれて、バランスを崩したローゼは前に倒れた。そのまま、ぽすんとツアイトの胸に飛び込んでしまう。

「泣いていいよ。悲しいだろう？ 君の存在はこの世界だとはつきりしないから、誰も君のことは見えない。もつとも、君自体を知らないのだからどうしようもないだろうけど……」

ローゼはしばらく、ツアイトの胸に身を委ねていた。そうしていないと、壊れそうだった。何もかもが音をたてて、崩れていく気がした。

「……泣かないのかい？」

「二人共……幸せそうね」

ローゼはツアイトの胸に顔を埋めたまま、そう呟いた。

「幸せ……ね」

ツアイトはローゼの頭を撫でる。

「その幸せを壊したのは、私」

「……………」

ツアイトは、何も言わなかった。ただ、黙ってローゼの頭を撫でている。

「……………帰るわ」

ローゼは、やんわりとツアイトの胸を押した。

「帰る？ ムズイクへかい？」

「ええ」

未だに楽しげに会話する両親を見つめるローゼ。

「私はここに居てはいけない。だって、私の存在があるのはムズイクの方じゃない」

「そうだね……………君が望むのなら」

帰ろう

君の世界へ

君を、必要としてくれる世界へ

ツァイトはローゼの手を握った。ローゼも強く握りかえし、悲しく笑った。

ピアノの奏でる美しい幸福の調べは、二人が居なくなつたあともずっと、響き渡っていた。

第一楽章・十五、選択肢は一つ

「着いたよ」

見慣れた城の前に降り立つ二人。

「疲れた……」

「そうだね。少し休ませてもらったほうがいい。ちょっとした旅だったからね」

ツアイトがそう言ったのとほぼ同時に、城の門が開いた。

「ローゼ様……」

そこには、ヴァイスが立っていた。

「ローゼ様……ローゼ様ですね！ もう……もう二度と会えないかと思っていました！」

ローゼの手を取り、叫ぶヴァイス。

「ヴァイス……」

「ローゼ様……申し訳ございません」

そう言うと、ヴァイスは左胸に右手を当て、片膝をつき深く頭を

下げた。

「な、なんで謝るの？」

「僕は……あの時一瞬、一瞬だけ、貴女がそのまま落ちて死んでしまってもいいと思ってしまいました」

「……え？」

あの時　つまり、バルコニーから落ちた時を言っているのだ。

「あの時助けようと思えばすぐに、貴女を助けることが出来ました。でも……僕は助けなかった」

ぐつと詰まるヴァイス。

「ずっと後悔していました。真実を知る痛みを感じるくらいなら、死んでもらった方がマシだなんて……貴女に代わりはいないのに」

「ヴァイス……いいのよ」

ローゼはスツと前に出ると、ヴァイスの頭に手を乗せた。

「真実を知ろうとしたのは私だもの。あなたは悪くない。それに……もういいの」

もういいの。

あの世界はもう、私を受け入れてくれはしない。居場所を作ってはくれない。

「ローゼ……様？」

「あれ？　なんでだろう……」

ほろりとこぼれ落ちてきた塩辛い涙。拭っても拭ってもそれは溢れ出てくる。

「ローゼ様」

ヴァイスは立ち上がり咳くと、ローゼをそっと胸に抱き寄せた。

「クスクス。では、我はこの辺で帰るとするかな」

その様子をずっと黙って見ていたツアイトが言う。

「貴方ですか。気配は感じていましたが……今頃姿を現しましたね」

「久しぶりだね。天然天使君」

「……その呼び方はどうかと思いますが」

ヴァイスの声が曇る。ローゼもツアイトの方を見た。

「一つ言っておこう。もう彼女を悲しませてはだめだよ。彼女の記憶は酷すぎた。君は、その為に彼女をこの世界に呼び寄せたのだから？？」

「当たり前のことを言わないでいただきたいですね」

「なら、安心だ」

ツアイトはふわりと浮いた。

「ツアイト……」

ローゼが呟く。

「何だい？」

見えかかったツアイトが首を傾げる。

「ありがとう」

ツアイトは、それに答えるかのようににこりと微笑むと、そのまま空気に溶け込むように消えてしまった。

「行きましょう、ローゼ様。皆が心配しています」

ヴァイスに言われるがまま、ローゼは城に入って行った。

「ローゼ、心配したよ」

城に入って真っ先に現れたのは……

「えーと、誰だっけ？」

「……………」

しばしの沈黙

「……覚えてないの？」

「ごめんなさい、記憶が……」

「ボクは……グリユーンだよ」

「ああ、確かドMの」

「覚えてるのそれだけなの〜!？」

「うん……」

とても正直に答えるローゼ。

「酷いよローゼ……あ、もしかして」

酷いと言いながらにやりと笑うグリユーン。

「『言葉責め』でしょ。やだなあローゼ、帰ってきて早々そんなにボクに気を使わなくてもいいのに」

ぐいっと顔を寄せてくるグリユーン。反射的に後ろに下がるローゼをかばうように、ヴァイスがスツと腕を出した。

「グリユーン、ローゼ様は疲れているのですよ。少しは休ませてあげてもよろしいかと」

「ふんつ。相変わらずだねヴァイスくん」

「ローゼ様の為ですから」

ヴァイスが、わざとらしくにこりと笑った。グリューンは機嫌悪そうに後ろを向く。そして思い切り叫んだ。

「ねえー！ ローゼが帰って来たよー！！」

「グリューン……」

呆れたようにため息をつくヴァイス。しばらくすると、パタパタと走ってくる音が聞こえた。

「ローゼ！ 帰って来てくれると思ってたよ」

そう言って抱き着いてくるロート。

「おい、あんまローゼに近付くな」

ゲルプがロートを剥がす。

「へえ……帰って来たんだ」

その後ろには、右手を顎に当ててローゼを見つめるブラウがいた。

「俺の予想では、城には戻って来ないと思ったんだけどね。ふむ。意外意外」

「……悪い？」

ローゼが聞くと、ブラウは少し微笑んだ。

「いいや。俺も戻って来てくれて嬉しいよ、ローゼ。だけど……」

「ゆっくりと休む時間はなさそうだな」

急にブラウの後ろから現れたシュヴァルツが、視線を後ろに向けた。廊下の奥から、ゆっくりと進む誰かの足音が聞こえる。

「モーント……？」

黙って道を空ける天使達。

「元の世界を見てきたらしいな」

ローゼの前で立ち止まるモーント。ローゼは軽く俯く。彼の威圧で声が出ない。

「話がある。来い。あと……」

モーントは辺りを見回す。

「いつまでぼうつとしているんだ、天使風情が。さっさと散れ」

荒々しく言い放ったモーントに対し、冷静な天使達は黙って一礼すると去って行った。呆然とその様子を見つめるローゼの横を通る時、ヴァイスが彼女の耳に囁く。

「大丈夫です。王子はいつもこうですから慣れていきます。それに…

…

「それに？」

呟くローゼに答えるように。ヴァイスは後ろを向いたまま、軽く手を挙げた。

「もう王子が貴女に危害を加えることはないでしょう」

「どづいつこと……？」

気が付いたらヴァイスは、いなくなっていた。

「こっちだ」

モーントに腕を捕まれ、ローゼは引っ張られるようにして歩いた。

バタン

乱暴にドアが閉められる。

「座れ」

いつになく機嫌が悪そうなモーント。

「……………」

黙ってソファアに座ると、急にモーントが抱き着いてきた。

「ち……ちよつと！」

腕は完全に腰に回され、胸に顔を埋められる。

「モーント!？」

「怖かった……」

「え？」

「怖かったんだ。初めてだ」

怖かった？

初めて？

モーントはしばらく顔を埋めたまま、動かなかった。

「いなくなって初めて分かったんだ。君がいなくなった時の世界の恐さを。外出させなくなかったのも、きつと心の奥にその気持ちがあつたんだろう」

ローゼは何も言わない。何も……言えなかった。

「ローゼ……」

「へえ……あの、全く他人に興味を持たなかつ無慈悲な王子が、ね

え
」

廊下側のドアにもたれ、ふっと笑ったのはブラウ。

「ローゼは……やっぱりこの世界にいるべきだったんだね」

妖しく口元を曲げたブラウの隣が強く光り、ヴァイスが現れた。

「おや、立ち聞きですか。嫌な趣味をお持ちですね」

「まさか、たまたま通りかかったただだよ」

眼鏡のズレを直すと、ヴァイスに向き直るブラウ。

「それに、お互い様だろう？ 姿を消してずっとここにいたことぐ
らいは僕にも分かるよ」

ヴァイスは黙ってブラウの言葉を聞いている。

「まあ、心配なのは分からなくもないけどね。今のローゼは迷って
いる。王子の一言で、その答えは簡単に変わるだろうね」

「……………」

悔しそうに下を向くヴァイス。

「でも、君は何も出来ない。僕達はただの雇われ天使だからね」

「……………」ローゼがいなくなったら、どうなると思いますか」

「この世界かい？」

ブラウはちらっとドアを見て言った。

「さあ……その時はその時さ」

「いいですね。あなたは楽天的な考えが出来て」

「そうでもないよ」

廊下を歩き出すブラウ。

「ただ、興味があるだけさ。ローゼがいなくなった世界に、ね」

「相変わらず悪趣味ですね」

「それほどでも」

後ろを向かずに廊下を歩きながら言葉を続けるブラウ。

「君も早く仕事に戻るといい。考えすぎてはいけないよ。いくら『愛する存在』が気になるとしても……」

「……………」

ブラウの姿が、廊下の角を曲がって消える。

ヴァイスは小さくため息をつく。豪勢で分厚い造りのドアを見た。

「あなたにだけは言われなくなかったです。ブラウ」

そうぼそりと眩くと、ブラウとは反対の方向へ歩いて行くヴァイス。もう後ろは、振り返らなかつた。

紅茶を淹れるコポコポという音が、妙に静かな部屋に響き渡る。

「私ね……全部思い出したの」

「そう……」

さつきからモーントはずっとこの調子だ。

「はい、紅茶」

「ああ、ありがとう」

紅茶を飲むモーントの動きは、なんとなくぎこちない。

「ねえ……」

「なんだ？」

いつもは強気な口調も、今は勢いが無い。

「聞いてくれる？」

「……話したいのなら話せばいい」

「何よそれ……じゃあ、話すわ」

ローゼも紅茶に手を伸ばし一口飲むと、話し始めた。

私がフリーアだった頃

全てが変わってしまったきっかけは、あの『事故』

「お父様の久しぶりの休暇の日に、私とお父様と二人で、ピクニックに行ったの」

モーントは黙って聞いている。

「久しぶりのお出かけだったから、凄く楽しかった。お母様は仕事だったから、二人きりだったけど」

過去を振り返るのは、こんなに辛いものなのだろうか。深く深呼吸してから、また話し始めるローゼ。

「芝生の上ではサンドイッチを食べたり、たくさん遊んだ。追いかけてここにボール投げ、バドミントンにブーメラン。……凄く楽しかった。でも」

でも……

「帰り道、私の帽子が風で道路まで飛ばされてしまったの。あの帽子、誕生日に貰った大切な物だった。だから、私は夢中で追いかけたの。お父様と繋いでいた手を振りほどいてまで……」

ローゼは目を閉じる。瞼の裏に映るのは、悲惨な光景。

「フリア！」

叫ぶお父様。

帽子に夢中になっていた私は、反対側から来る車に気が付かなかった。

「お父様、お父様！」

一瞬の出来事だった。

私の代わりに車の下敷きになったお父様は、二度とあの笑顔を見せてくれることはなかった。

夕日よりも紅い血しぶきの付いた車と、その近くに横たわる動かない父親。集まる野次馬に遠くから聞こえてくる救急車のサイレンの音。

今でも鮮明に覚えている。

気が付いたら、涙が溢れていた。

「これ、使え」

ぶっきらぼうに白いハンカチを差し出すモーント。受け取るロー

ぜ。

「……ありがとう。それでね」

……違う、こんなの違う！ これは夢。悪い夢。

自分にそう言い聞かせながら、私は両手で耳を塞いで駆け出した。
この場から少しでも離れたくて。

「そしたらね……」

いつの間にか目の前に、森が広がっていた。

「森に、ピアノがあったの。白いピアノ」

「……」

モーションは何も答えない。

「無意識のうちに弾いていたの。その時……」

その時、誰かが後ろから私を抱きしめた。

「誰だったかはよく覚えてないんだけど……」

「……そうか」

「どっしたのモーション？」

今まで反応を示さなかったモーションが、少し落ち着きを無くして

いる。

「それから、どうなったんだ？」

「……気が付いたら、家に帰ってきていたの。お母様は泣いていた。でも私だけでも無事で良かったって、その時は言ってくれたのよ」

「その時は……か」

「ええ……」

お母様はお父様を深く愛していた。だから急に訪れた悲しみをどう対処してよいか分からなかった。そしてその重い悲しみは……

「君にぶつけられた訳だね」

「うん……」

人は悲しいことがあると、逃げ道を探そうとする。

「お母様は、お父様が死んでしまったのを私のせいにしたの。だから……私は邪魔な存在になった。あの日からお母様は変わってしまったの。私を嫌って、何かにつけては私を責めた」

辛い日々。実の母親から受ける暴力は、体だけでなく心も傷付けられた。

「本当は……本当はね、あの日……私がこの世界に連れて来られた日は、私がこの家を出ていく日だった。お母様は私を政略結婚させるつもりだったのよ」

フリアがいつも着ていたのは、白いぴったりとしたシンプルなドレス。

おしゃれもなにもさせてくれず、政略結婚の為の作法を押し付けられる毎日。

恋なんて出来なかった。してはいけないと心の中で何度も言い聞かせていた。

お母様は

変わってしまった

なにもかも

自分のせい
わたし

涙がとめどなく流れる。モーントは黙ってローゼの頭を撫でた。

「よく頑張って話してくれたな。辛かっただろう?」

子供みたいに泣きじゃくりながら、ローゼは優しくかった母親を思い出していた。

「僕は君をそこから助け出そうとして、君をここに連れて来たんだ」

泣いていたローゼが、ふと泣き止む。

「それって……もしかして全部知ってたの?」

「ああ、全て知っていたよ。僕は君を小さい時から知っている」
「どうして？」

モーントは答えない。ただ優しく微笑んだ。

「じゃあ……なんで私に話させたの？」

「君が話したいと言ったじゃないか」

「それはそうだけど……」

下を向くローゼ。それを真っ直ぐ見つめ、モーントは言った。

「本当は……君を試した」

「え？」

「君がその事実を、きちんと受け入れているか知りたかったんだ」

「それは……」

視線を窓に向けるローゼ。

「この国は君無しでは成り立たない」

モーントは頭を撫でる手を止めずに続ける。

「この世界は君を必要としているんだ。だが、僕は君をいきなり

「この世界に連れてきてしまった」

「……………」

「君に選択肢を与えよう。この世界に留まるか、元の世界に戻るか」

「元の……世界？」

「君が連れていかれる瞬間。つまり、あの白いピアノを弾いていた
時に戻ることが出来る。君が望めば、ね」

戻ることができる

元の世界に……

「どうする？ 今すぐに答えを出せとは言わないが」

「私は……………」

答えは、決まっている

なのに言い出せない

自分の選択が合っているのか

考えれば考えるほど

分からなくなる

「私、は……」

「君は？」

ローゼから離れ、ソファーに座るモント。座り方こそ偉そうだが、口調は優しい。

重い口を、ゆっくりと開く。

私は、この世界にいるわ

モントは、一瞬驚いたような表情をしたが、すぐにいつもの冷たい表情に戻った。

「それで、良いんだな」

「うん」

「良かった……」

「本当？」

「こちらとしては有り難いからな。その理由は聞いてもいいか？」

「理由は……」

理由は

お父様に

生きていて欲しかったから

「もう会えることはなくても、ここが私の世界とは別の世界だとしても、お父様には生きていて欲しい。お母様と幸せに暮らして欲しい」

私がいると

その幸せが

壊れてしまつから

私がいたら綺麗な旋律も

ただの不協和音となり消えていく

「……そうか」

空はすっかり暗くなっていた。モーントは言う。

「自分を差し置いてでも両親には幸せでいてほしい……といふことか」

「ええ」

迷いを押し込み、一つの選択を見続ける。でないともまた迷ってしまっただから。

「心配は無用だ。君の幸せは保障されている」

「……どういふこと？」

「さあな」

適当に答えて席を立つモーント。

「疲れただろう。今日はもう休みなさい。そうだな……明日が良い。明日に儀式を行う」

「儀式？」

「君が正式にこの国の住人になる為の儀式だ。といっても形式的なものだからな。気楽にやれば良い」

「そう……」

モーントはローゼに近づくと、そっと顔を近づけた。少しでも動けば唇が触れてしまいそうな至近距離で、モーントは少し迷ったように止まると、ローゼの頬にそっと口づけた。

「お休み。良い夢を」

頬がほんのり赤く染まるローゼ。

「…………お休み」

そう言っつて部屋を出ていくローゼの後ろ姿を、じっと見つめるモント。そしてローゼがいなくなった後も、ずっと……

そして、微かに口元を上げ静かに笑った

第一楽章・十六、自由と犠牲

「……これが儀式の服なの？」

「そうですね。何かご不満でもありますか？」

「いや、そうじゃなくて……」

目の前の鏡にうつるローゼは、豪華なフリルが沢山ついている真っ白なドレスを身にまとっていた。まるでウエディングドレスのようだ。

どうしてこの世界の服って、こつも派手なのかしら……

「とても良くお似合いですよ。僕の大好きな白ですから、貴女に似合うのは当たり前です」

ヴァイスの嬉しそうな言葉を聞きながら、ローゼは鏡の前でくりと回った。

「まあ悪くは……ないけど」

「そろそろ時間ですね。行きましょう」

ヴァイスが出した手に、ローゼは自分の手を乗せる。

「おっと、忘れていました」

ヴァイスは一度ローゼの手を戻すと、空気を掴むように手を動か

した。

「それは……」

「儀式に必要な不可欠な物です」

首にかけられたのは、相変わらず淡く薔薇色に光るシュテルンだった。

あの時、自分の過去を見る為に壊したシュテルン。

「さあ、行きましょう」

思い出したくない、なのに記憶は蘇る。もう、シュテルンに記憶を制御する力はないようだ。

ならば、今シュテルンが必要なのは何故？

ヴァイスが腰にそつと手を置く。ローゼは全てを振り切るように首を振った。

「大丈夫ですよ」

全てを知っているかのように、ヴァイスは優しく言う。

「貴女の幸せは保障されていますから」

保障されている。同じ事をモーントにも言われた。

「分からないの」

「何がですか？」

「幸せって、なんなのか。私にとっての幸せが分からないの」

分からない

幸せの輪郭がぼやけていく

形が見えなくなる

「そんな事で、悩んでおられたのですか。どうりで顔色が優れない
と思っていたら」

「そんな事って……」

にこりと微笑むヴァイスを、不審げに見上げるローゼ。

「では教えて差し上げましょう」

ヴァイスは右手の白い手袋を外すと、ローゼの頬に触れた。予想
していなかったことに、びくつと反応するローゼ。

「幸せは一つとは限りません。例えば……」

ヴァイスはローゼの顎を持ち上げると、そつと唇を重ねた。

「『これ』も幸せです」

かつ顔が熱くなるのが分かる。ヴァイスは楽しげに微笑んだ。

「もっと知りたいですか？」

「……いいっ！」

「そうですか……残念ですね」

そそくさと歩いて先に行ってしまうローゼ。

『あんたも好きね』

音を立てずに廊下を歩き、ヴァイスの足元で止まったのは、黒猫のメーア。何か言おうとしたヴァイスを遮るように、メーアは続ける。

『二本足はやめたから。おかげで後ろ足はたくましくなったけど。記憶操作もブラウに解いてもらった。城を出るつもりもないから、国民に珍しがられることもないと思う。この城は日当たりが良いからひなたぼっこには最適だしね』

「それは、良かったですね」

歩き出そうとするヴァイスの足に絡み付くメーア。

「……どうなされたのですか？」

『あんだ、ローゼを幸せに言ったね？』

「聞いていたのですか。ええ、確かにそう言いましたよ」

『本当に出来るの?』

「はい」

『……………』

メーアの腕が緩むと、また歩き出すヴァイス。

「いつかあの記憶が消えるまで、彼女に幸せを与え続けます。もちろん完全に消えたあとも、ずっと」

『……………ほんと、好きね。あんたは』

「ええ、愛していますから」

当然のように言うヴァイス。もちろん、にこやかな笑みも忘れずに。

『なら……………しばらく任せる。最近のローゼは、表情が和らいでいる気がするからね。あんたらのおかげかもしれない。ただ……………ローゼを不幸にしたら、許さないから』

「お任せ下さい」

ヴァイスはそう言った後、そういえば……………と言いながら立ち止まった。

「あなたは、元の世界に戻ろうとは思わないのですか? あなたに

も元の世界に戻る権利はあるんですよ。もともと来たくて来た世界ではないでしょう」

『確かに来たくて来た訳じゃない』

「では元の世界に……」

『戻らない』

ぷいと横を向き、歩き出すメーア。ヴァイスも歩き出す。

『あの日……ローゼがこの世界に連れて来られた日、渦の中に飲み込まれるローゼを見て、あたしは迷わずその渦に飛び込んだ。あたしの飼い主はローゼ以外にいない。だからあたしはローゼのそばにいる』

その言葉を聞いたヴァイスは、フツと微笑んだ。

「あなたも……ローゼ様がお好きなのですね」

『まあね』

顔を上げるメーア。一瞬、天使と猫の視線が交わる。

『それに、向こうの世界に猫一匹が居ようが居まいがあまり変わらない』

「確かに、あなたの存在を元の世界から消すのは楽でした」

『……意外とその言葉傷付くな』

「そうですね？」

ヴァイスは、悪気の全くない表情で言った。いつの間にかドアの前に着いている。

「メーア、あなたは儀式を見学しますか？」

『うん。暇だからね』

「そうですね？」

ヴァイスは重いドアを開けた。

「はあ……」

モントは偉そうに椅子に座りながら、ホールを見回す。

ここは、ローゼの白いピアノがあるホール。この部屋にいるのは、ローゼとメーア、そして六色の天使と王子だった。

「早く準備しろ。こんな形式上の儀式など早く終わらせてしまいたい。……そうだ、ローゼ」

「何？」

手招きをされ、モントのところへ行くローゼ。

「君に一つ聞かなければならないことがあった」

「聞かなければ……ならないこと？」

「そうだ」

一呼吸おいてから、モーントはいつもと変わらぬ口調で言った。

「君は……『自分の名前を捨てる』覚悟はあるか？」

「えっ……？」

自分の名前を

捨てる

「それって……」

「君はこの世界では、『ローゼ』として生きなければならない。それがこの世界の『ルール』なんだ」

「ねえ……」

「なんだ？」

「ずっと気になってたんだけど、『ルール』ってなんなの？ あなた王子でしょ。それくらい変えられ」

「変えられないんだ。この世界のルールは。誰が定めたのかさえ分からぬ。ただ、ルールに逆らうことは許されないんだ」

そう言われた刹那、モントの顔が寂しげに見えた。でも瞬時にしてもとの見下したような目つきに戻る。

「どうする？ ……といつても、今更遅いが」

「私、は……」

生まれてきた時から、当たり前と呼ばれていた自分の名前『フリア』。

「モント様。準備が整いました」

ヴァイスの声が聞こえる。

「さあ、一言でいい。「ローゼとして生きる」と言え」

「私は……」

私は……

何かが溢れ出すように、今までのことが蘇ってきた。

幸せが砕け散り

一人ぼっちになると

たまらなく寂しくなる

寂しさを埋めたくて

空想に耽^{ふけ}る日々が続く

「ねえ、モーント」

「なんだ？」

「この世界は、『私の望んだ』世界なの？」

モーントは少し考えた後、静かに言った。

「そうだな。そうとも言えるが、少し違う」

「違う？」

「この世界は、ローゼという存在を必要としている。今も、『昔』も、ずっと」

「昔って……」

「今はそうとしか言えない。君には決断をしてもらわなければなら
ない。さあ、早く」

「私は」

自分の名前も

何もかも

忘れてしまえば良い

この世界しか

私の居場所は無いだから

だから……

「分かったわ。私は、ローゼとして生きる。誓うわ」

「……分かった。儀式を行う」

モントは、一瞬だけ嬉しそうな表情をしたように見えた。

ローゼを囲むように、六色の天使達が等間隔に並ぶ。ローゼのすぐ後ろにモントが立った。

「何も考えずに立っていれば良い。言葉も発するな」

言われた通りに黙り込むローゼ。モントの手は、ローゼの肩の上にそっと置かれた。。

「今から儀式を始める。ヴァイス」

「はい」

ヴァイスは右手を前に出すと、そこに白い光が現れた。

モントに名前を呼ばれることに、他の五色の天使も同じような動作を行った。

六色の光がゆらゆらと揺れる。モントは片手をあげると訳の分からない呪文のようなものをぶつぶつと唱えた。

光がどんどん集まり、一つの塊へと変化していく。

「ローゼ、動くなよ」

モントがそう言った瞬間、六色の色がうずめく光が、ローゼを包み込んだ。

一瞬のことだった。

ローゼを包み込んだ光は、すぐに大きく印の描かれた地面に溶け込むように消えていってしまった。

ドクン

心臓が高鳴る

何かもやもやとしていたものが、消え去っていくような

不思議な感覚

「う……」

胸元が熱くなる。驚いて見ると、実際には胸元のシュテルンがゆらゆらと熱を帯びていた。

「これ……は……？」

何かが弾けるような音と共に、ローゼの胸元のシュテルンからまばゆい光が溢れ出した。

「ああ……とうとうきたのか」

その様子を見ながら、ふんつと鼻をならすモーント。

キラキラと光るその光は、子供のうずくまったような形を形成し、ローゼが目を開いた時には、一人の女の子の姿になっていた。

思わずその場に近付き、手を伸ばすローゼ。

「触れるな。一人で立てる」

「……え？」

まだあどけなさの残る幼女の声。

むくりと起き上がった姿は、鮮やかなオレンジ色の髪をツインテールに結び、浅黄色の瞳を持つ、身長はローゼの半分くらいの小さな女の子であった。

「……………」

驚きで何も言えないローゼ。そんな彼女に構わず立ち上がり、固まった腕や足をポキポキと解すほくオレンジ髪の少女。

「どうしたの？ そんな不思議そうな顔して」

「……………」

思わず少女を上から下まで見てしまう。可愛いフリルのついた黄色を基調としたワンピースを身に纏い、それに似合わない下から睨みつけるような鋭い眼光を向けてくる。

「あなた……………？」

「今更聞くななんてアナタはどこまで馬鹿なの？」

「だっ……………て」

その時、首元がスースーしていることに気付いた。あの宝石シユテルンが、無い。首にぶら下がっているのは、役目を無くした細い銀の鎖だけだ。

「あなた……………は」

「やっと気付いた？」

「シユテルン……………ルン？」

「そつよ」

さらりと答えるシュテルン。

「でも色とか声とか……」

あの薔薇色の石だったとは思えない姿。未だに信じられないような声のローゼに、シュテルンはきっぱりと答える。

「色は『仕える人』つまりアナタに合わせただけ。これがワタシの本当の色。声はワタシが自由になった証拠……そつ、自由」

胸に両手を当てて嬉しそうに呟くシュテルン。

「そつよ。ワタシは自由になったのよ。自由……じゅつ……アハハハハハハ」

その場でくるくると回りながら、狂ったように笑い出すシュテルン。

「自由に、なったのよ。アナタのおかげで」

「私の……？」

「そつ。アナタが私を石に縛り付けていた。アナタの元の世界への気持ち」

キラキラと輝くシュテルンの浅黄色の瞳。

「私の……」

「アナタが帰らないことを決心し儀式を行えば、ワタシの呪縛は解ける」

「……………」

「ありがとうローゼ」

ローゼの足にギュッと抱き着くシュテルンを、ローゼはただ啞然と見つめることしか出来なかった。

第一楽章・十七、何も知らない

「それくらいにしてやったらどうなんだ？ シュテルン」

不機嫌そうなゲルプの声に、ローゼはハッと我に返った。

「ワタシがアナタに指図される覚えはないよ。ゲルプ」

「てめえっ！ チビの癖に偉そうなんだよ！」

グツと拳を握りしめるゲルプ。その拳の周りに小さな電流がバチバチと出ている。

「まあまあゲルプ、落ち着いて」

「あんたも一緒だ」

爪先立ちでゲルプの肩をとんとんと叩くロートの頭を手で押さえるゲルプ。ロートは小さく「うえっ」と呻くと、手から炎を出して反撃しようとする。

「ゲルプ手にまだ雷残ってたたる！ 痛いんだよ！」

「あちっ！ てめえ何すんだよ。人間なら火傷じゃすまないぞ！！」

「ゲルプは天使だろ？」

「二人とも、くだらない茶番はやめようか」

ブラウのゾツとするような冷たい言葉に、ゲルプとロートは「ひっ！」と 言って固まった。

「よろしい」

口元は笑っているが、目が笑っていないブラウ。

「まあまあ皆さん、ローゼ様が困っておりますよ」

ヴァイスは場を和ませるように優しく言った。

「ご苦労だったな。シュテルン」

「いいえ。当然のことをしたまでです。王子様」

モントの言葉に、軽く跪ひざまずいて頭をさげるシュテルン。

「……………」

王子に対しての態度のあまりの変わり様に、ローゼは言葉を失う。ゲルプの軽い舌打ちが聞こえた気がした。

「これで全てが終了した。ローゼ、君は今日から音の国ムズィークの正式な住民だ」

ローゼの顎に手を触れさせて、微笑むモント。

「疲れただろう？ ゆっくりと休むが良い。そうだ、シュテルン」

「はい？」

可愛らしく返事をするシュテルン。首を傾げる動作と共に、オレンジ髪のツインテールもふわりと揺れた。

黙っていれば可愛いのに……

その心の中で思うローゼに、一瞬突き刺さるような視線が向けられる。

「！？」

「話がある。僕の部屋に来て欲しい」

「畏まりました。王子様」

「……………」

さっきの視線はシュテルンのものであった。部屋を出ていく二人を呆然と見つめるローゼ。と、誰かに肩を叩かれた。

「わっ！」

「奴らにはあまり関わらない方が良く」

急に叩かれて驚くローゼに構わず、背後に立って呟くように言ったのはシュヴァルツ。

「どっぴろっ……」

振り向くと、もう彼は居なかった。

「はぁ……とりあえず、せつかくローゼがここに残ると決心してくれたんだからな、今日はパアツと遊ぼうぜ！」

ゲルプに腕を捕まれ、困惑した表情のローゼ。

「馬鹿が。今を何時だと思っているんだい？」

ブラウが懐中時計を見て呆れたようにため息をつく。

「夜はこれからだろ？」

「ゲルプのばーか、変な事言っんじゃないよ。ローゼは疲れてるに決まってるだろっ！」

「てめえ……！」

再び二人の乱闘が始まる。

「気にしないで部屋に戻ると良いよ。ローゼ」

「ブラウ……」

「大丈夫！ アレはボクが止めておくから！」

「グリユーン。君は乱闘に巻き込まれただけだろう。君も部屋に

戻れ」

「チエッ」

ぶつぶつと文句を言うグリューンを引きずるようにしてドアに向かうブラウ。

「ほら、ローゼも」

「う……うん」

三人がドアの奥に消えて行くのを、ヴァイスは黙って見ていた。ゲルプとロートは未だに激しい乱闘を繰り広げている。

「……………」

ローゼがドアから完全に離れたと知ったヴァイスの表情が、瞬時に冷たく変化した。

コッ……

ローゼの知らないヴァイスの姿。そう、ローゼはまだ『何も知らない』。

コッ……コッ……

「ゲルプ、ロート」

酷く冷たい声に、我に返ったようにヴァイスを見る二人。

「いつになったらそのくだらない遊びをやめるようになるのですか？……お仕置きです」

「う……ヴァイス！ それだけは……っつわぁぁー！」

そう、ローゼ様は

何も知らない

「……ん？」

「ローゼ、どうかした？」

「うん。ただなんか……誰かの叫び声が聞こえ」

「気のせいだよ」

ローゼの言葉を遮るように言うブラウ。

「そう……よね。あれ？ グリユーンは？」

「さっき彼の部屋の前に置いてきたよ」

「置いてきた？」

表現方法がおかしいと言おうとする前にブラウが口を開く

「気付かなかったのかい？」

「ええ……少し考え事をしていて」

「まだ迷っているのかい？」

ブラウの手が、ローゼの髪を優しく梳く。

「考え過ぎは良くない。深い眠りにつけないよ。ローゼ」

「……………」

「それなら俺が、何も考えなくさせてあげようか？」

至近距離で微笑むブラウ。

「ブラウ……？」

「ふふ。今の君なら、簡単に俺の物にしてしまえそつだ」

ふと、生暖かいものがローゼの頬を伝って床に小さな染みを作った。

「我慢してはいけないよ。ローゼ」

一度出たら止まらなくなる、悲しみを形にした涙。

ゆつくりと眼鏡を外すブラウ。ガラス越しでない深い色の瞳が、ローゼを見つめる。

「悲しい時は泣けば良い。苦しい時は、誰かに身を委ねるんだよ」

親指で涙を拭われ、優しく、優しく、抱きしめられる。

「ローゼ、君は可哀相な子だ」

「可哀相……?」

「ああ、可哀相だ」

「どうして?」

「それは君が、一番知っているんじゃないかい?」

急に、何かを言おうとしたローゼの唇を冷たいもので塞がれた。

ローゼの目が大きく見開かれる。

「さあ、俺に身を委ねて」

何度も繰り返される、冷たくて甘い、愛の行為。

「君の寂しさを」

チュッ

「全て」

チュッ

「俺が吸い取ってあげるよ」

「ブラ……」

わざとらしいリップ音と共に、低い声で優しく囁かれる。それは耳をも犯していくようで……

「ブラウ……んっ」

彼は、同情しているの？

それとも……

「やめ……」

初めて抵抗を見せたローゼの腕をいとも簡単に掴むと、廊下の壁に押し付けた。

「駄目だよ」

「ブラウ……」

「駄目だよ。今は言うことを聞くんだけ」

「なんで……？」

冷たいブラウの唇が、首筋を這う。

「なんっ……」

鎖骨辺りをなぞるように舐められる。抵抗する気持ちは奪うようなその行為に、ローゼはただされるがままになっていた。

「そう、それで良い」

ローゼの力が抜けて行くのを感じたブラウは、そのまま床に座らせた。

「はぁ……」

「そろそろ、眠たくなってくる時間かな」

頬をゆるゆるとなぞるブラウの細くて長い指。ローゼはそれさえも気持ちが良いと思い、目を閉じた。

私は、きつとおかしくなってしまったんだわ……

こんな……姿を……

他人に見せて……

「お休み」

最後に覚えていたのは

名残惜しそうに唇に触れる

ブラウの冷たい指の感触

「冗談じゃないです！ 王子様！」

モーンの部屋。焦ったように叫ぶのは、シュテルン。

「またあの子の御守おまもりりをしると言っんですか！？ そんな」

「僕に逆らうのかい？」

「ちっ……違います」

悔しそうに下を向き、唇を噛むシュテルン。

「ただ……ワタシが仕えたいのはあの子でなく」

「なら問題はない」

「王子様！」

「嫌なら消えろ」

「王子、様……」

「彼女はまだ迷っているんだ。あんな形式的な儀式で彼女を縛りつけることなど出来ない。君には、彼女を縛りつける『縄』となって欲しい」

「王子様……」

力無いシュテルンの声。

「どうしてそこまでして、あの子を？」

「さあな」

「教えて下さらない……ということですね」

「ここは誰もが『ローゼ』を愛する国。君も彼女を愛さなくては
いけないよ」

「王子様は良いですね。この国の住人ですから。天使達だってそう。
でもワタシは違う」

「ならば何処へでも好きな所へ行くと良い。ローゼを愛するという
『演技』が出来ないのなら、ね」

「王子様……」

シュテルンは顔を上げた。そのまま立ち上がり、モントを真っ
すぐ見つめる。

「ワタシを『その程度』の召し使いだとお思いで？」

「その言葉を聞く限り平気そうだな。シュテルン」

「畏まりました。アナタのご意思のままに……」

小さい姿と声に似つかわぬ言葉を言うシュテルン。

「期待しているよ」

にこりと微笑むモーント。

「ローゼ……彼女はいつか僕の所有物となる存在だからね」

「所有物……人間に対して使う言葉では無いですね」

「そうかもしれないね」

モーントは目を閉じ、うっとりとはやく。

「ローゼ、君は今頃どんな夢を見ているのだろうか……」

「はっ！」

目を開けると、天井が目に映った。

「あれ……?」

ゆっくりと起き上がるローゼ。服装はネグリジェに変化している。だが着替えた覚えは無い。ということは……

「……ブラウ」

途端に顔が赤くなる。どうしてあんなに抵抗が出来なかったのだろつ。おまけに、服まで……

「はあ……」

起き上がったなら目が覚めてしまった。時計を見ると、午前四時を過ぎた所。あまり寝てはいないらしい。

「シャワーでも浴びてこよ……」

もう一度寝る気も無かったので、ローゼは立ち上がった。

「ふう」

あらかた乾いた髪を、櫛でとかす。

「何も気にするなって言われても……」

ゆらゆらと揺れる蝋燭ろうそくの火を見つめているローゼ。

ドキン

心臓の高鳴りと共に、背筋に走る訳の分からぬ恐怖。

ここに留まる為には、過去の名前を捨てなければならない

ローゼはフリアという名前を捨てて、ローゼとしてこの世界に生きることを選んだ。

何も迷うことはない。今頃両親は、元の世界で幸せに暮らしているだろう。

両親の幸せが

私のシアワセ

「だけど……」

怖い

一人でいることの

耐え難い恐怖

「……起きていたのですか？」

静かにドアが開き、ヴァイスが顔を出した。

「ヴァイス……」

「こんな時間に起きているなんて……眠れないのなら、ホットミルクでも持ってきてみましょうか？」

「ありがとう。でも大丈夫よ」

「そうですね」

ベッドに向かって歩いて来るヴァイス。

「もう少し寝ていた方が良いでしょう」

「でも……」

無理矢理横にさせられ、シーツをかけられる。

「どうしたのですか？」

「あのねヴァイス……」

心配そうに顔を覗き込んでくるヴァイス。

「私が眠るまで……傍にいてくれない？」

一人であることの

孤独であることの

恐怖

誰か傍にいて欲しい

崩れそうな私を

支えて欲しい

「ええ、勿論いいですよ」

ヴァイスは、白い手袋を取ると、そのがっしりとした手でローゼの手を包み込んだ。

「貴女は一人ではありません。貴女の周りは、貴女を必要としているのです」

「うん……」

目を閉じると、ほのかに薔薇の香りがした。

「安心してお眠りなさい。僕はずっと貴女の傍にいますから……」

ずっと、ずっと

傍にいます

この身が滅びる

『その時』まで

「やっと眠れたようですね」

スースーと静かに寝息をたてているローゼの顔にかかる髪をそっとのけるヴァイス。

「……無防備ですね」

力の抜けたローゼの顔を、愛しそうに見つめるヴァイス。

「貴女の責任ですからね」

そつと顔を近付ける。

影が重なる瞬間、蝋燭の火が消えた。

第一楽章・十八、交差する感情

「この世界に来てどれくらいが経ったんだろう……」

忙しそつに行き交う動物達を、窓から眺めながら言うローゼ。

「……でもアナタを待っていた時間に比べれば短いものよ」

一口飲んだ紅茶をカタン、と小さな丸テーブルに置くシュテルン。

「……何を見ているの？」

「何って、街よ」

「ううん。違う」

シュテルンも立ち上がり、ローゼの隣に立った。

「アナタは違うものを見ている」

声の無邪気さが消えたシュテルンは、ローゼのドレスの裾をギュッと掴んだ。

「忘れられていない……そうでしょ？」

忘れられない、元の世界

睨むような視線から逃げるように、ローゼは窓に映る空を見ていた。

思い出される、今までの記憶

この世界に来てからの出来事

そして関わった人達

みんなが無条件で私を愛していて

この世界でピアノの音色を奏でることが出来るのは私だけ

絶対にありえない、普通じゃない世界、それが音の国ムズイク

私は、ここに留まることを決意した。

相変わらず天使達も王子も私に思わせぶりな態度をとったり、激しく愛を示してきたりするから、気を抜いたら襲われるかと思うと気が気でない。

みんな美形だし私にはいつも優しい。でも私はまだ特定の人を好きになることが出来ない。

みんな大好き。だけどそれは、意味が違う。

私の心にまだ残っている言葉

あなたは誰も好きになっではならない

それが私を引き止める。沸き上がる感情が、何かに吸い込まれたかのように消えてしまう。

それはピアノの練習をしている時、いつも同じところを間違えてしまうように

そこでつつかえて前に進めない

言葉で表現しきれないむず痒い感情

でも、ここには私の居場所がある

『元の世界』とは違って

まだ忘れることの出来ない過去

だけどいつかきつと

ここに居ていねばきつと

忘れられる

誰かが忘れさせてくれる

忘れてみせる

例えこの選択が間違っていたとしても

私は……

「後悔してる？」

シュテルンの眩きは、何かに怯えているように震えていた。

「してないわ」

きっぱりと答える。

「本当に？」

「本当よ」

瞳の高さをシュテルンに合わせるようにしゃがみ込み、断言する。

「私はずっとここにいるわ」

「なら、信じるね」

ドレスの裾から手を離すシュテルン。

「……結構簡単に信じるのね」

「当たり前じゃない、ローゼがないとワタシはここに存在出来ないんだから。アナタはきつとワタシを裏切らない」

信じてるから

だから、ずっと一緒に

ゆっくりと時間が進む昼下がり。穏やかな日差しに照らされ、シユテルンは眩しく微笑んだ。ローゼもつられて微笑む。

目の前の笑顔がただの仮面だと知らずに……

バン！

「おおっとお……」

瞬時にドアに小さな穴があく。そのギリギリ横に、不満顔のゲルプが立っていた。

「イライラしてるのは分かるけどなあ……いい加減危ないものはしまえよ王子様。オレじゃなかったら死んでたぜ？」

「……死ね」

乱れた前髪を乱暴にかきあげると、怒ったような低い声でモーントは言った。

「残念だな、まだ死ねなくてね」

「用は何だ。さっさと済ませてさっさと消える」

「いきなり酷いなあ」

ゲルプはわざとらしくため息をつくど、どこからともなく一枚の封筒を取り出した。真っ白な封筒には、そこだけ場違いに派手な赤い薔薇模様の切手が貼られている。

「またか……」

「また……というと？」

「今日はこれで十一通目だ。しつこいにも程がある」

「ああ……そのことか。それなら……」

ゲルプが指をスライドさせると、トランプのように封筒が五枚になつた。

「残念ながら、これで十五枚」

バン！

「うおっとー！」

再び発砲された銃弾をギリギリの所で避けるゲルプ。

「だから危ないものはもつべきじゃねえって。精神不安定なのは分かるけどよ」

ゲルプはつかつかと歩くと、モントの机に封筒を置く。

「……はあ。聞いても無駄だと思うが、差出人は？」

「ゼーんぶ、『彼女』だよ」

「あいつめ……」

恨めしそうに封筒の束を見つめるモント。

「今日でこれだけ来たってことは……」

「ああ。そろそろ『彼女』が帰ってくるらしい」

「へえ……帰ってくるんだ」

ゲルプはまたドアの元へ戻る。

「ふーん」

先程のドアに残った弾痕に手をあてる。ピリツと電気のはしるような音がして、手を除けた時には痕が綺麗に消えていた。

「『彼女』が来るってことは、また何か良からぬことが起こるのかな？」

「不謹慎なことを言うな。『あの時』はたまたまだ」

「偶然なんてものがこの世界にあると思うのか？」

「……………」

珍しく強く言い返さないモーントに気をよくしたゲルプは、楽しそうに言う。

「ま、オレは退屈が嫌いだから、少し刺激があった方が有り難いけどな」

「……………何とでも言え」

「今日の王子は張り合いが無くてつまらないなあ。では、これで失礼するよ」

さつさと部屋を出ていくゲルプ。完全にドアから離れたことを確認すると、モーントはむしゃくしゃした気持ちを晴らすように「ドーン！」と拳で机を叩いた。

「ああ……………どうしてこうなる」

無造作にゲルプの置いていった封筒に手を伸ばすモーント。

「なんだかんだ言って……………中身は読むんですね」

「……………ブラウ、いつから居た」

「さつきです」

ベランダのある窓からひょいっと顔を出すブラウ。

「その手紙は……『彼女』からですね」

「ああ、女とは迷惑なものだ」

「そんなこと言わないで下さい。あの『ローゼ』だって、女の子なんですよ」

「……今その名前を出すか？」

「ローゼは特別……とでも言っただけでしょう」

「……うるさい！ 今は一人にさせてくれ」

「貴方のような方が取り乱すとなると、この国も末ですね」

「お前……！」

「では、失礼します」

丁寧に窓を閉めると、ブラウはベランダからひょいっと降りていなくなった。

「はあ……どいつもどいつも」

乱暴に封筒を開けながらぶつぶつと文句を言うモーント。

一つ一つ封筒を開いて中身に目を通すモーント。内容はさして変わらない。でも、『目を通さなければならぬ』のだ。

「ローゼがこの世界に来て、シユテルンも解放された。もしこれが本当なら……またあの過ちが起こるのか？」

手紙を丁寧に畳むと、一番上の引き出しに入れる。

「『彼女』か……」

モーントの脳内に現れる、目に痛い紅のドレスに身を包んだ『彼女』。

「いや……」

すぐさま頭を横に振ってそれを掻き消す。

「あと一ヶ月……か」

カーテンの隙間から差し込む穏やかな日差しを、モーントは恨めしそうに見つめていた。

「……そこで何をしている」

「あ……ばれちゃった？」

「また仕事をサボろうとしていただろう。無駄なことだと知ってい

ながら」

困ったように頭をかくロートに、呆れた口調で言うのはシュヴァルツ。

「俺はまだ子供だからね。今のうちに無駄なことしておかないと」

「また訳分らない理由言ってるー」

二人の間に現れたグリーンが、呑気に言った。

「貴様も……仕事はどうした？」

「さっさと終わらせて帰ってきたんだ」

「グリーン……頬に血が付いてるよ。ほらっ」

「おっといけないね」

ロートに指摘され、廊下にある鏡を見ながら頬の血を袖口で拭うグリーン。

「うーん、もう固まっちゃったかなー。なかなか取れないよ」

「貴様……こんな所をローゼに見られたらどうする気だ」

「あれー？ シュヴァルツがローゼの名前を出すなんて、珍しいね」

「っ、それは……」

グリユーンから顔を背けると、シュヴァルツはぼそりと呟いた。

「あいつの泣かせることは……して欲しくないんだ」

「えー！？ シュヴァルツがそんなこと言うなんて変なのっ」

ロートがからかうように言う。

「もしかして、シュヴァルツ『も』ローゼのことが好きなの？」

「き……貴様っ、何だいきなり！」

「へーえ、じゃあボクと同じだねー」

「グリユーン！ ローゼは俺のだからね！」

「貴様……『俺の』とは何だ！！」

「二人で争ってずるーい。ボクもボクも！」

「はぁ……お前ら、何やってるんだよ」

たまたまそこを通りかかったゲルプに止められ、やっと三人の争いはおさまった。

「まったく、オレだってどっかのアブナイ王子様に銃向けられて大変だったのによ」

「危ない王子様は今、精神不安定だからね」

「お、おい！ いきなり現れんなよ！ あんたはいつも神出鬼没で……」

「嗚呼……それは悪かったね」

全く悪いと思っていない口調のブラウ。

「そういえば皆、ヴァイスを見なかったかい？ 今日一日姿を見かけなくてね」

「あいつは今日仕事無いんだろ？ どこかフラフラしてるんじゃないか？」

ゲルプが言う。

「そうか……彼も不安定でなければ良いんだけどね」

「ヴァイスに不安定になるようなことなんてあるの？」

ロートの問いに、シュヴァルツが小さく呟いた。

「天使といえど、心がそう強いわけではない。特に彼は……」

急に曇り始める空を見つめる五色の天使達は、一体何を考えているのか。

「へえ……」

時空の狭間。ユラユラと揺れるスクリーンのようなものが、シユテルンとローゼ、王子、五色の天使をそれぞれ淡い色で映し出している。

それを一人眺めるツアイト。そしてクスクスと小さく笑う。

「それぞれの様子が見れるなんて、我は神様みたいだね」

「また変な事言っつて」

「あれ……君か、ルプラ」

「寂しがり屋のあなたに会いにきてあげたのよ」

「クスクス。それはどうも」

ルプラの元に一步步近づくツアイト。

「……反論しないの？」

「反論する必要はない。その通りだからね。そう……我は今、寂しいんだ」

スクリーンに映るローゼの姿をちらりと見るツアイト。

「ルプラ。また彼女を連れて来てはくれないかい？」

「それは……」

いつもしっかりと前を見据えているルプラの瞳が、少し泳ぐ。

「やっぱり無理だね。我はローゼにとって一番会ってはいけない人だから……」

「ツアイト……」

「良いんだ。我もそれは十分に分かっている。『選ばれた者』の宿命さ。我に抗うことなど出来ない」

「……………」

悔しそうに下を向くルプラの頭の上に、自分の手を乗せるツアイト。

「でも……寂しいよ」

「わ、私で良ければ……」

「ん？」

「慰めて、あげても、いいわよ」

ルプラの手が伸びて、ツアイトの頬に触れる。

「ありがとう」

軽く抱き合う二人

まるでお互いの傷を癒すかのように……

全てはルール

抗うことは出来ない

たとえば、何があるうとも……

トーン

森に響く、『ド』の音

普通、森にピアノが存在することなどありえない

だがこのピアノは、そこにいることが当たり前のように、周りと調和してどっしりとそこに居る。

「懐かしいですね……」

白い手袋を取ると、そっとその艶やかな胴体に触れる。

「貴女と会った日……あれは、本当に奇跡のようでした」

そのピアノに語りかけるように、ぽつり、ぽつりと話し始める白い影。

「貴女が居れば……全てが変わると直感的に思いました。僕の世界の全ての人が救われる、と」

鍵盤に落ちてきた枯れ葉をそっと払う。

「なのに僕は……いつの間にか貴女を……そう。貴女無しでは正気でいられないほど、深く愛してしまった」

払った落ち葉を、足でグシャリと潰す。

「僕としたことが……でも、この世界の者全てが同じなんです。皆ローゼを愛してやまない。僕のように」

トーン

ピアノの心地好い響きが、鼓膜を通じて体全体を心地よく刺激していく。

……しかし、足りない

『音』を出すことは出来ても、『音楽』を奏でることが出来ないのだ。

「ローゼ……いつか貴女が僕の為にこの楽器を弾いてくれるようになるのなら」

ピアノを背に歩きだす。そう、自分の世界へと帰る為に。

「僕はいくらでも待ちましよう」

いつか永遠に一緒にいること

その身体 髪の毛の先から爪先に至るまで、全てを
自分のものにしてしまえるその日まで

「僕は、待ちます。そして……」

いつか、貴女と一つになれたら……

確証のない浅はかな希望

「貴女を、幸せにしたい」

それが僕の

この世界で生きている間の

『最後の願い』です

「ローゼ様……」

一人呟く白い天使の気持ちを知る者は

この森にあるピアノのみ

全ては

ローゼ様の為

第一楽章・十八、交差する感情（後書き）

時間が遅くなってしまう、すみませんでした m (| |) m

今回は場面転換を多くして

それぞれの思惑を記してみました。

少し解説をさせて下さい

モント王子の言っていた『彼女』は、ガールフレンドの『彼女』ではありません

『彼女』の正体はまた別の回で……

そして最後の白い天使の思惑

恐らく彼が誰なのかは読めば分かってしまうと思うのですが
誰だかはあえて書きませんでした
理由は秀囲気をつくる為でしたのでご了承を；

第一楽章・演奏終了（エピソード）

何も見たくないのなら

何も見なければ良い

目を閉じてしまえば

見えるのは真っ暗な闇だけ

《ローゼ》

私を呼ぶのはダレ？

《待っていたヨ》

待っていた？

《ローゼ》

《愛しいローゼ》

《ズット待っていた》

《ズット》

《ズット……》

どうして私を知っている？

《残酷なホド長い時ヲ》

《狂いソウになるマデ》

《ズット》

《待っていたんだヨ》

《もうすぐアナタに会エル》

私は……

《アノ血の涙を流すホド》

《寂シカッタ日々が》

《終わりを告げる》

誰かに必要とされている

夢の中の声と、『私』の声が重なる

《さあ》

そう

《ソノ白くて長い》

あなたがあの時の

《美シイ指で》

夢の声で

《アナタだけの旋律を》

あなたが私を

《奏デテ》

欲していた

《アナタが楽しく奏でれば》

《人々は歌イだし》

《アナタが美しく奏でれば》

《木々の緑が輝ク》

《アナタとコノ国は》

《繋がっているんだヨ》

《アナタが死ねば》

《コノ国も滅ビルの》

ピアノ椅子に座る私に

あなたは早く弾くよう促した

早く

早く

《ローゼ》

《みんなのローゼ》

《みんなダケのローゼ》

《アナタを絶対に離さない》

やめて

《早くオイデ》

これ以上

《早く》

私を

《早く会いタイ》

惑わさないで

《準備は整ッタ》

《時はもつすぐ満チル》

《後はアナタが》

《花を添えるダケ》

《美シイ》

《薔薇の花ヨ》

《ソシタラ》

激しい動悸

《全てが終ワリ》

息が出来ない

《全てが始マル》

やめて……

痛い……イタイヨ……

極甘のソナタは

美しく幕を閉じる

それは表面だけ

最後の音は

柔らかなベールに包まれて

美しく余韻を残す

「ローゼ……」

久しぶりの悪夢に、苦しそうに表情を歪めているローゼを、シュテルンは静かに見つめる。

「運命は、変えられないものなの」

だから今は

たくさん苦しいの

きつとこれからも

苦しくなる

ローゼを見つめるシュテルンの顔が、ふと険しくなった。

「せいぜい、苦しめば良い。ワタシに迷惑がかからない程度にね」

次のソナタは

戦慄のソナタ

T o b e c o n t i n u e d . . .

途中休憩（第一楽章あらすじ&人物紹介）

久しぶり。会えて嬉しいわ。

え？ ワタシは誰かだつて？

……… 忘れたの？

ワタシはシュテルンよ。

この話を読んでいるってことは、もちろん第一楽章の内容を知っているってことよね？ まあ、まさかいないとは思うけど、今までの話を知らないアナタの為に、今までのあらすじを教えてあげる。第一楽章を読んだアナタも、読みなさいよ。

親切でしょ？ 何故か？

ワタシにはアナタを導くという役割があるの。面倒くさいけど、この世界のルールだから仕方がないわ。

さて、無駄話はこのくらいにして、本題に入りましょ。

音の国ムズイーク

それは主人公の女の子フリアが、ある日突然連れて行かれた不思議な国。

動物達は二本足で歩き、生きているものは植物でさえも言葉を話

す。楽器は演奏者なしに音楽を奏で、指揮棒も勝手に指揮を振る。

たった一つ、ひとりでに奏でることが出来ない楽器　ピアノを奏でることが出来るのは、この世界では何故かローゼと呼ばれるフリアだけ。

ありえない世界、普通でない世界。

そこにいきなり放り込まれたローゼのに近づくのは、一癖持った美形天使達に性悪な王子。彼らは無条件にローゼを愛し、愛されることを望んでいる。

それぞれに抱きしめられたりキスをされたり……混乱するローゼがさらに混乱するようなことを王子は教える。

それは、天使達が自分に近づくのは『力の源』の為であり、自分から求めてしまうのは彼らがローゼを引き付ける力を持っているからだということ。

そして王子は言う。「天使でない僕が近づくのはそんな理由ではない」と……。

みんなに愛される、狂った世界。

時にローゼの命までも狙おうとする程彼女を愛す者達が現れるが、天使達によって『排除』される。

天使達のもう一つの顔は『音の国を守る者』。その為には何をしても構わない。たとえその手が血に染まることがあっても

ローゼがこの世界に来て、元の世界や過去を思い出さなかったのは、白の天使ヴァイスに貰った薔薇色の宝石シュテルン　つまりワ・タ・シ　による効果だった。

しかし残酷な過去は、日が経つにつれシュテルンの力を差し押さえてまで段々と姿を現していく。

時空間を操る者ツアイトに連れられ、ローゼの見た元の世界は、自分の存在が消え、自分のせいで亡くなったはずの父親と母親が、仲良く暮らしている幸せな光景だった。

私の居場所があるのはここではない

音の国に戻ったローゼは、そこにずっといることを約束する。

私の居場所があるのはここ、音の国ムズィークだもの

まだ重い過去を忘れることは出来ずにいる。

でもこの世界の生活には、どうにか慣れてきたみたい。

だけど……

物語はまだ終わった訳ではなかったの。

ここまでが今までのあらすじ。大雑把だから、気になる人は第一楽章を読んだ方が良いわよ。

じゃあ、次は前回までに出てきた主な登場人物を紹介するわ。

《フリア ローゼ》

主人公。お嬢様育ちで夢見がちな女の子。母親の前では上品な自分を演じるが、普段は普通の女の子。残酷な過去を忘れきれずにいる。ピアノとメーアが大好き。

《メーア》

フリアの飼い猫。ひなたぼっこが好き。いつもそっけない態度ばかりだが、フリアのことを慕う優しい一面も。

《アーツルト》

『治し屋』の店長。得意技は、一瞬で怪我を治すこと。何故か関西弁らしき言葉を話す。見た目は大きなイモリだが、よく見るとつぶらな瞳が可愛かったりする。

《クライ&ドゥング》

『仕立屋』のオーナー。リスの双子。一応クライが姉で、ドゥングが弟。唯一見分けることが出来るのが髪の毛の長さ。間延びした口調が特徴的。

《ヴァイス》

光を司る白の天使。その実体は天然天使。執事のような優雅な仕草や口調が得意。だが少し抜けたところがあるのが良いのか悪いの

か……。

《ブラウ》

水を司る青の天使。その実体は知的メガネ天使。聞こえはいいが、時々観察者の目になるのがキズ。興味のあるものはとことん知りたがる。

《ゲルプ》

雷を司る黄の天使。その実体はドS天使。Mでない人を虐めることとに執着する。時たま優しくなる！？

《グリユーン》

葉を司る緑の天使。その実体はドM天使。My鞭を常に所持。叩かれるのが好き。ちなみに、放置プレイはあまり好まないらしい。

《ロート》

火を司る赤の天使。その実体は単純天使。子供っぽいところが多々あり、一人よく動くし、よく喋る。

《シュヴァルツ》

闇を司る黒の天使。その実体はツンデレ天使。いつも冷徹で、あまり話したがらない。無表情が多く、考えていることもよく分からない。だが時々甘くなる……（？）

《モント》

完璧主義者の名に相応しく、見た目、頭脳、戦闘力、何においても完璧な音の国の王子。もちろんモテる。独占欲の強さと、上から目線口調がたまにキズ。銃系を使った戦いが大好き。

《ルプラ》

スタイル抜群なキャリアウーマン。国の警備役で、大人の女性。か弱い人を放っておけないタイプ。並外れた戦闘力があり、テレパシーを使うことが出来る。

《ツアイト》

時空間を操り、道を繋げることが出来る。男だけど派手なピンク好き。猫耳カチューシャがマイブームの、センスがよく分からない人。普段は時空の狭間に住んでいる。

《シュテルン》

薔薇色の宝石に閉じ込められていたが、ローゼがこの国に留まることを約束した瞬間、小さな女の子の姿で自由になった。気が強い

が、ローゼの言うことは聞く。

終わることを知らない物語は、第二楽章をむかえた。

新しい登場人物。明かされていない問題に迫る第二楽章。

平和なはずの音の国ムズイクに最大の危機が……訪れるらしいわ。

相変わらずみんなに愛されるローゼ。危険にさらされるローゼに、周りの人々は……

おっと、そろそろローゼが起きる時間ね。あの子は朝弱いから。

まあ、ワタシは睡眠が必要ないから理解出来ないんだけど。

続きは物語の世界で。

また会いましょ。

第二章・演奏開始（プロローグ）

光のない国が

光を欲するよつに

音のない国は

音を欲する

静せいの国ルイーヒ

その国も同じであった

彼らは

音を

音を持つ者を

欲していた

音を知ってしまった

愚かな国民は

狂った末に

次々と静の国を出ていった

過疎化していく静かな街

困った王子は

あることを考えた

一度音を知ってしまえば

たちまちそれに取り付かれてしまう

それならば

音を抹消してしまえばいい

この世に音がなくなれば

苦しむ者は無くなる

そう

たった一人

音を消すことが出来る少女

ローゼさえいれば……

そう考える

音を知らない王子は

窓から見える隣の国

音の国ムズイクを見て

静かに微笑んだ

さあ奏でましょう

戦慄のソナタを

第二楽章・演奏開始（プロローグ）（後書き）

お久しぶりです

ついに第二楽章開始しました！

新しいイケメンキャラ登場！（おいw）

前楽章の謎も解いていく予定です！

良ければまたお付き合い下さいm（）m

でわでわ

第二楽章・一、平和の閉幕

「ローゼ様、起きて下さい」

「んー、あともう少し……」

「また王子に怒られますよ」

その瞬間、毛布がガバツとはがされる。

「ローゼ、朝よ。起きて！」

「……分かったわよ」

朝に弱いこの少女の名前はローゼ。

「朝食の時間はとっくに過ぎていきますよ」

そして、困ったように言うこの男はヴァイス。

「早く準備しなさいよ。お腹空いた」

口を尖らして言うのは、小さな女の子の姿のシュテルン。

ここは音の国ムズイク。

みんながローゼを愛する世界。こんな狂った世界に、ローゼは留まることを決意した

「またいつもの時間だ。いい加減早く起きることは出来ないのか？」

「うーん……」

伸びをするローゼは、モントの言葉を完全に無視して椅子に座る。

「つつたく……」

「うわぁ。美味しそう」

「今日はボクが作ったんだよ」

厨房の方向から現れたのは、にっこり笑顔のグリユーン。中性的なその顔に、フリフリエプロンが妙によく似合っていた。

「……グリユーン？」

「ああ、このエプロン？　なんか洗濯してなくてこれしかないみたいなんだ。こんなの、メイドさんが着るものだよね」

そういうグリユーンの後ろで、クスクスと笑っているのはゲルプ。

「……とりあえず、いただきまーす！」

いち早くそれに気付いてしまったローゼは、見なかったことにして食事を始めた。

いつもと変わらない日々。ローゼとしての生活。これが正しい選択だったのかなんて、今でも分からない。

「はあ……」

明るく生きる。それが今出来る最大のことに。

この先

何があっても

『暇そうだな』

「そうね、暇だわ」

『今日は曇ってるから、あたしも暇』

メーアはふわぁとあくびをした。

「ねえ、久しぶりに街に出てみない？」

『最近城にこもりつきりだったあんたにしては珍しいね』

「そうかしら？ 新しいドレスが欲しくなったのよ」

外に出る為の服を選びだすローゼ。

『はあ、勝手にすれば』

メーアが呆れたようにそう言った瞬間、何かをメーアに押し付けるローゼ。

『ぐっ……！？』

目を開いたメーアが見たのは、楽しそうな表情のローゼのどアップ。

「あなたも行くのよ。ね、メーア」

『何……これ』

「あなた用のドレスに決まっているじゃない！　きつとよく似合うわ」

『……絶対着ない』

「何言ってるのよ！　あなた一応女の子なのよ。オシャレだってしなくちゃ」

『ヤだ。絶対』

「そんなこと言わないで！」

『じゃー』

人通りの多い正午過ぎ。結局派手なドレスを着ることになったメーアは、不機嫌顔でローゼの肩に乗っかっている。

だが、もっと不機嫌そうなオーラを出している人が後ろに一人。

「……全く。どうして私が女なんぞの買い物に付き合っただけでやらなければならぬ」

「そんなこと言わないでよ。他に手があいている天使が居なかったんだから」

「何故よりによって今日なんだ。女の買い物なんぞ興味ないし付き合いたくもない」

ぶつぶつと呟きながらもついて来るのは、黒の天使シュヴァルツ。

「でも、モーションに天使がついていないと外出しちゃ駄目って言われたのよ。仕方ないじゃない」

『諦めてデートだと思って楽しめば？』

「でっ……デートだと!? 貴様っ、なんてことを……」

妙に慌てているシュヴァルツに睨まれ、メーアも負けじとフーッと威嚇する。

「あれー? ローゼさまー?」

呆れるローゼの近くで、可愛らしい声がした。

「あら、あなた達……」

「ローゼさまだー」

「ローゼさまだー」

「久しぶりだねー」

「だねー」

「なんにちぶりかなー？」

「なんにちじゃなくて、なんかげつぶりじゃないー」

「そうだねー」

「会えて嬉しいよー」

楽しそうにぴよこぴよこと跳ねながら、ローゼの両脇でぺらぺらと話す可愛らしいリスの双子。柔らかな栗色の髪が、風に揺れる。

「ねえ、クライ、ドゥング」

「「なあにー??」」

同じ声が綺麗に八モる。

「新しい服が欲しいんだけど……」

「ボクたちいまねー、かいだしにいつてたんだー」

「そうそう。それでねー、いまかえるとこなのー」

「ボクたちにおまかせあれー」

「かわいいおようぶくたくさんあるよー」

二人に手を引つ張られ、そのままつれて行かれるローゼ。その様子を見つめて見ていたシュヴァルツは、軽いため息をついてローゼが消えた方向へ歩き出した。

「これもいいねー」

「こっちもすぐくにあつよー」

様々なドレスを持たされては、試着室に押し込められるローゼ。

「これもー」

「こっちもかわいいよー」

「これのほづがかわいいよー!」

「こっちのほづがにあつよー!」

「……………」

「……………」

しばらく睨み合うクライとドウング。

「ねえ、これのほづがかわいいよねー！」

「こっちのほづがあうよねー、ローゼさまー！」

「わ……分かった分かった、どっちも買ったから。ね、どっちも私は好きよ」

そう言いながらちらりとシユヴァルツの方を見るローゼ。彼は勝手にしるすでもいうように、視線をそらした。

「ありがとうローゼさまー」

「ではでは、おかけいしまーす！」

沢山の服を紙袋にどんどん詰めていくクライとドウング。

「待って！……こんなに沢山、持って帰れないわー！」

「なにいつてるのローゼさまー。こんなの、『むのづ』のやつらにしろにとけさせるからしんばいないんだよー」

「そうそう、あとは『むのづ』のひとがやるから、ローゼさまはまっつればいいんだよー」

「…むのづ」

「『無能』だ」

シユヴァルツがぼそりと呟いた。

「何よそれ、どんな人達なの？」

「お前が知る必要はない。用が済んだならさっさと帰るぞ」

冷たくそう言い放つと、店から出ていくシユヴァルツ。

「ちよっ……ちよっと待ちなさいよ!」

「ありがとうございました」

「ましたー」

急いでその後を追うローゼにぺこりと頭を下げるクライとダウン
グ。その後ろで、誰かの声があった。

「お呼びですか？ クライ様、 Downing様」

二人よりはるかに年上な青年が言う。

「そのおふく、きょうじゅうにしるにもって行ってねー」

「僕一人で……ですか？」

「むのうがくちごたえするんじゃないよー」

クライが服の山を指差して冷たく言う。

「きょうじゅうにできなかつたら、クビだからねー」

「……かしこまりました」

青年は酷くやつれているようであったが、二人はお構いなしに他の客の接客を始めた。

「……ねえ、何で教えてくれないの？」

「何のことだ」

さつさと前を歩いていくシュヴァルツを小走りで追いかけるながら聞くローゼ。

「ほら、さつきの無能っ……」

急に腕を引っ張られる。

「えっ、ちよっ……」

気が付いたら、路地裏に連れ込まれていた。

「シュヴァルツ……？」

視界が真っ黒になる。背中が、冷たいコンクリートの壁。シュヴァルツに覆いかぶさられていると気付いたのは、耳元で低い声がし

たときだった。

「黙って耳を塞げ。嫌な予感がする」

「えっ
」

パン！

クラツカーを鳴らした音が何倍にも大きくなったような鋭い破裂音がした。

「な……何なの？」

「分からない」

静かに言うと、ローゼから離れるシュヴァルツ。と同時に白い紙が数枚、はらりはらりと落ちてきた。

「シュヴァルツ……」

怖くなったローゼはシュヴァルツの服を掴む。

『なんか、大変みたいだな』

白い紙をくわえたメーアが、ローゼの腕から器用に肩に乗った。シュヴァルツはその紙を受け取る。そこには、几帳面な文字でこう

書かれていた。

《音は人を惑わせる

音は人を狂わせる

そんなものなど必要ない

三日後、音の国は消滅する》

「これって……」

パン！

再び鳴る不快な音に表情を歪めるローゼ。すると、急に腕を引かれた。

「こっちだ」

何事かと混乱している人々の間を上手くすり抜けながら、ローゼの手を引いて走るシュヴァルツ。

『おい、置いていくな！』

忘れられたメーアは軽いため息をついて歩き出す。その後ろに、怪しげな影が揺れた。

『まったく……仕方ないね』

それに気付かないメーアは歩き出そうとする。

『先に城に帰……ごふっ』

くたつと力の抜けた子猫を抱き抱えると、その黒い影はニヤリと笑った。

シュヴァルツに連れて行かれて着いたのは、ルプラの家の前だった。

「おい！ いるか？」

ドンドンとドアを叩いて叫ぶシュヴァルツ。

「クスクス、いつも冷静沈着な黒の天使様が、いつからそんな乱暴さんになっただい？」

この声は……

すぐ後ろで聞こえた声にとっさに振り返るローゼ。そこには、向こうの景色が見えるくらいに透けているツァイトがいた。

「凄い騒ぎだねえ。ルプラは仕事だよ。まあ、君も行かなきゃいけないんだよねえ、天使様」

混乱する人々の声、たくさんの足音の中で、のんびりと続けるツ

アイト。

「我が預かっておいてあげようか？ 忙しい天使様」

「……………」

シュヴァルツは、しばらく悔しげに俯いていた。

「貴様のような危険な奴に、預けるなどもつての外だ」

危険…………？

ローゼはシュヴァルツの言葉に疑問を抱く。

「クスクス。ではローゼを更に危険なここに放置して行くというのかい？」

ツアイトの言葉に、シュヴァルツは短くため息をついた。

「……………一つだけ言っておく。余計な真似はするな。今回は特別だ」

ローゼの肩を持ち、ツアイトの方へ押し出すシュヴァルツ。

「ローゼを安全な所へ連れていけ」

「クスツ、了解」

走り去っていくシュヴァルツを一瞬、鋭い眼光で見送るツアイト。すぐに優しい眼差しに戻し、ローゼの頬をなぞるように手を動かした。

「じゃあ、行こうか」

「どこへ?」

心配そうに言うローゼを安全させるように、頭を撫でるシマイト。

「クスクス、安全な所にだよ」

刹那、視界が暗転した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0665j/>

天使と奏でるソナタ

2010年10月8日12時42分発行